濃密な真夏の物語

リゼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

濃密な真夏の物語

【Nコード】

N6964W

【作者名】

リゼ

【あらすじ】

横浜天音学園の室内楽部に所属する姫路美音は、夏に開催される全国学生音楽コンクールに出場するアンサンブルメンバーとして、充実した夏休みを送っていた。そして大会は本戦を迎え、関西の地区大会を勝ち抜いた西日本代表の学生達が横浜市へと訪れ……。どうやら美音は、神戸からやって来た神南高校管弦楽部の部員である芹沢睦君に、一目惚れをしたようです。

そんな彼女と彼の、彼らを取り巻く周囲の人々を巻き込んだ、ドタバタ砂吐き甘々恋模様。

ノノ自サイトで載せている小説の転載です。

多少加筆修正をし、連作の短編を纏めました。なので、作品内容の時間軸は多少前後したりもしますが、順番に読んで問題無いようにしてあります。

登場人物紹介など

【】内で括られた部分は、原作ゲームを少し変更したオリジナル設定になります。

『姫路美音』

この物語のヒロインっぽい子。

天音学園1年。室内楽部所属、ヴィオリニスト。

オリジナルキャラクター、オリ主。

一度恋をするとやたらと一途なお嬢さん。小さいので簡単に持ち上がるらしい。

リストの楽曲を好む。

中学生の時に天宮に一目惚れし、「オレは今日から女らしくなる！」と友人に宣言した男前娘。が、猛烈アタックの末あっさり告白を断られる。

思考回路に常人と比較すると微妙なズレが生じやすい為、その言動はコントじみており、小動物として認識されやすい。

発言が紛らわしく、周囲に多大な勘違いを引き起こすトラブルメーカー。地は凶暴。

『芹沢睦』

神南高校2年。管弦楽部所属、ピアニスト。

この物語のヒーローらしい。

原作ゲーム攻略対象外キャラクター。

神南のアンサンブルメンバーであり、東金部長・土岐副部長と共に、大会期間中は菩提樹寮に滞在中。

穏やかな物腰のお兄さん。

部長に小間使いの如くこき使われているが、彼に対する尊敬の念は

(多分)強い。でも意外とちゃっかりさん。

俺様部長と副部長に振り回され、その無茶振りをソツなくこなす有能な少年。

家事に長け、気配りも出来、部長の半歩後ろに付き従う姿をよく見掛けるが、だからといって従順な訳ではないらしい。

『小日向かなで』

星奏学院2年。

原作ゲームにて、プレイヤーが操る本来の主人公。

この物語での彼女の性格は、筆者によるイメージ。

ヴァイオリン専攻の美少女。菩提樹寮生。

星奏学院に夏休み直前に転校してきた、音楽に対して真摯に取り組む努力家。誰に対しても優しく、またそこはかとなく天然さが漂い、その愛らしさに好意を寄せる男性が続出。

東金に演奏の欠点を指摘され、花とは何かを真剣に悩む日々。

『天宮静』

天音学園3年、室内楽部所属。

安定した技術力を誇る、天才的なピアニスト。

しかしその性格はかなり独特で、変人の称号を欲しいままにしている。

いつでも穏やかな空気を纏うが、男相手には微妙に意地悪？

師匠であるアレクセイを慕っているが、師からは「セイの演奏には、ワタシ好みの恋の艶がありません」と突き放され、恋の艶とはどんな音色？と、探し求めている。

【天宮にとってはアプローチや告白を受ける事はさして珍しい出来事でもなく、高校入学前で殆ど見知らぬ美音にさして興味もなかった為、彼女をつた事实はサッパリ覚えていない。

室内楽部の副部長が誰なのかゲームでは分からず、筆者の中では天宮氏が何故か副部長】

『冥加玲士』

天音学園3年、室内楽部部长。

神に愛された男、天賦の才を持つヴァイオリニスト。

海外のコンクールで数々の優勝をさらった経歴を持つ実力者。

横浜天音学園の理事長である養父のアレクセイから学園の実権を奪い、学園に君臨する理事。

星奏学院に転校し、コンクールに出場してきたかなでに対し、強いライバル心を抱く人。

【2年生の頃コンクールのソロ部門に出場し、東金と引き分け、互いをそこそこ認め合うもいがみ合う関係に】

『冥加枝織』

部長の妹。天音学園中等部2年。

ヒロインとも友人関係にある。

忙しいお兄さんを気遣う出来た妹であり、天使のようにたおやかで優しい心を持った、絶世の美少女。

ヒロインが憧れている、愛らしいお嬢様。

この物語では名前のみ登場。

『東金千秋』

神南高校3年、管弦楽部部长。

唯我独尊俺様、菩提樹寮の大改装を敢行したセレブな少年。

律をライバル視し、常に不遜で強気な態度を崩さない。

人の素質を的確に見抜く審美眼を持つ、齒に衣を着せぬ言動の傲岸不遜な自信家。

【上記の冥加のオリジナル設定付きなので、天音学園の生徒の演奏にある程度興味を抱く。

ヒロインをプリン呼ばわりし、お返しにチョコ様と呼ばれるお菓子様】

『土岐蓬生』

神南高校3年、管弦楽部副部長。ほんわかした空気の美少年だが、たまに何か企んでいそうな雰囲気醸し出す。

暑さに弱く、真夏の横浜では常にしどけない色香に溢れる美女風美男子。

女性に優しい。

『七海宗介』

天音学園1年。室内楽部所属のチェリスト。

気配りに長けた、心優しい少年。

部長である冥加に心酔し、心から尊敬している。心優しい少年だが、芯は強い。

【ヒロインの幼少期からの友人。愛らしい美少年。

気配りさんなので、気苦労が絶えない。幼少期からの印象が強いので、ヒロインの事は男友達に近い感覚を抱いている】

『氷渡貴史』

天音学園2年。室内楽部所属のチェリスト。

【一年前からヒロインと交流があった設定なので、ゲームと性格や設定がかなり変わっています。

冥加のカリスマ性に心から惹かれ、彼を尊敬し、冥加の側ではどこか行き過ぎた忠誠っぷりを発揮。

それでも友人達の前では、年相応の少年。基本的にヒロインの事は猿な小娘だと思っているが、ちゃんと友達でもあるらしい。

ヒロインとは気楽に付き合える友人として、結構楽しく学園ライフ満喫中】

『水嶋悠人』

硬派で男前。

星奏学院1年。オケ部所属のチェリスト、星奏のアンサンブルメンバー。

美少女風美少年の容姿に反し、生真面目でお堅い。

【ヒロインの友人。変なところで生真面目な彼女をそこそこ認めており、動機はともかく、女らしくなるならそれで良いんじゃないかと考えている。

意外と好戦的ところがヒロインと気が合うらしい】

『水嶋新』

軟派で男前。

至誠館高校1年。吹奏楽部所属。至誠館アンサンブルメンバー。

普段は明るい賑やか少年だが、高い感受性の持ち主。

【ヒロインの友人。

彼女を全く女の子として認識していない訳ではないが、あまりにも変わっているヒロインの事を友人以上に意識する事はまず無い】

『如月律』

星奏学院3年、オケ部部长。ヴァイオリニスト。星奏のアンサンブルメンバー。

菩提樹寮の寮生。

かなり天然気味。

口癖の相槌は「そうか」この一言で大抵の会話を切り返す、色々な意味で凄い人。

幼馴染みのかなでに期待を寄せる。

『榊大地』

星奏学院3年、オケ部副部长。ヴァイオリニスト。星奏のアンサンブルメンバー。

律とはいいコンビで、仲の良い友人。

女性に優しいフェミニニスト。

意外とお茶目？

大会には真剣に取り組んでおり、アンサンブルメンバーに常に気を配っているらしい。

『如月響也』

星奏学院2年。オケ部所属のヴァイオリニスト、星奏アンサンブルメンバー。

菩提樹寮の寮生。

天然な兄と幼馴染みに振り回され、懸命にフォローをするある意味
凄い人。苦勞人。そしてムードメーカー。

『八木沢雪広』

至誠館高校3年、吹奏楽部部長。

コンクールに参加する為に横浜を訪れた、礼儀正しい少年。

男子校に通っている為か、女性との会話は不慣れな模様。

至誠館のアンサンブルメンバーもまた、大会期間中は菩提樹寮に滞在
在中。

『狩野航』

至誠館高校3年、吹奏楽部副部長。至誠館アンサンブルメンバー。

明るくてハキハキした、チームの纏め役(?)なツツコミ担当。

新と一緒になっておバカな事をしている時が、最も輝いているとの
説もあり。

『火積司郎』

至誠館高校2年。吹奏楽部所属、至誠館アンサンブルメンバー。

黙って怒りの表情を浮かべているだけで、大抵の人間が謝り倒す、
厳つい男。

しかし本当は、部長を心底から尊敬し、親切で優しいナイスガイ。

『伊織浩平』

至誠館高校2年。吹奏楽部所属、至誠館アンサンブルメンバー
いつでも誰に対しても、穏やかで優しい平和主義者。
内気であまり強く発言出来ないが、メンバーの良心的存在。

『円城寺阿蘭』

関東芸術大学付属高校音楽科2年。オーケストラ部部員。
陽気な人物だが、東日本地区大会本番にて冥加の演奏に圧倒され、
途中棄権しようとする。

この物語では名前だけ登場。

登場人物紹介など（後書き）

芹沢「え、これ紹介が入るんですか？」

東金「一応、それなりに文章量はあるからな。続き物だから中編扱いらしいぞ」

七海「それにしても、紹介者の選択が間違っている気がして仕方が無いんですが……どうしてオレ、ここに居るんでしょう？」

冥加「俺とお前が居て何が悪い？　ちいはれつきとしたうちの部員だぞ」

七海「いえあの、部長は良いんです。（……東金さんと冥加部長が同席しているこの場から、早く帰りたいたい……）」

東金「そうだなあ、冥王？」

芹沢はれつきとしたうちの部員で、そっちのプリンが誘惑してくれただんだもんなあ？

しつかりと責任とらせねえと」

冥加「ふん。あれは芹沢よりも年少で、その上女だ。

世間的に見て、いったいどちらが誘惑したとみるだろうな」

七海（ひ、火花が……）」

芹沢「……誘惑云々の是非は俺でも彼女の方でもどちらでも良いので、作品紹介をしてくれませんか、部長」

東金「よし、この俺がしつかりと紹介してやろう。

この物語は……」

コンクールに参加する為にはるばる神戸から横浜を訪れた神南管弦楽部の部員・芹沢睦が、その地で無茶苦茶おかしな生物と遭遇し、その生態を認めた『気ままな観察日記』だ」

芹沢「部長、全く違うのですが」

七海「ある意味、間違っではないのが恐ろしい……」

冥加「ふん。所詮貴様には作品紹介など不向きだという事だ。俺がきちんとした紹介をしてやるう」

東金「ほーお？ そこまで自信满满なら、聞いてやるうじゃねえか」

芹沢「益々嫌な予感がするのは、何故なのだろう？」

七海（遠い目）

冥加「この物語は……」

派手好きな神南高校のメンバーに目を眩まされたちいが、芹沢にまんまと捕まってベタベタと懐いてゆく『甘えん坊姫サマーバケーション』だ」

東金「ほう……中々やるじゃねえか、冥加」

七海「新種の勝負と化してる……」

芹沢「……すみません七海さん、君にごく普通の紹介をお願いします」

七海「ええっ、お、オレですかっ？ えと……」

面食いで思い込んだら一直線なオレの幼友達が、相手の迷惑も考えずに積極的かつ強引に、一目惚れした芹沢さんにアタックしていく

『濃密な真夏の物語』です……」

芹沢「ぷっ……」

ウケたらしい

東金「ちっ。芹沢は七海の案を採用したか」

冥加「七海は我が部の秘蔵っ子だからな。当然だ」

七海「な、なんの話ですかっ!？」

芹沢「俺と彼女のそんなラブストーリーですが、どうぞお楽しみ下さい」

七海「って、芹沢さんはそれで良いんですかっ!?!」

お菓子姫

「天音のプリンチペツサねえ……言い得て妙だな」
うちの部長が他者を無条件で称賛するのは珍しい。

録音された東日本地区大会の二日目の演奏を聴き、彼はニヤリと笑う。

天音学園、去年部長とソロで一騎打ちをしたという、冥加玲土率いる室内楽部。

今年星奏の如月律はソロには出場しないらしいので、今年も彼と部長の対決になるであろう。

部長達が注目している天音学園の演奏、それは確かに他の出場校とは一線を画している。

1年生だというヴィオラ奏者の演奏、ともすればバラバラになってもおかしくはない個性的な他のメンバーの音色を包み込み、それでいて打ち消すのではなく共に舞い上げる。

チラリと情熱を覗かせて艶めている癖に、それでいてまだどこか純真なあどけなさをも含んで、媚びるでもなく誘いかける。

光輝ける天へと導く音色を響かせる姫君。

敬意を込めて『女王陛下』と呼ぶにはまだまだ成長途上。

誰が名付けたのやら、なるほど彼女の演奏は正しく『王女殿下』だ。その微笑みを得る為ならば、跪いても良いと思わせるカリスマを、確かに彼女は持っている。

いったいどんな人物なのか、横浜へと向かう新幹線の中で、興味を抱いたのは確か。

そして現在、俺の前に何だか小動物的な生き物が胸元で拳を握り締め、見上げて来ていた。

「睦さんっ、是非貴方を師匠と呼ばせて下さいっ！」

初対面から『可愛いから』なる理由で名前で呼んでくる変な生き物は、今度は俺を師匠と呼びたいと言いだした。

「貴女に教える事は、もう何もありません」

「ちよっ、まだ何も教わっていません!？」

師匠呼ばわりは勘弁して欲しく、免許皆伝を言い渡すとすかさず突っ込んできた。

彼女はボケとツッコミを両方見事にこなす、部長のお気に入りコマディアンでもある。

「お茶が冷めますよ。要らないのならば下げますが」

「要りますっ飲みますっ、むしろお代わりも下さい！」

少し意地悪く告げると、彼女は大慌てでカップを持ち上げ、紅茶を含み……顔が崩れる。だらしなく緩むと表現しても良いが。

「美味しい……睦さんすごい……一生ついていきたい……」

相好を崩し、うっとりとした甘い声で陶然と呟く。

俺はその台詞に、深く溜め息を吐く。

「そうですね。ですが俺は美音さんに付き纏われるのは御免なので諦めて下さい」

「ああつ、即座にフラれた！」

睦さん手強過ぎる。やっぱり東金さん一筋なんですわっ」

「美音さん、誤解を招く言い方は辞めて下さい」

ぶくと膨れる美音さんに、俺はすつと茶菓子を差し出す。

「今日は小日向さんがプリンをお裾分けして下さいだったので、どうぞ召し上がって下さい、プリンさん」

「睦さんまでプリン呼ばわり！」

プリン呼ばれるのは、チヨコ様からだけで十分ですっ！」

命知らずなのか対抗なのか、彼女はたまに部長をチヨコ様呼ばわりする。

「うつつ、私にプリンだなんてかなでさん……洒落なのっ、嫌がらせなのっ、単なる天然なのっ!？」

「ただお菓子を作ろうとして、プリンの材料があっただけだと思いますよ」

サラッと告げて、空になった美音さんのカップにご希望のお代わりを注ぐ。

「それにしても流石は部長。

貴女のあだ名にプリンは、ピッタリですね」

小日向さんお手製のプリンをスプーンですくい取り、味わってからしみじみと呟く。

「そっ、それは……」

性格が甘っちょろいとか、肌が黄色っぽいとかそんな意味なんです

か睦さん」

シクシクと泣き真似をしながら、それでも美音さんはプリンが美味しいと喜ぶ。

「さて、貴女がそう思うならそうなのでは？」

「うつつ、睦さん意地悪……」

「なるほど、美音さんは意地悪な俺を期待されている、と。」

それなら明日から貴女をお茶にお誘いするのは辞めておきましょう」

わざとらしくうんうん、と頷くと、慌てたように手を掴まれた。

「ごめんなさいっ、私は優しい睦さんが大好きだから、またお茶に誘って下さいいっ」

「……………」

……はあ……

分かりましたから手を離して下さい、美音さん」

俺は深く溜め息を吐いて、彼女の小さな手の中から自分の手を抜き取った。

「睦さん」

「はいはい」

上目遣いに見上げてくる美音さんから視線を手元のプリンに落とし、ゆっくりと続きを味わう。

柔らかくて滑らかで。

ふんわりと良い匂いがして。

口に含むと、舌の上で甘く蕩ける。

それでいてカaramelが苦味をもたらし。

彼女は本当に、プリンのような。

西からの襲撃者

神奈川県横浜市、毎年夏に行われる、全国学生音楽コンクールの舞台会場であるみなとみらいホール前にて。

「うあーっーいいいい」

この物語の主役の片方である少女は、じりじりと容赦なくその身を丸焼きにしようと降り注ぐ日差しに日傘を差しつつ背中を丸め、情けなく呻いていた。

彼女の名は姫路美音、高校一年生。横浜天音学園に通う特待生である。

横浜天音学園……普通科は存在せず、音楽科の生徒のみが入学する、函館に本校を置く、横浜へは近年新設された私立高校である。

美音が学園にて所属する部、室内楽部は今年の学生音楽コンクールに出場しており、八月に入った現在、天音学園室内楽部は地区大会を順調に勝ち抜き、今日はいよいよ本戦となるセミファイナルの説明会が行なわれたのだった。

「うあーっーいいいい」

白い天音学園の制服を身に纏い、白い日傘を差して歩く……と形容するとどこことなく愛らしさを感じるが、相変わらず人目も憚らず呻き声を上げる美音は、どこからどう見ても関わり合いになるのは避けた方が無難な変人である。

生憎と友人達や部活仲間達はそれぞれに用事があるとかで、帰り道や午後からの時間を一緒に過ごしてくれる人がなく、本日は独りぼつちで説明会会場からの帰り道をトボトボと歩いていた。

暑さを紛らわせるべく、理想的な三時のおやつについて、妄想の翼を羽ばたかせてみる。

香り高いアイスティーに、中はフワフワで外側はカリツとした焼きたてのワッフルに、生クリームとアイスクリームを添えて……いかに、涎が。

何故か脳裏のBGMに煌びやかな演奏も流れ、そのお陰でティータイムを彩る光景は麗らかな庭を眺めやるテラスに出されたテーブルにイス、繊細な刺繍が施されたテーブルクロスが敷かれ、花瓶に生けられた花は美しいピンク色のバラ。

そして美音が座るイスの向かい側には、なんだか素敵な男性……妄想上の登場人物につき、詳細は省く……否応無しに、益々気分はヒートアップ。

と、彼女のうつとりとした気分には水を差すように、不意に美音の周囲から黄色い大歓声が上がった。

何だ何だ、何事だ？

現実と回想を半ばウロウロしていた美音は、ようやくすぐ側で野外ライブが行われており、演奏を終えた彼らに女の子達がキヤーキヤー騒いでいる事態を把握する。

なるほど、先ほどのうつとり気分に一役買ったキラキラBGMは、彼らのお陰だったらしい。

あの華やかな音色は、サイレントヴァイオリン……だろうか？

そして何よりも、軽やかに閃くかのような、キーボードのあの演奏。美音は何故か胸が騒ぐのを覚えながら首を伸ばして、演奏者の姿を

確認してみようとするが、どうにも人垣が邪魔でよく見えない。こ
ういう時は非常に、世界中のモデルが羨ましくなる。
ぐるりと辺りを見回して、ふと見覚えのある人物を目に止めた。

「あゝ、かなでさあんっ」

天音の美少女こと冥加枝織にも引けを取らない星奏の美少女、と美
音が勝手に認識している小日向かなである。

この美しき少女こそ、我らが天音学園室内楽部の部長、冥加玲土が
ヴァイオリニストとしての人生において最も強く激しくライバル心
を燃やし、コンクールでの対決を待ち望んでいる強敵……
らしいのだが、如何せんかなでの見た目は愛くるしく礼儀正しい少
女なので、ただでさえ大柄で無表情だったり威圧的で迫力満点な部
長が彼女に向かってライバル心を剥き出しにすると、何か犯罪的な
匂いが漂う。

部長の心情はともかくとして、美音にとってのかなでは他校に通う
優しく親切な先輩で、慕わしい人だ。

喜び勇んで彼女駆け寄ると（美音のこの辺りの行動パターンが、ハ
ルに言わせると新とそっくりらしい）、直射日光を浴びている彼女
の頭上に日傘を差しつつ、

「ご機嫌よう、かなでさん。」

こんなところでお会いするなんて、奇遇ですね」

美少女と話す時は微妙に緊張してしまい、まるで口説いているよう
な口上になった。こんな調子なので、部長も美音を妹に近寄せた
がらないのだが。

「あ……美音ちゃん。

こ、こんにちは」

「……！」

美少女は涙ぐんでいた。

美音は周囲を見回し、連れであろう星奏の副部長、榊大地を胡乱な目で見上げる。

「こんにちは、姫路ちゃん。何かな、その目付き。

……言っておくけれど、俺が泣かせたんじゃなくて、彼女は演奏に感激したんだよ？」

「こんにちは、榊さん。

ええ、貴方がかなでさんを泣かせただなんて、全くちつとも疑ったりなんてしておりませんとも」

この人を疑うのは性急だったようだ。

恥じ入りつつ、ライブが撤収されていく様子を眺める。

すっかり魅了されたらしいファンの女性達の、興奮しながら去ってゆく会話を小耳に入れる。

どうも、彼女らにとって素晴らしい演奏会だったみたいだ。全部聴きたかったなあ……

「よう地味子。なんだ、お前らも聴いてたのか」

などと残念がっている美音はさておき、その時どこからか、何だかやたらと偉そうに上から目線な声が掛けられたのだった。

地味子、だなんて随分変わった名前の人がいるものだ。

地味子呼びをしたのは、ステージの上に立って演奏していた、サイレントヴァイオリンの弾き手2人の男性のうちのどちらかのようで、こちらの方に目を止めている。

ん？ と後ろを振り返るが誰もいない。

じゃあ誰の名前なんだ、いったい？

そんな疑問を抱いている美音をヨソに、ステージから颯爽と降り立って歩み寄ってきた華やかな雰囲気男性2人は、気楽にかなでと榊と会話を始めた。

どうやら驚いた事に、『かなで』地味子』のようだ……

どうも、この2人は神南のアンサンブル出場者で、地味子と言うのはかなでさんに1stの演奏に相応しい花が無いので、部長の東金さんの方が勝手にそう呼んでるらしい。

凄い。この美少女を指して地味子。なんて剛毅な。

だが、東金さんの傍らの副部長の土岐さんは、男性だてらに無駄に美しく妖しい色香を漂わせている。

確かに、こんな人を常に見慣れていたら、大抵の美少女は地味に感じるかもしれない。

全員明らかに美音よりも年上のようなので、勝手に口を挟むのも気が引けて黙っていると、かなでさんにアドバイスなのか意地悪なのか判断しにくい話をしていた東金さんの視線が、何故かこちらに向かった。

ひい、この手の俺様系部長様は、うちの部長だけで十分です。何か厳しいお言葉を賜るのだろうか、瞬間的に身を固くする。

「こっちの小さいのは、お前の連れか、地味子？」

俺様は初対面で小さいの呼ばわりをして下さった。

まあ、美少女が地味子呼ばわりなんだから、美音の特徴で目に付くのはチビだという事だったのだろう。嬉しくない。

「彼女は天音のヴィオラの、姫路美音ちゃん。
通称天音のプリンチペツサだよ」

榊が紹介を下さったので、東金と土岐にお辞儀をしようとして……何か変な紹介だったので思わず榊に日傘を向けていた。

「ちよつ、榊さん何なんですかつ、その通称!？」

「姫路ちゃん、傘を振り回すのは危ないからやめようね」

美音の傘スイングから榊はひょいっと身を躲し、飄々と忠告する。

「天音のプリンチペツサ? このちびが?

イメージと随分違うな……」

「そうか? なんや実物はえらい可愛いやないの」

東金は首を捻り、土岐はクスツと微笑む。彼の言う「可愛い」の意味合いには、頭に「ちまっこくて」が付きそうなニュアンスがあった。

「何故かその通称で通じてるーっ!？」

ズガン! と体を傾ける美音。

「ほら、東日本地区の大会の時、美音ちゃん円城寺さんからそう呼ばれてたじゃない?」

かなでが執り成すように説明してくれたところによると……

要するに、地区大会での昼休憩時間に円城寺を励まし、かつ午後の部での演奏の様子や終了後の円城寺の台詞から、美音は『天音のプ

リンチペッサ』なる呼び名で冗談半分に呼ばれ始めたらしい。
あれはただ単に、円城寺擁する関芸大付属のアンサンブルと、午後
の部もしっかりと演奏で競い合いたかったからこそ、美音は彼らを
ヨイショしたり宥め賺して、舞台の上へ引きずり出しただけなのだ
が……

天音学園と理事会を牛耳る理事である冥加の、どうやら多少はお気
に入りらしい美音は、大会以前から学園の中でもたまに「ちい姫ち
ゃん」だの、「まるで室内楽部のお姫様か？」なんて、大多数は冗
談半分にお面白がりつつ、からかわれていたが……ついに学園の外
の人間にまで！

「まあまあ、姫路ちゃん。

あだ名なんてそんなものだよ。良かったじゃないか、可愛い呼び名
で」

「うつつ……嬉しくないっ……」

悶える美音に、神は優しく微笑みながら爽やかに諦めると告げてい
る。

「向こうは褒めてくれたんだし」

受け取る側の人間が喜べない類いの内容は、決して『褒め言葉』な
どではない。

むしろこのこつ恥ずかしい通称が独り歩きして初対面の相手にまで
定着しているなどと、嫌がらせの意を込めていたのではないのか？

「うつつ、嫌なお方の親切よりも」

「好いたお方の無理が良い？」

思わず呟いた美音の歌を続けられて、ハツと顔を上げると、綺麗な土岐さんが悪戯っぽく微笑んでいた。

「姫路ちゃん、都都逸好きなん？」

「土岐さんもですか？」

「うわ〜なんだか感激ですっ」

都都逸を解する十代は非常に珍しい。何しろ男女の恋情を歌った俗曲だ。美音の周囲の同世代の友人達にも好んで歌う人は流石に居ない。

「いややな、土岐さんやなんて他人行儀な。

蓬生さん、て呼んでくれてええよ？」

口許に人差し指をあてがい、悪戯っぽく言われる。無駄に色香溢れる仕草だ。

「はい、蓬生さん。

都都逸は粋ですよ〜」

「粋やね〜」

ほわ〜んとした雰囲気に含まれる、同好の志。

そこへ、呆れたような東金の呟きが割り込んできた。

「ステージの上と下りてからじゃ、随分印象が変わるな、天音プリン」

「益々変な呼び名になってます、東金さんっ！

私も円城寺さんから呼ばれた時は、それ連想しましたけどっ！」

いきなり妙なあだ名が更に変な風に改造されて、思わず美音はビシ

ツと突っ込んだ。

「お前には、天音プリンで十分だろ。そっちの方が似合うぜ？」

「否定出来ない自分が悲しいっ！」

頭を抱えていると、東金さんの背後から「お話し中失礼します」と声が掛けられた。

多分、チラッとステージの上が見えた時にキーボードを弾いていたお兄さんだ。

「部長、撤収の作業が終了しました」

「ご苦労。部員達は解散して良いぜ」

「はい」

「あ、あのっ」

頷いて立ち去ろうとする彼に、思わず美音は声を掛けていた。

目が合うなり、美音の心臓は突如ズキューンッ！と撃ち抜かれたかのようによるめき、動悸が激しくなっていた。

「……………何か？」

「私、天音学園の姫路美音です。先ほどの演奏、素敵でしたっ！
貴方のお名前を伺っても宜しいですか？」

怪訝そうに尋ねられ、ここで会話を途切れさせては終わりだとばかりに、美音は早口で喋ってじっと彼を見上げた。

何故か非常に困った顔をされたが……………もしかして、彼は急いでどこかに行きたかったのかもしれない。

「……………俺は神南高校2年の、芹沢睦です。よろしく」

溜め息と共に、握手の手が差し出された。

「むつみさん……よろしくお願いしますっ!」

美音は迷わずその手をギュッと両手で握って、上下にぶんぶん振る。

「何故俺は初対面の貴女から、名前で呼ばれているのでしょうか」
「え……」

益々怪訝そうな顔をされて、つい言葉に詰まった。

まさか「せりざわさん」よりも「むつみさん」の方が響きがより可愛いからだなんて、正直に言っても良いものだろうか。
恐る恐る告げると、非常に嫌そうな顔をされた。

「え、ええと……」
む、『睦さん、て呼ばしてもらってもええ?』

土岐を真似て口許に人差し指をあてがい、上目遣いにおねだりしてみる。

「なんや、俺の真似っこかいな。悪いやつぢやなあ」

「え、これが神戸の流儀じゃないんですか蓬生さん!？」

てつきり、これがノーマルなのだと思っていたのに。

「……はあ……」
どうぞ、お好きなように」

そんな美音と土岐のやり取りに呆れたのか、溜め息混じりに許可が下りた。

わーい、と両手を上げて万歳をすると、腕に掛けていた日傘が滑り落ちて先端が爪先を直撃。

「のおおお」

「……本当に、舞台上の上と違い過ぎないか、あいつ？」

「そこがええんやないの」

痛みに蹲る美音に、呆れた呟きを放つ東金と、微笑ましそうに表情を緩める土岐。

「芹沢君に真つ先に目え付けやなんて、見る目あるわあの子」

「天音も中々面白い人材が入ったようだな」

「せやね」

その後、神戸からの客人方は横浜観光をご希望なされた。

かなでも最近横浜に来たばかりだと聞き、美音は張り切って横浜観光案内に乗り出した。

横浜の良さをばっちり堪能して頂くべく、ニコニコとかなでと並んで日傘に入り、可愛い笑顔にほわ〜んと見入る。

「まるで女の子同士のデートを邪魔している、無粋な男みたいだ」

などと、榊にからかわれたが、個人的にはこの美形だらけの男性陣に囲まれるのは、非常に勇気がいると思う。

何故かなではあんなに平然としていられるのか、やはり美少女は何かが違うのか？

観光巡りが終わり、星奏の寮であるリンデンホールに送り届ける。帰る前にお茶でもと誘われ、有り難く足を踏み入れたホールは……

まるで美術館さながらの豪華さだった。
美音は思わず玄関口でズザツと後退る。

「か、かなでさん……以前お邪魔した時とは、かなり内装が違っように見受けられるんですがっ」

それはもう、豪華度9割増しぐらいには。

「ああ、これ？」

東金さん達がわたし達が寝てる間に、一晩で改装しちゃったのよ。
凄いよね」

かなではチカチカで煌びやかな玄関ホールを全くものともせず察へと上がり、朗らかに告げる。

「……凄いっ、東金さんてブラウニー!？」

思わず東金を見上げて尊敬の眼差しを向けてしまった。

「はあ？」

意味が分からない、と言うように首を傾げる彼の傍らで、かなでが、

「チョコレートのこと？」

と首を捻る。

「おい、プリン。」

お前、自分が卵菓子呼ばわりされてるから、この俺もチョコ菓子呼ばわりか。良い度胸だな」

「ちつ、違います〜!?!」

「千秋がチヨコレート菓子!

「なんや、美味そうな集団になってきたやん」

額に青筋を浮かべる東金の傍らで、土岐がくくくと笑う。

「部長、恐らく美音さんが言いたいのは、イギリスの民間伝承の妖精の事だと」

芹沢がそつと口を挟むので、慌てて頷く。

芹沢の美音の呼び方が「美音さん」になっているのは、初対面から睦さん呼びになった意趣返しの意味が含まれているのだろうか。

「確か、家人が寝ている間に掃除を済ませておき、家がピカピカだと逆に散らかすという、悪戯妖精です」

芹沢のサラリとした説明に、ちよっぴり嫌がらせの意を感じるのは気のせいだろうか？

「……………ほお……………おいプリン、人を掃除妖精扱いとは、随分生意気な口を叩くもんだな？」

「悪戯妖精……………」

いったいどんな想像をしたのか、榊が口許を押さえて身を震わせている。

「うわ〜んっ、褒め言葉のつもりだったんです〜っ」

美音は東金の表情に恐れをなし、懸命に謝意を示した。

やっぱり、俺様な部長様は敬意は抱いてもちよっぴり苦手だ。

診断、恋煩い 症状 1・激しい鼓動の正体

全国大会、その説明会の後の野外ライブを終えた神南アンサンブルメンバー。

その後、横浜観光をする！ と言い出した部長に、何故か話の流れでその道中に付き合わされる羽目になった芹沢は、面倒に思いながらも渋々と部長副部長に従って歩いていった。

観光に乗り出したメンバーは、言い出しっぺの俺様部長東金、暑さにうんざりしている土岐、東金から地味子地味子と呼ばれている美少女かなで、星奏のヴィオラ奏者榊、天音のヴィオラ奏者プリン……もとい美音。

かなでと並んで日傘で相合い傘をしつつ、横浜の案内に勤しむ美音の弾んだ声音の説明を耳に入れながら、芹沢は潮風に吹かれて少し乱れた髪をかき上げて、視界の邪魔をしないよう耳にかける。

日本の夏は、とても暑い。

こんなにも暑くては大抵の人間は気力が萎えると言うのに、どうしてうちの部長はあんなに元気なのだろう。

「睦さん、どうぞ」

元気一杯の東金を眺め、常日頃からの疑問を改めて感じていた芹沢の目の前に、差し出されたソフトクリーム。

同行しているメンバーの中で、彼の名を呼ぶのは美音だけだ。

響きが気に入った、可愛いなどと意味不明な理由を目一杯力説してくれた、珍妙な小動物を見下ろして。

「有り難うございます」

有り難く、彼女の手からソフトクリームを受け取る。こっちは暑くても、冷たい物がいくらでも食べられそうだ。

彼女と並んでベンチに腰掛け、2人揃ってソフトクリームを食べつつ、遠くの水平線を眺め。

なんだか驚いてしまうほど、のんびりとした一時。

普段ならば、芹沢は東金から何だかんだと用事を言い付けられ、駆けずり回る羽目になると言うのに。

今日の東金と土岐の関心は、どちらかと言うと星奏の2人に向いている為か、四人で賑やかに語らっている。

土岐と榊の間につつすらと漂う、微妙に険悪な空気も、東金が当然のようになでにあれこれと言いつける姿も、こちらに火の粉が降りかかりさえしなければ、なんと平穏な空間である事が。

「睦さん、これを食べたなら次はマリントワーに上りましょうね」

隣の美音もまた、賑やかな四人の姿を微笑ましそうに見遣ってから、芹沢に笑いかけた。

「マリントワーですか。」

今日はよく晴れていますから、眺めも良さそうですね」

「はいっ。きつと富士山まで見えますよ！」

「……冗談でしょう？」

横浜からの距離を考えて、流石に少し無理があるのではないだろうか、と疑いを示す芹沢に、美音はムツと頬を膨らませて。

「本当に見えるんですってばー！」

「そうなのですか。それは楽しみですね」

ムキになって言い募る美音に、芹沢は話半分に聞き流して鷹揚に頷いた。

その態度に、彼女は「ホントなのにーっ」と唸っている。

「睦さんも、横浜の綺麗な景色にびっくりして見蕩れば良いんだ」
その表情をばつちり逃さず目撃してやるんだから、などとボソボソと呟く美音を見下ろして。

「つまり、貴女はこれから今日一日中、俺を観察するのですね」

暇な人だな、と思いながら尋ねてみると、彼女は「う？」と不思議そうに芹沢を見返してくる。

「そ、そう……なります、ね？」

早速観測を開始したのか、美音はじーっと視線を寄越しつつ、芹沢を一心に見つめ。

自分の驚く顔を見れたとして、それを眺めて何が楽しいのだろう、そう思いながら見つめ返していると、美音は頬を染めて視線を逸した。

睨めっこは芹沢の勝利らしい。

「睦さん、何でそんなに私をじっと見るんですかーっ」

照れたように頬を染めたまま、上目遣いに見上げてくる小動物を見下ろす。

「特に意味はありませんが？」

ただ、何となく、彼女のクルクルと変わる表情を眺めているのは中々面白い。

「美音さんは」

彼女の方が名前で呼んでくるのだから、別にこちらとて名前で呼んでも良いだろう。

そう思つて彼女の名を口に出してみたら、しつくりと馴染むような感覚がして。

姫路さん、よりも美音さん、の方が呼びやすい。

「声が綺麗ですね」

ふと、感じた事を伝えてみたら、彼女は益々頬を赤らめて「有り難うございます」と、微笑んで。

貴女が俺の名を呼ぶ声は、不思議と耳に心地良い。

それから、気恥ずかしげに頬を染めてはにかむ表情は、何だか可愛い。

「ところで美音さん」

もう一度、口にした彼女の名前。それを発するだけで、とくとくと早まる心臓の音。

「ソフトクリームは食べないのですか？ 溶けますよ」

「え、わわっ？」

ゆつくりと溶け出し、美音の手を汚してしまっているそれを指摘す

ると、彼女は慌てたようにソフトクリームを舐め出した。
芹沢も残ったコーンをバリバリと噛みつつ。
溶けて零れ落ち、自身の手に滴った白くて甘い水滴を舐めとる美音の姿を何気なく眺めながら。

(頬にも付いてる……)

美味しそうにソフトクリームをあむあむと食べる美音の頬に付いたそれが視界に入ってしまった、彼はポケットから取り出したハンカチで拭ってやった。

「すっ、すみません……」

「いえ、たいした事ではありませんので」

口の回りを汚しつつ食べている事にようやく気が付いて、やっぱり赤くなる美音を眺めるのは、別に嫌ではない。
むしろ、笑ったり頬を染める彼女を眺めていると、何故か心臓がやたらと不規則な動きをする事の方が、問題だ。

「……あいつら、ちゃっかり2人の世界を作ってねえか？」

「あれま、芹沢クンの好みは姫路ちゃんみたいな子やったんか。」

「こら、下手にちよっかいかけたら恨まれそうやな」

「凄いつ、美音ちゃんって、積極的な子だったんだ」

「やれやれ。あの調子だと、すっかり俺達の存在を忘れていそうだな」

診断、恋煩い 症状 2 ・不思議な涙

マリントワーの展望台に上った一行は、横浜の眺望を存分に眺めていた。

「本当に綺麗ですね」

感心したように、遙かな遠く霞む彼方まで見渡して、美音に微笑みかける芹沢に、彼女はエツヘンと胸を張り。別に彼女が設計に携わった訳ではないが、やはり遠方からの来客に地元を褒められると、誇らしい気持ちになる。

そう感じたところで、美音は改めて風景に見入っている芹沢の横顔を見上げて……何か得体の知れない不安な気持ちに見舞われた。

芹沢は、この夏のコンクールに参加する為に、兵庫県から神奈川県まで回るばかりの訪れたのだ。

夏が終われば、今、自分のすぐ傍らに立っている彼は、故郷に帰ってしまう。

今日、出会ったばかりの人間に対して、何を考えているのだろうかと自分でも思ったが、明確な別離のタイムリミットは、既にカウントが開始されているのだ。

秋になれば。その時にはもう、彼はここには居ない。

美音と出会った事など、綺麗に忘れ去ってしまえるぐらい、遠く離れた彼の生まれ故郷へと帰っている。

「美音さん、本当に俺を先程からずっと眺めていますか、よく飽きませんか」

流石に視線が鬱陶しくなったのか、芹沢が美音を見下ろして苦笑する。

「だってまだ、すごくびびくりした睦さんの顔を見てませんもん」

それに、綺麗な顔立ちの芹沢の横顔は、いくら眺めていてもちっとも飽きない。

ああ、美人はなんて得なのだろうか。

「ねえ、睦さん」

私ともっと一杯一緒に居てくれませんか、この夏だけじゃなくて、もっと、もっとたくさんの時間を。

だけど、そんな言葉は決して口には出せない。

「なんですか、美音さん？」

眼差しを和らげて問い掛けてくる彼に、美音は笑って誤魔化しつつ、

「このマリントワーって、見た目が灯台みたいな形をしていますけど、本当に灯台の機能も持つてるんですよ」

「そうなんですか？ 随分大きな灯台なんですね」

瞬きをして感心している芹沢に、ギネスにも世界一大きな灯台として載ったんです、と相槌を打ちつつ。美音はさり気なく、先程までよりも半歩だけ、芹沢に近寄ってみる。

ずっとずっと、側に居られたら良いのに。

もっと近くで暮らして欲しかったら良かったのに。

せめて今だけは、もう少しだけ、貴方の近くにいきたいです。

殆ど触れ合いそんなほど、芹沢の近くに並んで立ち。

「あちらに見えるのがうちの学校で、向こうが星奏学院ですね。どっちもやたらと校舎が派手だと思いませんか？」

綺麗綺麗な、豪華な建物を笑いながら指し示し、芹沢に同意を求めてみる。

「うちの高校の校舎よりは、慎ましかで控え目で好ましい造りですね」

芹沢はしれっと「神南の方が煌びやかにド派手」だと答える。

「……………どっ、どんな学校ですか、神南高校っ？」

いったい、天音星奏両校を凌ぐ凄まじい美麗さの学び舎とはどんなものなのか、サッパリ想像もつかない。

「……………そうですね。」

言葉で説明するのは少し難しいです。

実際に美音さんがお越しになれば、きっとすぐに納得して頂けると思いますよ？」

ふふ、と悪戯っ子のような笑みを浮かべる芹沢に、美音はコクコクと頷いて。

「それは是非とも行ってみたいですよ」

「そうですね。では、その時は俺が美音さんをご案内しますね」

いつになるのか、果たされる日が来るのかどうか。

ハッキリとした答えが分からない、そんな曖昧な口約束ではあったけれど。

たとえ社交辞令でも、その場のノリでも冗談でも。

横浜で出会った美音と、これっきりで終わる交流ではない、そういった意図を示してくれた事がとても嬉しくて。

胸が一杯になるような、不思議な幸福感で足元がフワフワする。

悲しい訳でも無いのに、何故か目の奥が熱くなって。

慌てて芹沢から顔を背けて、瞼の辺りを指先で拭う。

「美音さん、どうかしましたか？」

不意に俯いた美音を訝しがって、芹沢が問い掛けてくる。

「何だか太陽の光が眩しくて、目がチカチカしちゃいまして」

もう大丈夫ですよ、と笑顔で請け負い、

「睦さん睦さん、今度はお土産コーナーに行きましょう」

「横浜浜に到着した初日から土産物の物色ですか？」

「今から目をつけておいて、帰る前にササッと手早く買うのです！」

和やかに会話を交わす芹沢と美音から、微妙に数歩離れた位置に固まっていた、東金、土岐、かなで、榊の4名は、そんな彼らの様子を観察しつつ。

「芹沢の奴、面倒そうな顔してた割には、自分が一番観光を楽しんでやがる」

「いやあ、あれは姫路ちゃんと居るからやる？」

「美音ちゃんの芹沢君を見つめるあの眼差し……」

もう間違いないですね、大地先輩！」

「ひなちゃんもそういう話が好きなのか、やっぱり女の子だね。

俺は、そうやって目をキラキラさせてる君の方が可愛いと思うよ？」

「おい地味子、榊のみえみえの世辞を真に受けてんなよ」

「……お、お世辞……」

「小日向ちゃん、千秋の性の悪い台詞は聞き流しとき。

アンタは可愛いいで？」

「え、あの」

「……土岐、うちの可愛い後輩にコナをかけないでくれるかな」

「あれまあ、無粋なナイトはんやな」

「こっちはこっちで、妙な三角関係が形成されつつあるな」

診断、恋煩い 症状 3・高揚感とため息の関係

横浜観光を終了して菩提樹寮に帰還した一行。

美音と榊が帰る前に、と芹沢は早速お茶を淹れてティータイムの準備をする。

普段は東金から命じられ客人に供する事が多いが、今日ばかりは芹沢は率先して支度に動いた。

部長や副部長にお茶を淹れるのはいつもの事だが、他のメンバーに提供するの初めてだ。

僅かに緊張を覚えつつ、ラウンジのチェアに腰掛ける彼らに振る舞う。

榊やかなでは、はっきり言ってしまうばついでだ。

彼の緊張の源は、非常にリラックスした風情でかなでの隣りに座り、興味深そうにラウンジの内装をしげしげと眺めている。

「どつぞ」

コトン、と小さく音を立ててティーカップを彼らの前に差し出し、

芹沢は美音の真正面に腰掛けて、彼女の表情をしげしげと観察する。

カップを持ち上げて、紅茶の香りにうつとりと目を細め。ふう、と唇を可愛らしく尖らせて小さく息を吹き掛けていったん冷まして。

口許までカップを運び、コクンと一口飲む。

その美音の一連の様子を子細に観察している芹沢にも、そんな後輩をマジマジと見つめている東金と土岐の視線にも、全く気が付かぬままの彼女は、

「美味しい〜」

ばあああつと表情を明るく綻ばばせ、芹沢に笑いかけた。

「凄いです睦さんっ！

私が今まで飲んだ紅茶の中で、ダントツでぶっちぎりに美味しいです！」

「そうですか。美音さんのお気に召して何よりです」

目を輝かせて芹沢を褒める美音に、彼もまた微笑み返して。

彼女から尊敬の眼差しを向けられると、先程までピンと張り詰めるように緊迫した緊張感は消え失せ、代わりに世界がキラキラと煌めくような感覚に包まれ。ふわりとしてくすぐったいような、照れ臭いような。

嬉しそうに紅茶を飲む美音を眺めて、芹沢もまた幸福感に包まれて微笑んでいた。

昨日までは確かに、嫌味なほどに周囲に気配りを忘れない後輩であったのだが、今の彼は明らかに美音しか見えていない。

芹沢の変わりように、部長と副部長はしみじみと、恋のもたらす強い影響力を実感していた。

お茶を飲み終えそれではそろそろこの辺で、という去り際に美音は、

「あー、睦さん。良かったらアドレス交換して下さい」

携帯を両手で握り、おずおずと芹沢を見上げてきたのであった。

どうやって彼女の連絡先をゲットしようか、そう悩んで策を考えていた彼は、思いがけない向こうからの申し出に咄嗟に反応が遅れ、

目を瞬かせていた。

「……駄目、ですか？」

しゅん、とうなだれる小動物的な少女に、彼は内心慌てて「いえ」と否定しつつ、携帯を持ち出す。

「それでは、アドレス交換をしましょうか」

声が弾んでうっかりひっくり返らないよう、慎重に言葉を紡ぎ出しつつ、携帯を操作する。

そして登録された、新しいアドレス。

先程からつきつきと胸が弾むような、そんな感覚が消えない。

「なんだプリン。お前、生意気に芹沢とアドレス交換か。

よし、ならこの俺の番号も登録させてやろう」

「ほんなら、俺ともアドレス交換しよか、姫路ちゃん」

「ああ、それなら俺も交せて貰おうかな。良いよね、姫路ちゃん？」

そんな彼らのやり取りを黙って眺めていたが、赤外線通信を無事に終えるなり、やおらずいつと美音と芹沢の間に割り込み、彼女に詰め寄る3年生男3人組。

「えっ？ えっ？

あ、有り難うございます、チヨコ様、蓬生さん、榊さん」

ペコリと頭を下げ、素直に彼らともアドレスを交換する美音。

そんな彼女の様子に、芹沢はふうと溜め息をついた。

美音とアドレス交換をしていたのは自分なのに、ちゃっかり便乗する抜け目の無い男性陣に、何やら言い様の無い苛立たしさを覚えた

のである。

本当は芹沢が帰宅する美音を送っていきたくったのだが、

「ついでだし俺が送るよ」

との榊の気楽な台詞に、彼女の方はあっさりと頷いてしまつて。内心歯噛みしつつ、帰宅する美音を後ろ姿が見えなくなるまで寮の門扉から見送つた。

その後芹沢は自分の部屋に戻り、早速携帯を眺めていた。

ディスプレイに表示されている、『美音さん』の文字とアドレス。メール画面を立ち上げて、早速彼女に送るメールを考える。さて、まずはなんと書けば。

『今日は有り難うございました』？

『横浜の観光、とても楽しかったです』？

何を書くべきか、どう伝えれば彼女は喜んでくれるだろうか。

早くも美音の微笑みが瞼の裏をちらついで、中々思考が上手く纏まらない。

今、一番強い気持ちは『貴女に会いたい』なのだから困つてしまつ。だがまさか、そんな言葉を記す訳にもいかない。

ぼちぼちと携帯をいじつては、中々納得がいく文章が書けずに試行錯誤しつつ、芹沢は溜め息をついて。

そんな最中に、小さなメロディと共に画面上部にメール受信を示すマークが。

書き掛けのメールに一旦保存を掛けて中断し、受信メールの確認。

送信者は『美音さん』

彼女の方からのメールである事に、芹沢はつい何度も携帯画面を見直して。

そっとメールを開きながら、彼は気持ちがどんどん浮き上がるような気分を味わい、思わず笑みが零れた。

このメールは、消えないように保護を掛けなくては。

幕間 室内楽部部室にて、群集視点

俺は天音学園室内楽部に所属している。

うちの室内楽部は……気が抜けない。

かなりおかしい。油断していると妙な流れに巻き込まれる。

その大抵の迷惑騒ぎの原因を担う、我が部の1年生部員であるちい姫は、今日も今日とて……あれ、何か珍しく静かだ。

「どうしたんだ美音？」

お前今日、溜め息吐いてばかりじゃないか」

いつにないちい姫様の異常事態に、自称『幼馴染みな友人』であるちい姫様の取り巻き・七海は、部室の席に腰掛けて机の上に肘をつき、手のひらの上に頬を乗せて窓の外を眺めては溜め息ばかりの彼女に声を掛けた。

ちい姫はゆっくりとした動作で七海を見上げ、また溜め息。

「七海……私、どうしてこんなに小さいのかな？」

「はあ？」

彼女がミニマムサイズなのは今に始まった事ではないが、本人にとつてはかなり深刻な悩みであるらしい。

まあ確かに、見た目は中学生だよな。それも、1年生辺り。

「見た目も性格も子供っぽいって……絶望的だよね……」

せめてナイスバディなお色気お姉さんだったならっ……！」

「……悪い、美音。全然想像つかない」

ちい姫様の理想とする（？）自己の容姿について、七海は立てた手の平を左右に振って『無理無理』と。

今のロリな小動物娘がお色気姉さんに……俺の想像力を絶する姿だ。マニアック過ぎるだろう。

ちい姫様のお言葉に耳を澄ませて聞き耳を立てている室内楽部の部員達は、銘々困ったような表情を浮かべている。

奴等も俺と似たり寄ったりな結論に至ったと見た。

「キモい理想は丸めて捨てろ、小猿娘。

お前のないすばでー？ とやはら、奇特的な奴がそのうち脳内補完して疑似的に感じ取るだろ」

どうやら変な想像をしてしまったらしい、やっぱり自称は『友人』

なちい姫様の取り巻きにしか見えない氷渡が、彼女の口に棒付きのキャンディーを突っ込んだ。

むしろそんなもんを感知する奴がいたら、そいつは『危篤』なんじやねーか氷渡？

「氷渡先輩、遠回しに私には色っぽさとは無縁だとか言ってますか！？」

突っ込まれた棒を掴んでキャンディーを手に持ち、頬を膨らませて先輩に文句を言うちい姫。……その情景の、どこにどう色香を嗅ぎ取れと言うのか。

「自分で分かっただけならその点については諦める」

氷渡はズバツと一言で切り捨てる。

それにちい姫は珍しくもそれ以上文句を言うでもなく、またもや溜め息を吐いて大人しくキャンディーを舐め始めた。

甘い物を食べる時には常に幸せいっぱい、が彼女の印象なのだが、今はちつとも嬉しそうじゃない。

「美音、いったいお前は何を悩んでるんだ？」

背丈がどうこうとか、今更だろ？」

元気の無いちい姫の頭に手をやって七海が心配そうに尋ねると、彼女はキャンディーから唇を離し。

「昨日ね、神南高校管弦楽部のアンサンブルメンバーと知り合ったの」

「神南……って、全国の常連で、部長と引き分けた東金さん？」

相変わらず、うちのちい姫様はちよろちよろと動き回って交遊関係を気儘に広げてやがるな。よりにもよって、神南か。

「あの人達ね……」

七海の問いに頷いたちい姫は、一端言葉を切って視線を不自然に逸し。

「……目茶苦茶色っぽいのよ！」

ダンッ！ と、キャンディーを持っていない方の手で机を叩きつつ、彼女は理不尽だと言いたげに叫ぶ。

「……………はあ？」

期せずして、七海と氷渡の呆れたような声が綺麗に重なって発せられた。

「だから、男なのに色っぽいの！」

そんなの、ハルちゃんとうちの部長、副部長だけだと思ってたのにーっ！」

「何故そこでハル！？」

バシバシバシと机を叩いて嘆くちい姫。

ハルちゃんとやらが誰なのかは置いといて、ちい姫的には冥加部長と天宮さんは色っぽい男だったのか。

まあ、奴も一応女だしな。男には分からん何かを部長達に見てるんだろう。

っーか、この場に冥加部長が居なくて命拾いしたな、お前。

同席している場でそんな発言をかまされたら、冥加部長の眉間の皺がレッドラインに達するぞ。

「……………で、男にあるなら自分だって欲しいってか？ 馬鹿か小娘」

氷渡は手にしたファイルをヒラヒラと振りつつ、馬鹿らしいと一蹴。

「そっ、そういう……………意味じゃ……………」

先輩の発言に途端にしゅん、と落ち込んだちい姫は、俯いてまたもや溜め息。

「ほ、ほら、そう脱線してないで、何か悩んでるならオレに相談し

「てみるよ、な？」

益々暗くなりだしたちい姫に、七海がオロオロと顔を覗き込む。

「ななみいっつ」

「わわわっ!？」

ぴーつと涙ぐんで友人に抱き着く姿を見ると、あれはただ単に七海とじゃれたいだけにしか見えないが。

それよりもちい姫、手にしたままのキャンディーを七海に引っ付けるなよ？

飴が服につくと、取るのは大変なんだからな。

「私ね……昨日から変なの」

悪い、ちい姫。俺は春からずっとお前は変な奴だと思っていた。

「ずっと……耳に残って離れなくて……初めてあの演奏を聴いた時から、胸がドキドキするの」

……ん？

「昨晚も全然眠れなくて……」

瞼の裏に、あの人の微笑みが焼き付いて離れないの」

……ああ？

七海にしがみついたままのちい姫からポツポツと語られる彼女の胸の内、どう聞いてもアレなんだが。

俺が辺りを見渡してみると、（七海め……）という恨めしげな眼差しから一転して、どんだん顔色が青褪めていく奴とか、背後になんか変なものが揺らめいて見えるのとかが……

お姫様に意中の男現る、か。

今日は平和かと思ったら、こりやまた大騒動だな。流石だちい姫。

「……まさかお前、またしても一目惚れなのか？
しかも、よりもよって今度は部長のライバルに……」

呻くように嘆きの声を上げて天を仰ぐ七海。

神南の東金ねえ……ちい姫の趣味はあの手の派手男だったのか。
しかし、その七海の言に彼女は首を左右に振った。

「ううん、チヨコ様じゃなくて」

ちい姫、何故『チヨコ様』。むしろ誰だよそれは？

呼び名まで菓子とか、どこまで甘党だお前。

「は？ ちょ、チヨコ？」

じゃ、じゃああの長髪の副部長さん？」

あのいかにも『女の子に優しい』雰囲気、俺からしてみるとぶっちゃけ何か取っ付きにくい、線の細い眼鏡なあの人？

益々ちい姫の好みが分からん。

俺はてつきり、ちい姫は七海とデキてんだとばかり思ってた。

「蓬生さんでもなくて」

ちい姫は憂鬱な方ではなく、ほう、と何か熱い溜め息を吐いて。

「睦さん……キーボードを弾いている芹沢睦さん。」

あの人の優しい眼差しが……声が……私の胸をときめかせるの。」

抱き着いていた七海から身を放し、うつとりと頬に手を当てて彼女は呟く。

えーと、ちい姫。すまんが芹沢ってダレだ？

俺、神南は部長と副部長しか知らねえからなあ。

辺りを見回してみると、やっぱり知名度はさほど高くないらしく、ちい姫と七海の会話に耳を澄ませていた奴等は、揃って（いったい誰だそれは？）という顔をしている。

「神南のキーボードあ？ あー、あーあー、あいつ？」

お前、結構分かりやすい趣味だな」

氷渡が思い出したようにポンと手を叩き、ちい姫の髪をわしゃわしゃと撫ぜる。

「ま、いんじゃねー？

どーせお前の事だから、追い掛けまくるんだろ小娘」

「はいっ。」

あんな素敵な人と自分じゃ、全然釣り合っていないんじゃないかとか、そんなの考える暇があるなら、まずは私らしく行動ですよね！」

先輩の苦笑気味の言に笑顔で頷いたちい姫は、

「よーしっ、気合い入れてアタックするぞー！」

私、頑張ります氷渡先輩っ！」

「あああああ」

燃え上がるちい姫に、七海は何故か頭を抱えて呻く。

「美音がまたしてもやる気に……っ！

どうしてくれるんですか氷渡先輩！」

こいつ、相手の迷惑考えずに本気で猛烈アピールな、押せ押せタイブなんですよ!？」

ほー、そうなのか。

それは確かに野に猛獣を放つような気分だろうなあ、七海。

「んなこた俺には関係ねえし。あいつ本人は無茶苦茶楽しそうだし？

第一、あいつ思いつきり見た目で得するタイプだろ？」

氷渡は後輩の苦言を全く意に介さず、平然とファイルの中身を捲っている。

……お前もそう思うのか、氷渡。

ちい姫って、本人は身長低いのが嫌っぽいが、ぜってーあの『私は弱い小動物』な外見で得しまくってるよな。

「あつ、睦さんからメール来てる！」

取り巻きらの会話なんざそっちのけで、ちい姫本人は意中の男からのメールに狂喜中。

つかお前、その噂の『素敵な睦君』とやらとは、昨日知り合ったとか言っただけだったか？

もうメルアド交換してやがるのか？

……確かに、凄まじい行動力だちい姫。

「やった、明日ティータイムを一緒にしませんか、だって。ねえねえ七海、これって脈ありって事かな」

そーだな。女子のアドレスを出会った初日でゲットし、翌日にはデートの誘いとはまた、お前に無茶苦茶気があるか、軽く遊ぶ気かのどっちかじゃなーか、ちい姫？

声を上擦らせつつちい姫は頬を紅潮させ、七海にキラキラした目で同意を求める。

……まあ確かに、あんな顔してるちい姫は可愛いと言えなくもないような気が……うーん、やっぱり俺には分からん。

俺には奴の良さは分からんのだが、ちい姫に気がある男共はギリギリと歯ぎしりせんばかりの形相である。

「さ、さあ？ 少なくとも嫌われてはいないみたいだし、まずは友達から頑張ったら？」

背後からの怨念にも似た思念を感じ取ったのか、哀れな七海は引きつりながら答えている。

「うんっ。えへへ、明日が楽しみ〜」

ウキウキと携帯を眺めるちい姫は、本当に嬉しそうで。

あー、なんか『まあ頑張れや』とか思えてくるぞ？

俺も奴に絆された一人なのか？

「ううっ、大丈夫かなあ。」

神南の東金さんと土岐さんって、女の子好きだって聞いたけど……

まさかその芹沢さんって人も……」

笑顔のちい姫から少し距離を取り、心配性な七海は小声でぼそぼそと不安を漏らしている。

うちのちい姫を弄ぶとか……そんな事になったら、冥加部長がどれほど怒り狂うのか、考えたくもないな。

まあ、なにはともあれ。

水面下の内情はさておき、表面上は今日も室内楽部は平和だ。

診断、恋煩い 症状 4 ・理不尽な嫉妬論

先日、偶然出会い知り合った神南アンサンブルのメンバーと、頻繁にやり取りをしている美音。

やっぱり文章も偉そうな東金や、メールでもほわっとしていて優しい土岐、そして何よりも彼女が毎日楽しみにしている芹沢からのメール。

彼はとても卒の無い人で、美音の些細な内容のメールでも律義に返信してくれる、とても優しい人だ。

友人として、かなり好意的にみているらしいと感じると、天にも昇るようなフワフワした喜びに包まれて。

……芹沢の微笑みを思い浮かべただけで、胸がドキドキと高鳴る。誰かに恋をして、こんな風に幸せな感覚を覚えるなんて、思いもしなかった。

辛い記憶ばかりが強い初恋の苦さは頭を振って振り切って。

彼に会いたい。

芹沢に毎日会いたい。

笑いかけて、名前を呼んで、「美音さん」と彼の声で呼んで貰いたい。

そんなある日、美音は芹沢から送られてきたメールに記載されていた場所へと赴いた。

今日は、元町にて神南はアンサンブルメンバーで音合わせをした後、各人の個人練習になるらしい。

もしお時間があるならば一緒に練習しませんか、と芹沢から誘われ

て、美音は勿論OKの返事を出し。

そして、神南のアンサンブル演奏を聴くべく足を運んだのである。どこら辺で演奏をするのだろうか、と、視線をキョロキョロあちこちに向かわせる美音の背後から、甲高い黄色い歓声が聞こえてくる。その声量と唐突さに驚き、思わず数歩たたらを踏んで振り返ると、やたらと目立つ群衆の固まり。

その中心部には、やはりと言いかんと言いか、東金、土岐、芹沢の姿が。

探し人を発見出来たのは良いが、あの十重二十重に囲むファンの多さは何事だ。

あれでは芹沢に近寄れないではないか。

きゃーきゃーと騒がれチャホヤされる、その事に慣れた様子で彼らは準備を済ませ、練習を開始する。

今日はライブではなくて、ただの練習の筈なのに。

どうしてあんなに女性ファンが集っているのだ。神南アンサンブルメンバーはアイドルじゃないぞ。

華麗にしてキラキラした演奏を聴いていると、騒ぎたくなる気持ちはよく分かるけど。

人込みのせいで、彼の姿が見えない。何故、自分の身長は後もう10cm……せめて5cmは高く無かったのだろう。

頑張って彼女らを掻き分けて先頭にでもいかない限り、芹沢が演奏する姿が見えない。

「……千秋素敵……」

「蓬生君はやっぱり、神戸から来た王子様だわ！」

その他にも、2人を称賛する囁きやら感嘆の溜め息やらが満ちていて。

……うわ〜。流石はチヨコ様と蓬生さん。

こんなにたくさんのおれでーの心を射止めて、どうする気だ貴方は。

「でも、後ろのキーボードの子も良くない?」

そんな呟きが耳に入ってしまったって、美音は思わずピクッと反応してしまう。

「ああ、あの黒髪の子?」

「何か……可愛くない?」

「分かる分かる!」

ムカムカ、とどうしようもなく嫌な気持ちが増え上がってくる。

貴女方は、チヨコ様と蓬生さんのファンなのでしょうが。睦さんにまで興味を示さないでよ。

彼女らは、ただのファン心理として褒めたに過ぎない。

分かっている。だが、不愉快な気持ちは消えない。

芹沢は、ただの友人なのに。「私のもの!」なんて、そんな事を考える権利なんかありません。

どうして、いつの間に関心は芹沢に人気がある事を素直に喜べない、嫌な子になってしまったのだろう。

だいたいチヨコ様も、何でこんな女の子がたくさん寄って来るような場所に、睦さんを引っ張り出して来るのよ!

毎日偉そうに睦さんに命令して、一緒に暮らして、仲良しなトコをアピールして、その上彼がいかにモテモテであるのかを、私に見せつけたい訳!?

かなり理不尽な八つ当たりを内心で叫びつつ、美音は無理矢理ファンの女性達の間を潜って前の方へと割り込んでいく。

彼女達の目には『演奏中の可愛い芹沢』が見えるのに、美音はどんなに背伸びしてもジャンプしても、彼の姿がきっちり捉えられない。

ならば、根性で最前列に向かうしか無い。

ヴィオラケースをしつかりと胸元に抱き抱えつつ、小さい体を活かして、無理矢理人垣の下の方から体を割り込ませていく美音に、通過を許す羽目になったファンの女性達の「何この子？」という視線が突き刺さる。

うつつ、頑張れ私！

なんとか最前列に到達した時には、揉みくちやになって髪はボサボサ制服は皺だらけの酷い有様になってしまったが、頑張った甲斐あってすぐそこで芹沢が演奏している。

彼の姿が視界に入ると、胸の奥のもやもやした不快感が薄れていく。

先輩との合奏による演奏を楽しんでいるらしい、芹沢とパチッと視線があつて……クスリと微笑まれた。

慌てて頭に手をやるが、みつともない姿を見られた事実は消えない。

……や、やっぱり突撃は控えた方が良かったかしら。

せっかく芹沢との2人っきりの練習なのだからと、派手過ぎて見苦しくならない程度に精一杯のお洒落をしてきたのに、台無しだ。

恥ずかしさのあまり、いつそ背後の人込みを再び抜け出そうかとも思ったが、流石に二回目はちょっと無理っばい。

せめて手櫛で直せる範囲だけ撫で付けつつ、神南の練習を見学して

いる美音の存在に気が付いた東金は「お」とニヤリと笑い。

「よお、天音のプリンじゃねーか。
そんなところで突っ立ってねえで、こっち来いよ」

ちよいちよい、と手招きされてしまう。

え、まだ練習中なのでは……と、躊躇う美音に、

「あら、ほんまや。

姫路ちゃん、こっちおいで」

お菓子あげるで？ などと、小さい子を騙くらかす人のような台詞を口にする土岐にも手招かれ。

背後から恐ろしくも激しい視線がグサグサと突き刺さるのを感じつつ、恐る恐る彼らに近寄る。

「こんにちは、東金さん、蓬生さん、睦さん」

ぺこつと頭を下げ、チラつと土岐に視線をやってみる。お菓子って何をくれるのだろうか。

その視線の意図を察し、土岐のポケットからはい、と差し出されたのは、個別包装でパック詰めされたキャラメル。

「さ、遠慮せんとお食べ」

「わっつ、有り難うございます蓬生さんっ」

有り難く受け取って、袋を破いて早速口の中に放り込む。

ああ、甘くて美味しい……

ゴミはポケットに仕舞い、キャラメルを味わってニコニコする美音に、

「姫路ちゃんは、ほんまに美味そうな顔してお菓子食うねんな」

可愛ええなあ、と、明らかに土岐から動物扱いで頭を撫でられるが、今の美音はお菓子を恵まれた身の上だ。

振り払うのも人道に悖ると、ぐつと堪えてされるがままになっていると、

「美音さん、一緒に練習しましょうか」

芹沢からくいつと肩を引つ張られた。

「え、でも睦さん」

まだ3人での音合わせの最中じゃ？ と、美音は疑問を抱いて困惑してしまう。

「芹沢、まあそう焦るな。」

よし、プリン。お前も加えて4人で音を合わせるか」

「は!?!」

「……部長」

東金の唐突にしてかなり無理があるご命令に、美音は口をぽかんと開けて彼を見上げ、芹沢は非常に嫌そうに眉を顰める。

「この4人で音を合わせる、その意味が分かりませんが」
「気分転換だ」

「チヨコ様、ちよつ、私が入ったら明らかに不協和音じゃないですか」

「ここんとこずくと、根詰めて練習しとったしなあ。」

たまには即興アンサンブルで遊ぶのもええやん？」

何故かお遊びする気になっている東金と土岐に押し切られ、美音も飛び入りで練習に交ざり。

かなり変な演奏になった気がするけれども、結構楽しかった。やっぱり東金さんって、指導が上手なんだな、と実感した美音であった。

診断、恋煩い 症状 5・美しき自己中心的妄想

とにかく、うちの部長と副部長は油断がならない。

芹沢の内心での苛立ちを察している筈なのに、彼の目の前で平然と美音を構って後輩を弄んでいる2人に、ついキツイ眼差しを向けてしまう。

彼女は芹沢にとても親しげに振る舞ってくれるが、東金と土岐にも非常に懐いていて、いつもニコニコと笑いかける。

彼らは芹沢よりも女性と接する事に慣れていて、高校生だてらに女性を喜ばせる術にも長けている。

部長と副部長がどれだけファンの女性達を魅了しようが、甘く口説き落とそうが、彼にはどうでも良い事である。だが、美音にだけは口説き文句を、たとえ冗談であろうとも口にしないで欲しい。

彼女が部長か副部長に本気になったら……そんな事態を想像するの
も恐ろしい。

美音のような可愛らしい少女から恋慕われたら、悪い気がする男が
いる訳がない。

あの純真無垢な瞳で一心に見つめられて「好きです」などと言われ
てしまえば。

その愛くるしさに、部長も副部長も冗談半分だったのが、すぐさま
本気になるに違いないのだ。

彼らの底知れぬ本気を日々目の当たりにしている芹沢としては、あ
の2人のどちらか……最悪、両方を敵に回すような事態は避けたい。
美音の為ならば全力で戦う覚悟だが、避けられる戦いは回避するに

越した事は無い。

「それでは美音さん、練習スタジオに行きましょう」

「はいっ、睦さん。」

それでは東金さん、蓬生さん。今日は有り難うございました！」

問題の2人からとっと引き離すべく、芹沢は練習が終わるなり美音を促す。

ぺこつと頭を下げ、先輩に対する挨拶を忘れない彼女の律義さに多少苦笑してしまう。

2人並んで、練習スタジオへの道を歩きながら、やや緊張しつつ美音とより親しくなるべく会話を試みる。

もっと彼女の事が知りたい。

もっと俺の事を知って欲しい。

会話を積み重ねていく分だけ、胸に降り積もってゆく愛しさ。

「美音さん、今日は何を練習しましょうか？」

「えっとですね、私はまたリストが弾きたいなー」

ラ・カンパネツラとか、ハンガリー幻想曲とか、などとリクエストを口にしつつ目を輝かせて芹沢を見上げてくる美音。

「美音さんは、本当にリストがお好きですね」

「他の作曲家の楽曲も好きですよ？」

でもこう、リストには何か私の胸を揺さぶる波長があるのです！」

ぐっと親指を立てて、かの作曲家をリスペクトする小動物的少女プリン。

「俺も好きですよ」

そんな風に、目をキラキラさせて俺を見上げてくる可愛い貴女が。

「睦さんもお好きでいてくれて嬉しいです！

私も大好きですもの」

嬉しそうに頬を染めつつ、えへへ〜と照れたように笑み崩れる美音に、芹沢はどきりと胸をときめかせた。

あくまでも、美音はリストが好きと同じ趣味の人が居てくれて嬉しい、と口にはしているに過ぎない。

だが、あんなに可愛らしく「大好きです」などと片思い中の少女から伝えられて、別な意味に捉えてしまいそうになるのは仕方が無いではないか。

睦さん、大好きです。

俺もです、美音さん。

などと、罪の無い想像にちょっと返事を返してみたりして。

そんな風に、かなりフワフワとした足取りで美音と共に練習スタジオに入った芹沢は、早速準備を済ませる。

「それじゃ睦さん、今日も宜しくお願いします」

いつも柔らかい笑みを浮かべる彼女は、一緒に練習している時の笑顔も素敵だ。

美音の一番可愛らしい笑顔は、芹沢が彼女と2人きりで一緒に居られる時だ。

彼女を想う気持ちからそう感じるだけなのだとしても、最も愛くるしい彼女を独り占め出来るのは、何よりも楽しい一時なのである。

診断、恋煩い 処方箋 1・きみの手のひらの優しさを想像してみたらね、

芹沢と共にスタジオでの練習を終えた美音は、もっと一緒に居られないだろうか、との切実な願望を抱いていた。

有り体に言えば、芹沢を独り占めしてデートがしたい！

だが、何と言って彼を誘えば良いのだろうか？

『その喫茶店でお茶でも』

……芹沢の淹れてくれるお茶よりも、遥かに味が落ちるようなお店に連れ込むのはどうなんだ。

いや、逆にそれを逆手に取って、『睦さんの淹れてくれたお茶が、とても飲みたくなりました』

おお、何だか無理の無い流れな気がする！

あれ、でもそうすると常に誰かが居るような菩提樹寮に行く事になるんじゃない……？

なんとかして芹沢と過ごす時間を増やそうと作戦を練る美音は、彼を見上げて会話をしながら、わざとゆっくりとした足取りで歩く。

美音は体が小さいせいか、歩くペースが多少遅くとも不信感を抱かれないらしいのだ。

そして芹沢は気配りを怠らない親切な紳士なので、当然のように並んで歩く相手の歩調に合わせてくれる。

なので、よほど急ぐ必要が無い時以外は本来のペースよりもゆつたりと歩いて、芹沢と会話をする時間を増やそうと姑息な手段を常用していた。

「ねえ、睦さん」

この後お時間ありますか？ と、片思い中の素敵な彼を見つめたまま口にしかけていた美音は、あまり自らを取り巻く周囲への注意を払っていなかった。

何かに集中すると、周りが見えなくなりがちなのが美音の悪い癖で、この時も不意に力チャリと音を立てて開かれたドアに、全く気がつかずにそのまま一步踏み出し。

「きゃっ！」

「わっ？」

芹沢が注意をする暇も無く、彼女は練習スタジオの一室からたった今出て来た人物と、まともに衝突していた。

「う、ごめんなさいっ！」

慌ててぶつかってしまった人物に謝罪を口にしつつ、その人の顔を見上げて……固まった。

「ううん、全然平気だよ。」

君は相変わらずそそっかしいね、姫路さん」

「あ、あま、天宮せんぱ……？」

「うん、奇遇だね、姫路さん」

驚愕のあまり、まともに言葉にもならない後輩の言外の意を汲み取って、ふんわりとした笑みで彼女に返事を返す天宮。

先輩のあまりにも毎度ながらの平然とした態度に、思わず芹沢の方へと一步後退り。

別に天宮から嫌がらせを受けた訳でもないのに、芹沢に助けを求め
るなどおかしい事だが、気持ち的には『睦さん助けてっ』だ。

「美音さん」

あうあうと慌てふためいている美音の様子を訝しがって、傍らの芹
沢はどうかしましたか、と言いたげに彼女に呼び掛ける。

天宮は芹沢に視線をやり、僅かに目を細め。

「姫路さん、そっちの彼は君のお友達？」

神南の制服を身に着けている芹沢。今後対戦する可能性のある相手
にも関わらず、後輩が親しげに交流をしている事を、天音の他のメ
ンバーに対する裏切りや背信行為だと感じ取ったのか、先輩が芹沢
に向ける眼差しは僅かに厳しい。

「は、はい。彼は私の友人の神南高校の芹沢睦さんです」

ここで、きつぱりと後ろめたい事など無いと、胸を張って天宮に示
しておかねば、他校のアンサンブルメンバーから後輩がおかしな内
偵を受けている、などとねじ曲がって冥加部長の耳に入りかねない。

「睦さん、こちらは私の学校の先輩で、天音のアンサンブルメンバ
ーの天宮先輩です」

天宮を示して、芹沢に軽く彼を紹介し、

「初めまして、天宮です」

「芹沢です。どうぞ宜しく」

同じピアノを奏でる者同士、何か互いに感じ合うものがあつたのか、微妙に張り詰めた緊張感が両者の間に漂う。それともやはり、コンクールで競い合う可能性のある相手だからだろうか？

「いつもうちの姫路さんがお世話になつていてみたいですね」

「ええ。美音さんとはとても親しくさせて頂いております」

何故か『うちの姫路さん』『美音さんとはとても』の部分強調しつつ、ひたりと視線を合わせて会話を交わす天宮と芹沢。

普段は美音に微笑みながら接してくれる2人であるが、彼らが互いにぶつけあう視線と表情は何か冷たいような。

「あつ、あの、天宮先輩」

自然と天宮と芹沢の間に挟まれるような位置になり、彼らの顔を交互に見比べて。美音はおずおずと先輩に声を掛けてみる。

「なあに、姫路さん？」

やはり、天宮は基本的にほんわかとした笑顔だ。

後輩を見下ろす時には、見事に表情が和らいでいる。

天宮と向かい合う居心地の悪い空間から抜け出すべく、彼女はなんとか声を絞り出す。

「私達、この後用事がありますので……」

これで失礼します。それではまた」

天宮にぺこっと頭を下げ、美音は芹沢の手をはっしと掴み。先輩の返事を待たずに足早に歩き出した。

連れの方を気遣う余裕も無く、とにかく出口に向かってどんどん小走りになっていった美音は、練習スタジオからかなり遠ざかっても路地を適当に曲がって明確な目的地も持たずに逃げるように駆け抜ける。

「美音さん」

と、不意に繋いだままだった手を引かれて。

美音は立ち止まって俯いた。

本人の了解も得ず、無理矢理こんな通りの裏路地にまで引っ張ってきた芹沢に、どんな顔を向ければ良いのか分からない。

「美音さん、大丈夫ですか？」

ふわりと頭に芹沢の手が降りてきて、優しく撫でられる。何も口にしていないままであるのに、彼は事情が分からずとも美音が何か困っているようだと察しているようだ。

「う、ごめんなさい睦さん」

こんな場所に勝手に引っ張って来て。

いきなり黙り込んで、友人を困惑させて。

それでも尚、彼は美音を気遣ってくれる心優しい人で。

今日、蓬生さんに頭を撫でられた時は動物扱いされてるみたいで、何か嫌だったのに。

睦さんに頭を撫でて貰うのは……凄く、嬉しくて、幸せで……胸がきゅってなる。

睦さん、好き。貴方が好き。

貴方は誰にでも優しくして気を遣う、親切な人で。別に私が特別だな

んて自惚れ、思ってもいないけど。
今だけは、繋いだ手と、私の頭を撫でてくれる睦さんの手は、私のものだから。

「彼は、貴女にとって酷い先輩なんですか？」

美音が天宮と出くわすなり大慌てし、かの先輩の側から死に物狂いで逃げ出したような格好なのだから、芹沢がそう推測するのも無理は無い。

「いえ、天宮先輩は、とても優しい、良い先輩ですよ。
ただ……」

ただ、私があの人とまともに向き合って普通に会話が出来ないだけ。

「ただ？」

「ただ、その、天才には少し近寄り難いと言いますか。

あの人は音楽にしか興味が無い人なので、ちよつと付き合い方が分からなくて。

とても尊敬してるんですけど、だからこそ緊張しちゃうんです」

美音のそんな釈明を聞いても、まだ納得がいかなさそうな様子の芹沢にパタパタと手を振って誤魔化し、先程計画を練っていた、おデパートのお誘いプランを実行に移してみる。

「ところで睦さん、私、睦さんの淹れてくれたお茶が飲みたくなりました！」

しまった！ この台詞は第二段階だ！

「ああ、そうですね。」

ちよつと走りましたし、俺も喉が渴きました。

ここから寮まで近いですし、是非寄って行って下さい。とっておきのお茶をお淹れしますよ」

良い茶葉があるんです、と、にこやかに微笑んでくれる芹沢に、美音はほつと安堵の息をつく。

前段階は見事にすつ飛ばしたが、芹沢とデートができ、おまけにお茶までついてくる。

ああなんて幸運なのだろう！

彼と並んで歩きながら、芹沢と繋いだままの手、美音はその手の指にそつと自らの指を絡めてみる。

芹沢は特に嫌がる素振りもなく、美音のしたいようにさせてくれる。

えへへ、恋人繋ぎしちゃった。

彼女に喜びをもたらしてくれる芹沢の手は、とても温かくて優しいのだ。

診断、恋煩い 処方箋 2・その理由を君は知らない

美音とより一層親しくなり、彼女と恋仲になる。

その為にはまず、誰にでも優しく親切な美音に、自分を男として意識して貰わなくてはならない。

彼女の好物である甘いお菓子と一緒に丁寧に淹れた紅茶を出し、寮のラウンジにて美音と共に寛いでいた芹沢は、改めて実感する。

……美音さんは、男に対して気安過ぎる。

「睦さん、本当に凄く美味しいです」。

紅茶の香りがふわ〜って口の中まで広がって「

ニコニコと紅茶を口に含み、お菓子を食べる美音は、芹沢の真正面ではなく、すぐ隣りに腰掛けていた。

ほんの少し、体を傾げるだけで寄り添えるような近距離に向こうの方から近寄られて、芹沢は非常に困惑していた。

別に、この並んでチェアに座っている状況が嫌な訳ではない。むしろかなり喜ばしい事態だ。

だが、あまりにも何の構えもなく当然のように並んで腰掛けられると、こつこつ……いかに美音が芹沢を『安全』だと高を括っているのが窺える。

彼女を怯えさせたり、困らせたり、脅かしたりするつもりは全く無いが、こつこつはつきりと『範疇外』だと示されるのは大問題だ。

「お、姫路じゃん。

何だお前、芹沢と仲良くティータイムか？　へえ、美味そうだな」

「……………きよ、響也さん。」

「こんにちは、お邪魔しています」

そんな最中に帰寮してきた響也が、ラウンジに客人が来ている事に気が付いて、親しげに声をかけてくる。

そんな彼に、美音は微妙に眉をハの字に下げた。

「お帰りなさい、如月さん。」

見ての通り、貴方の分はありませんので。　ああ、美音さん。　お代わりをお淹れしましょうか」

「……………つて、芹沢。」

今、俺の分はねえとか言ったその口で、姫路にはやるのかよ」

「もとよりここにあるのは全て、美音さんにお出ししたお茶とお菓子ですので」

楽しいティータイムに、本人にはそんなつもりは全く無くとも邪魔入りしてきた響也に、芹沢は『さっさとここから立ち去れ』と言外に滲ませた。の、だが……………

「あれ、何か良い匂い……………」

あつ、美音ちゃんいらっしやいつ」

「来ていたのか、姫路」

まだ響也を追い払っていないが、今度はかなでと律が次々と帰寮し、美音の姿を認めて声を掛けてくる。

……………美音さん、本当に貴女は交友関係が広すぎます。

「こんにちはは如月さん。」

かなでさんこんにちはです〜っ」

彼らがラウンジにやってくるなり、美音はパツと表情を輝かせ。律にはペコリと頭を下げ、チエアから立ち上がってかなでに飛び付く勢いで抱き着いた。

きゃっきゃつと明るい笑い声を響かせながら、再会のハグを交わす少女2人。

律は相変わらず何を考えているのか分かりにくく、彼女らの様子を眺めても普段通りであり表情が動かないが、響也の方は非常に分かりやすく、その表情には（ちょっと羨ましい）という文字がデカデカと。

彼も、鈍い小日向さんに惹かれてしまった為に、苦勞していそうだな。

かく言う芹沢自身も、鈍感な美音を振り向かせるべく、非常に苦勞を強いられているのだが。

かなでに対して、そのポジションを代わってくれないだろうか、という羨望をつい抱いてしまう。

美音はかなでに対して、かなり憧れているというのだろうか。とにかく、『綺麗なお姉さん、好き』などとうつとりと呟くような少女だ。ああして抱き着いている時は、本当に嬉しそうに表情を綻ばせている。

そしてかなでは、察するに小さい動物がちょこまかしている姿を可愛いと感じるらしい。

男性陣の様子など見向きもせず、ニコニコとかなでに笑みを向ける美音。

もうこうなったら、しばらくはあの調子だろう。

次は、なるべく邪魔が入らない場所で、美音さんと2人きりで過ごす。

そう決意を固め、かなでが美音を解放してくれるのを大人しくギリギリと待ちつつ。

次のデートプランをじっくりと練る。

美音の好物はかなり把握したので、お弁当を作ってお昼ご飯に誘おう。

「それでは、お邪魔しました」

「またね、美音ちゃん」

美音が帰る段階になった玄関先でも、仲の良さを発揮する少女達。やはり、ちよつと羨ましい。

「では、参りましょうか美音さん」

今日は家まで送る、と言い張って、彼女と並んで歩いて自宅までお供をする事を了承してもらい。

早速2人並んで歩き出す。

美音の自宅は、星奏学院ひいては菩提樹寮からほど近い場所で。その短い距離を、彼女の歩調に合わせてゆっくりと並んで歩く。

彼女の、普段ののんびりとしたペースは実に有り難い。

一緒に居られる時間を、僅かでも増やしてくれる。

「美音さん、明日のお昼には何かご予約はありますか？」

「いえ、特にはありませんよ」

早速お昼ご飯に誘うべく、彼女に探りを入れてみると、予定は空い

ていると。

異性から大変な人気があるが、全くその事実を理解しておらず無頓着な美音は、毎日が大抵何かしら、彼女に気がある男性から様々な誘いを受けているので、これはかなり僥倖だ。

「では、明日俺がお弁当を作りますので、ご一緒しませんか？」

「えっ、ホントですか？」

うわっっ、とつても楽しみにしています！」

睦さんのお弁当……と、本当に目を輝かせて、今からもう楽しみな様子のお美音。

これは、腕によりをかけてお弁当を用意しなくては。

彼女の可愛らしい笑顔に内心とても張り切る芹沢に、美音の方から手が伸ばされてきて。小さな手が、彼の手を握る。

彼女はあまり力を込めていないというのに、芹沢には振り払えないほど、強力な強制力。

そつと傍らの美音を見下ろすと、はにかみながら見上げられ……その可愛らしさに、心臓が益々跳ね上がった。

そんな彼の様子に気が付いているのかいないのか、美音はまたしても指を絡めてくる。

そんな風に、自分は特別なだと勘違いしてしまうような、思わせぶりな行動をとられたら、どうしたら良いのか分からなくなる。

美音さん、貴女は俺の心臓を破裂させる気ですか。

ギュッと抱き締めてしまいたい彼女の微笑みを見下ろして、芹沢は指を絡めて繋いだ手に、少しだけ力を込めた。

今はまだ、これだけで我慢。

診断、恋煩い 処方箋 3・密かな想いに言葉を与える

ここ数日間、部長命令により天音アンサンブルメンバーと集中的に練習を重ねて、音を合わせていた美音。

片思い中の芹沢と一緒に練習したいが、部長のご意向には逆らえない。

アンサンブルは連携や信頼関係が第一だし、彼らとの交流を深めるのはとても大事な事だ。

でも私、睦さんとデートがしたいんですっ、冥加部長ーっ！

無論、そんな自分本意な叫びは口には出せない。

そんな事を冥王様に向かって言い出そうものならば、死への旅路終着点に向かって一直線にひとっ飛びだ。

アンサンブルメンバーから外される事は間違い無い。

せっかく頑張ってきたのに、今までの努力が水の泡になるなど避けたい。

第一、アンサンブルのメンバーと音を合わせるのが嫌な訳ではない。天宮と向かい合って会話をするのが、やっぱりまだ少しきこちなくなるだけで。

そんな風に、美音の側からの一方的な事情による微妙なるすれ違いがあるからこそ、部長はメンバー全員での団結心や音合わせに力を入れるべきだと考えたのかもしれない。

だが、捨てる神あれば拾う神ありとはよく言ったもので、日々遅く

まで学園でアンサンブル練習に時間を費やす美音を気遣って、芹沢が毎日のようにわざわざお昼にお弁当を作って持ってきてくれる。

はつきり言って美音が作る料理よりも、遙かに美味しいご飯を差し出されるので、何かちよつと自分の女の子としての駄目さ加減に涙が禁じ得ない。

そんな訳で美音は、毎日頑張って練習を積み重ねつつ、本日もお昼休みには芹沢と天音学園の中庭でまったりと過ごしていた。

芹沢は、いつも丁寧な言葉遣いを崩さない人である。

先輩に対して丁寧語なのは人として正しい在り方だろう。たまに、東金に向かつてしれっとした態度を示す姿を見ていると、慇懃無礼という単語が脳裏を過ぎるが。

年下である美音に対しても常に丁寧な言葉遣いなので、恐らくはそれが彼の地なのだろう。

「ねえ、睦さん。少し気になっている事があるのですが」

芹沢が作ってくれた絶品のお弁当に舌鼓を打ちつつ、傍らの彼を見上げて、ふと、今度機会があったら聞いてみようかと思っていた下らない疑問を思い出した。

「何でしょう」

相変わらず、美音の想い人は穏やかにして優美な佇まいで、並んで腰を下ろしてまったりとお弁当を口に運ぶ姿でさえ、やたらと絵になる。

「睦さんって、神戸に暮らして長いんですね？」

「ええ。」

生まれも育ちも神戸ですよ」

それがどうしたのだろう、と不思議そうに彼女を見下ろしてくる芹沢の表情をじーっと見返しつつ。

「蓬生さんは、常々関西弁ですけど……」

睦さんの関西弁を私は聞いた事が無いな、と」

「……俺の関西弁、ですか？」

非常に意表を突かれたらしく、きよとんとした表情の芹沢はとてつもなく可愛く感じる。

関西圏の住人が標準語を喋っている時、本当に僅かにイントネーションに関西風の発音や方言が混じったりする事があるが、彼の場合はそれすら全く無い。

生まれも育ちも関東圏の横浜育ちの美音はあまり詳しくは知らないが、関西弁と一口に言っても地域によってかなり違いが現れるらしい。つまり、芹沢が話すとしたら神戸弁？ だと思っただが……

「睦さん。私のような、関東圏の乙女はですね」

「はい」

「関西弁というものに、強い憧れを抱くものなのです！」

「……はい？」

拳を握って力説する美音、芹沢は呆然とそんな彼女を見返して瞬き。全ての人が関西弁に憧れるとは言わないし、中には仁侠モノなどから『関西弁』ヤクザ』怖い』的な先入観を抱いている人もいるかもしれない。

だが。

そう、だがしかし、である。

素敵な方言を持たない関東在住乙女の心としては、関西在住の美麗な男子が関西弁で喋る、という様子に何か明確な理由こそ不明だが非常に胸ときめくものがあるのだ。

「睦さん……関西弁は使わないのでしょうか……？」

ドキドキしながら、期待を滲ませて芹沢を見上げてみる。

この人の口から関西弁。

おお、いったいどんな言葉になるのだ凄く気になる！

「美音さんは本当に物好きですね」

そんなあからさまにおねだりの表情に苦笑しつつ、芹沢はお茶を一
口飲んで。

「俺の関西弁聞いて、いったいどないしたいん？」

美音さんが気に入るかどーかなんて、そんな保証出来へんで」

実に気安い彼は、口調を変えて美音に話し掛けてくれた。

「お、おおう」

芹沢のガラツと変化したイントネーションに、思わず感嘆の溜め息を漏らしてはっしと彼の服の袖を掴む。

「睦さん……凄いつ。

何かとてつもなく今、胸がどきゅんとかしてますっ！」

関西弁好きが関西在住の人物に惹かれ、その人と会話を交わす時の威力とは、ここまで凄まじかったのか。なんだろうこの激しい興奮は！

芹沢の制服の袖を掴んだまま悶える美音を、彼はやっぱり不思議そうに見下ろして。ふっと微笑んだ。

「あんま可愛え事言つと……美音さんだけやのうて、俺も動悸が治まらんようになってまうわ」

そんな台詞と共に、芹沢が上半身を傾かせて顔を近付け、彼の唇は美音の耳元で囁く。

「俺の心を盗みたいんか、どろぼーさん？
そんなら俺も君のハートを奪って隠してまうで？」

もう既に私のハートは貴方に奪われて久しいです、睦さん。
無論、そんな台詞を馬鹿正直には言えない。

頬を真っ赤に染めて固まる美音の耳元で、芹沢は愉快そうに小さな吐息を一つ漏らしてから、すっと身を起こして体勢を戻す。

「と、まあこんな調子ですが。
如何ですか美音さん？」

すっかりと普段の口調に戻り、平然と問い掛けてくる芹沢に、美音はばくばくと激しく高鳴ったまま、ちっとも治まらない胸元を押えて小声で意味不明な答えを呟いた。

「け、結構なお手前で……」

ああもっつ、何でこの人はこんなに私を翻弄してくるのよーっ！
彼が関西弁で喋ると、普段は隠している色っぽさが倍増しました。
多分、私が関西弁を真似ても、こんな色香は出せれません。

『私、君に首ったけやねん』

……やっぱり、私じゃ全然素敵にならないや。

診断、恋煩い 処方箋 4・チラリズムとその効果

神戸も横浜も、真夏は灼熱の祝福の如き太陽の日差しが降り注ぐ。

「今日も暑いですね……」

みくみんみん……蝉の鳴き声にかき消されそうな弱々しい呻き声がして。

そちらに視線をやると、傍らで共に弁当を食べていた美音が頭上の木漏れ日に目を細めていた。

芹沢の茶を気に入っている美音に、手料理を振る舞ってみたところ、やはり感激してくれたので。この鈍感な少女を振り向かせるべく、まずは彼女の胃袋から攻略する事に決め、せっせと美音の為に料理や菓子を作る毎日である。

美味しい！ と嬉しそうに表情が綻ぶ美音を見つめているだけで、ふんわりと満たされていくような感覚がする。

そんな後輩のほのぼのとした恋模様、部長や副部長からは、何をモタモタしているのだ、とせっつかれるが。

「いつも思っているのですが、睦さん。

神南の制服って暑そうですね」

「そうですね？」

と、多少ぼんやりしていた芹沢は、不意に美音からそんな声が掛けられ、両目を瞬いた。彼の全身を上から下までじーっと眺め、真顔で真剣に頷く美音。

「シャツはともかく……
ベスト！ それが私の目には暑そうに見えて仕方ありません」

そう言う美音の天音の制服は、ただでさえ熱くて眩しい日光を反射して実に目に痛い純白。

「俺はこれで慣れてるので」

「じゃあせめてネクタイを……」

第一ボタンまできっちり留めてあると、こう……クールビズはどこへ！ と言いたくなります」

妙に力強く訴えてくる美音に、芹沢は首を傾げた。

「……美音さん。つまり貴女は、俺を脱がしたいのですか？」

にっこりと微笑んで、こんな屋外で大胆な人ですね、と冗談めかして口になると、途端に彼女は頬を真っ赤に染めて慌て出した。

芹沢はおもむろに弁当箱と箸を置き、

「美音さんがそこまで言うのなら、仕方ありませんね？」

「いつ、いえっ、視覚的にそんな気がしただけでっ。む、むむむ睦さんっ？」

笑みを浮かべて彼女を見詰めたまま、ネクタイに指を引っ掛けて緩め、ボタンを二つほど手早く外してシャツの襟元を寛げる。

「如何ですか、美音さん？」

ネクタイを指に掛けたまま、隣の彼女を見下ろして問い掛けると。

美音は相変わらず頬を紅潮させたまま、声も出ないようで金魚のよ
うに口をぱくぱくさせ、芹沢を見返し。目を逸らす事さえ出来ない
ほど混乱しているのか、固まったまま微動だにしない。

ああ、どうやら俺は。

彼女から全く意識されていない訳では無いらしい。

「……可愛い人ですね」

彼女の様子に、くすくすと笑いながらそう口にする、美音はから
かわれたと解釈したのか、途端に頬を膨らませてそっぽを向いてし
まう。

「……睦さん、酷いです。」

そんな威力抜群の兵器を使うなんて」

「ただ暑いから寛げただけなのですが。」

なるほど、美音さんにはこれは高威力の破壊兵器に相当するのです
か」

それは良い事を聞いた。

美音の無自覚な誘惑に、常々惑わされて弱りきっている芹沢として
は、彼女に対抗出来る術を発見出来たのは大収穫だ。

「なっ、この期に及んで分かって無いフリとかですかっ！

そっちがその気なら、私だってハムラビ法典に則っちゃいますよっ」

美音はふう、と頬を膨らませて、え、と反応できずに固まる芹沢の
目の前で自らの制服のリボンを手にかけ。

彼が止める暇も無く、解かれるリボンと外されるボタン。

「さあどうですか！」

美音はふん！ と胸を張り。

普段はきつちりと首まで留めている美音のシャツが少し開かれて、日に焼けていない、真っ白い素肌が無防備にさらけ出されている。

彼女はきちんと分かっているのだろうか。たとえ座った状態でも、身長差から芹沢が美音を見る時は、見下ろす形になる事実を。

「……………」

「……………って、私には睦さんみたいな色気なんて、ちっとも無い事が判明しただけですけど」

彼の内心の激しい葛藤を全く察していない美音は、実にあっさりと再びボタンを留めて。彼にとっては凶器ではない、視線を強烈に吸い寄せる柔らかさそうな白さが、ようやく慎ましく隠された。

芹沢は無意識に止めていた息をゆっくりと吐き出す。

(……………危なかった……………)

ほんの数秒の筈なのに、永遠にも感じられた長い戦いに勝利した彼は、しみじみと実感する。

……………俺は、いつまで無防備で無自覚で無邪気な彼女に翻弄され続けるのだろうか。

早く、気が付いて下さい。

貴女の目の前に居る俺は、貴女を欲しがっている男なんです。

いつもこんな調子では、俺は貴女の無自覚な誘惑に、ずっと耐え続けていける自信がありません。

診断、恋煩い 処方箋 5・その場の勢いが暴走しました

夏の日々は、どんどん過ぎてゆく。

芹沢に殆ど一目惚れ……いや、一音惚れ？ をした出会いは八月初頭。

そこからセミファイナルを経て、もうすぐヴァイオリン部門のソロファイナル選考の日が来てしまう。

神南アンサンブルはセミファイナルで星奏に敗れた為、彼らが横浜に滞在している理由は、残るは部長である東金のソロファイナル選考のみ。

風の噂で聞いたところでは、横浜での滞在を延ばしているのはかなでを神南に勧誘する為とか小耳に挟んだが、本当のところはどんなのだろう。

神南で学ぶ方が、より彼女のヴァイオリンの実力は磨かれ、高められるのだろうか。

美音はほたほたと歩きながら、溜め息をついた。

東金や土岐に自分はそれなりに気に入られている、そんな気はする。だが、自分は神南へと勧誘の台詞を受けた事など一度たりとて無い。

何より、芹沢と頻繁にやり取りをしつつ地道なアタックを続けているが、彼はいつも大人な態度で柳のように受け流してしまう。

そんな彼からも、やはり一言たりとも勧誘台詞など聞いた事が無い。

別に、神南に通いたい訳では無いが……いや、夏が終わっても毎日芹沢と会えるのならば、通いたい気がする。

けれど、そもそも自分達の仲が遅々として進展しない事の方が、大いに困る問題点だ。

友人としてはかなり親しい方だとは思うのだが、何しろ美音は男性から『小動物・愛玩動物・喋って動くぬいぐるみ』として認識される事は多々あれど、異性として意識される事などほぼ皆無。

女性らしい可愛らしさや美しさなど、一朝一夕で身に着くものでもない。

……ここは、なんとかして芹沢の心を射止める為、今まで以上に努力をしなくては。

だが、具体的にはどう作戦を立てれば良いのだろうか。

深く悩む美音の目に、ウインドウディスプレイが映る。

可愛らしい小物や、ヒールの高い靴、キラキラしたアクセサリー。

何よりも美音の目を惹いたのは、マネキンが身に着けている可愛らしい薄桃色のドレス。

ドレープの広がりや、合わせられている肘まである清楚なシルクの手袋、髪に飾る華やかなリボン。

いわゆるイブニングドレス、ローブ・デコルテ。

自分もこんな綺麗なドレスが似合うような美少女なら、彼も振り向いてくれていただろうか？

今更そんな事を考えたところで意味は無いが、こういった美しい装いに憧れを抱くのは乙女のサガだろう。

こんなドレスを着て、芹沢から優しい微笑みを向けられて褒められたら、天にも昇る心地がするに違いない。

ウインドウに手をついて、ドレスに見入りながら溜め息をつく。

「着てみたいのですか？」

「んぎゃっ!?!」

熱心にドレスを見つめていた美音は、背後から不意に掛けられた声に驚いて、思わずおかしな悲鳴と共に飛び上がった。

恐る恐る振り返ると、芹沢がにこりと微笑んで立っている。

見られてた。ぽやっとドレスに見とれている姿を、何でか観察されてた。

「こんにちは、美音さん。偶然ですね」

「む、睦さんっ、いつたいつからそこにつ?」

「さて、いつからでしょう?」

にっこりとした笑みのままはぐらかされ、芹沢は再び問ってくる。

「そのドレスを着てみたいのですか?」

「ええっと……」

美音は視線を逸してしばし躊躇ったが、素直に頷いた。

食い入るようにディスプレイの前に立っていたところを見られては、最早美音の憧れの気持ちなど一目瞭然だろう。

「分かりました。では入りましょうか」

「……え?」

「ですから、こちらのお店に」

芹沢は当然のように美音の手を取り、スタスタと歩を進める。

「ちよっ、む、睦さんっ?」

混乱する美音を意に介さず、芹沢はドアを開いて入店し。

「すみません、ウインドウのドレス、彼女に合うサイズはありますか？」

平然と店員に声を掛け、美音を示す。

「まっ、待って睦さん」

「おや、美音さんは既製品ではお嫌でしたか？」

今から寸法を測って、生地とデザインを選定するとなると、完成まではそれなりに時間が掛かりますが、などと口にする彼に、目眩がする。

「で、ですから……っ」

こんな礼服を専門に扱っているようなお店でドレスを試着して、そのまま「きゃー素敵ー」で、買わずに帰るとか、出来ませんっ！という主旨の主張をしどろもどろに口にする美音に、芹沢は納得したように頷いて。

「なんだ、そんな事ですか。」

俺が買って貴女に贈りますから、問題にもなりませんね」

芹沢は爽やかな笑顔で、実にあっけらかんと告げる。

「……え？」

「さ、こちらへどうぞ、お嬢様」

高価なドレスを、芹沢が買う？

でもって、美音に贈る？

事態についていけずに固まる美音の両脇に、お店の店員さんが寄り添ってきて。例のドレスを本当に出してきたのか、彼女を試着室へと促す。

待つてっつ、私達みるからに高校生で、一見さんじゃないですかっ。何でそんな皆さん、悪戯だろうとか場違いだとか嫌な顔も見せずに、笑顔で接客にあたってるとるんですかーっ!?

焦る気持ちばかりが空回り、言いたい事はあうあうと一つもまともに言葉にもならないまま。

美音は試着室にて数人の女性店員の手によって、本当にあの薄桃色のドレスを身に纏い。

髪にはリボントリーミング、首元には可愛いネックレス。手袋やショール、靴まで。

見事に頭のとっぺんから爪先まで飾り付けられた美音は、呆然と姿見を見遣る。

あれよあれよと言う間に本当に着替え終わったが、未だに、事態についていけない。

「失礼しますね。」

ああ、よくお似合いですよ美音さん。

とても可愛らしい」

試着が終わったと報せを受けたのだろう、芹沢が試着室のドアをノックして入室して来て、姿見の前で呆然と佇む美音を見つめ。にっこり微笑んで褒めそやす。

ギギッと軋んだ音がしそうな動きで首を動かし、彼の方に顔を向けた彼女は、何とか現在の状況を理解しようと努める。

「睦さん」

「はい、美音さん」

足を動かす事すら叶わぬほど混乱している美音の傍らに立ち、芹沢は彼女のドレス姿を子細に眺めて満足そうに目を細める。

「私、どうしてホントに今、ドレスを着てるんでしょう」

「貴女が着たいと言ったから」

「どうしてお店の人は、ホントに着せてくれたんでしょう？」

芹沢が入室してくるなり、一礼して退室して行った店員さん達の下にも置かない丁寧な持て成しの様子を思い出しつつ。

「ああ、ここは部長の気に入っているブティックの一つなんですよ」

俺も何度か足を運んだ事がありますから、顔を覚えられていたんでしょうね、と、何でも無い事のように答える。

……そう言えば、神南ってお金持ちの子弟が多く通うせれぶりいな学校だとか、聞いたような。

美音は何の疑問も抱かず、芹沢を自身と同じような中流家庭の家の子だと勝手に思っていたのが……

芹沢の育ちの良さを感じさせる普段からの言動、高価なドレスをポイント、単なる友人に向かって贈りますから発言。もしや彼は元々、自分では手が届かないような、そんな世界の住人だったのか？

「美音さん、あまり嬉しそうじゃありませんね。」

そのドレス、着てみたかったのでしょうか？」

「そうですね、そうじゃないんです」

では、自分は何がしたかったのかと言えば、ただ芹沢との距離を縮めたかっただけなのだ。

こんな風に、彼が遠くにいるような気分を味わいたかったのではない。

「どうして、睦さんは私にドレスを買うなんて言うんですか」

「俺が貴女にドレスを着せたかったからです」

半分泣きたくなりながら訴えると、芹沢は真顔でそんな返答をしてきて。

『どうして、どうして』ばかりを繰り返す美音に、彼は根気良く一つ一つ丁寧に答えていく。

「本当に、よく似合っていますよ。」

貴女はご自分に似合う服を選ぶのがお上手ですね」

そんな優しい言葉を言わないで。

私の手が届く事が無くて、ただからかって遊んでいるだけなら、これ以上構わないで。

私が勘違いしてしまう前に。

けれど、もう手遅れなのだろうか。どうしようもなく彼に焦がれる前には、戻れないのだろうか。

「睦さん……」

彼の方に一步踏み出してみる。

綺麗なドレスが似合うと、微笑んでくれる彼に触れようと手を伸ばすが、履き慣れない高いヒールで足元がグラグラし、転びそうになっってしまう。

「きゃっ！」

「おっと」

転倒しかけたところを芹沢に抱き留められて、美音はほっと安堵の息を吐いていた。

「大丈夫ですか、美音さん？」

「すっ、すみません睦さん……」

こんなに踵が高い靴、履き慣れてなくて」

こんなに高く無くても良いと思うのに、と美音がつい不平を零すと、芹沢はくすくすと笑い出した。

「駄目ですよ、美音さん。」

そのドレスにはその靴でなくてはね」

「え、でもこれじゃあ、大抵の人はまともに歩けませんけど」

足元を見下ろして、凶器とか枷だとか果ては拷問器具にしか感じられないヒールの高い靴をマジマジと見遣る。

これで踏み付けたら、絶対穴が空きますって。

「そんなに可愛らしい格好をしていて、歩き易い靴を履かれていては、貴女はフラフラと何処かへ一人で行ってしまって、誰かに拐われかねませんから。」

美音さんにはこうやって、常に俺の隣りで支えられながら歩いてもらいませんと」

と、抱き寄せられた状態のままの芹沢から意味深に呟かれてしまい。美音はサツと頬に血が上るのを感じながら、べしべしと彼の肩を叩

いていた。

「もうっ、睦さんはまたそんな事言って！

そんなに私をからかうのが楽しいんですかっ」

「楽しいです」

「むきーっ!？」

叩かれるのは痛かったのか、芹沢は美音の手を掴んで止めさせ、

「正確に言つと、からかいではなく……誘惑、でしょうか。

貴女の反応はいちいち可愛い」

もっとなんか惑わされて、頭の中を俺で一杯にしてしまえばいい。

そう囁かれて、美音は口をぽかんと開いて彼を見返していた。

「睦さん……?」

「美音さん、俺は」

真剣な眼差しで、不意に見詰められて。

美音の背中に回された彼の腕に、力がこもった。

ゆっくりと彼の顔が近付いてきて、彼の掠れた声が美音の耳に届き。

彼女がその意味を把握する前に、彼の唇がそつと重ねられた。

貴女を誰よりも愛しています。

甘い台詞お題 心臓が保たないだろ、馬鹿

セミアイナル、その前日。

恐らくはこのアンサンプルも、本番へ向けて最終調整を行なったであろうと思われる今日。

明日、そして明後日に備えて早めに休まねばならないところである。だが、夕食をとり終えた芹沢は、湯を使って体は汗を流してさっぱりしたもの、少しばかりもややもやした気分を抱えていた。

菩提樹寮にあてがわれた自室で、風呂上がりの濡れた髪をドライヤーで乾かしつつ、彼はふうと小さく溜め息をついた。

原因は分かっている。

この数日、お互いにアンサンプル練習の方を優先した結果、美音とまともに会う時間が取れなかったのだ。

メールのやり取りは頻繁に交わしているし、夜には電話をくれたりもする。

だが、足りない。

今からこんな調子で、俺は果たして神戸に戻った後は彼女と離れて過ごす毎日に耐えられるのだろうか、と、夏が終わった後の未来を考えてみる。

深く考えるまでもなくすぐに答えが出る。無理だ。

せめて、彼女の心を獲得してからでなくては、離れがたい。

美音に何処かの馬の骨がちょっかいをかけてきたとしても、防ぐどころか恐らく察知する事すら出来やしないだろう。

いや、俺はむしろ。

彼女を神戸に連れて帰りたいたいだ。

美音は特待生だそうだから手続きはかなり煩雑になりそうだが、神南への編入だって、やってやれない事はない。

だがしかし、そもそも全ては美音本人の同意が必要だ。

ただ、彼女との現在の関係が『親しい友人』である芹沢がどんな勧誘をしたとて、頑固な小動物のような義理堅いあのお嬢さんが、天音学園から別の学校への転校などを了承するとは思えない。

またしても溜め息混じりにドライヤーのスイッチを切ったところで、傍らで充電器に接続していた携帯が明滅している事に気が付いた。

取り上げて確認すると不在着信が一件、掛けられた時間はほんの一分前。発信者の氏名は『美音さん』。

しまった、ぼんやり考え事なんてしながらドライヤーを使っていたから、彼女から電話があった事に気が付かなかった。

失態に思わず舌打ちしつつ、即座にこちらから掛け直すと、さほど間を置かずに繋がったようだ。

「もしもし、睦さん？」

電話越しに聞こえてくる、いつもの柔らかく愛らしい声。

だが、通話に妙に雑音が混じるような、もしや屋外から掛けている？

「今晚は、美音さん。」

何か、電話越しに足音が聞こえる気がするのですが……まさか、こんな時間に出歩いているんですか？」

こんな暗い中、女の子がいったい何処を歩いているのかと、思わず
そう咎めるような口調で尋ねると、足音がぴたりと止まった。

「えーと、はい。あの、でももう着きましたから」

「ご自宅にですか？」

まさかとは思うが、彼女が一人で夜遊びでもしているようならば、
何処へなりとも赴いて連れ戻さねばと考える芹沢であったが、

「じ、実は今、菩提樹寮の前に来ています」

美音から告げられた場所は予想の範疇外であり、不覚にも一瞬意味
が分からなかった。

「……………え？」

我ながら間拔けな疑問の声漏れる。

一拍置いて、理解が追いついた芹沢は自室のドアを開け放って、な
るべく足音を忍ばせながら男子寮の階段を可能な限りの速さで駆け
降り、玄関ホールを飛び出した。

視線を巡らせれば、門の向こう側、門扉に背を凭れるようにしてし
やがみ込み、携帯を耳に当てている一人の少女。

「……………美音さん！」

時間が時間だけに、他の住人の迷惑にならぬよう……………いや、正直に
白状するならば気が付かれて邪魔入りされないよう。なるべく、声
量を抑えて呼び掛ける。

「睦さん」

立ち上がって振り返る、夜闇にも仄かに白く浮かび上がる、純白の制服姿の彼女。

一目散に駆け寄って門扉を開け、美音の中に入れてやると、

「えへ。来ちゃいました」

悪戯が成功したかのような、無邪気な笑みを浮かべて見上げて来る。芹沢はそんな美音の腕を思わずグツと掴んでいた。

「来ちゃいました、じゃないでしょう。」

こんな時間に一人で出歩くななんて、危険だとは思わないのですか」

あまりにも、無防備で、考え無し。

何かあつてからでは遅いのには。

「む、睦さん、痛いです〜っ。」

だ、大丈夫ですよ。私こう見えても、結構強いんですから」

ぷう、と頬を膨らませる美音に、益々苛立ちが募る。

「……本気で握り潰すつもりで掴んだ訳でもない、俺の手が貴女には痛くとも、振り払えない癖に？」

門柱に美音を押し付けて、低く問い掛けた。

貴女は分かっているのか。

犯罪はスポーツなんかじゃない。危害者にはルールも倫理も存在しない。

貴女はか細い少女で、俺は貴女よりも大柄な男だ。たったそれだけ

の俺でさえ、貴女を押さえ付ける事は容易い。

「……睦さん、怒ってる？」

だが、今にも泣き出しそうな、潤んだ眼差しで恐る恐る問われ。本当に、ズルい人だ。貴女のその表情の前には、全てを許してしまいたくなる。

「ええ、怒っています」

そんな事は無いですよと、甘やかしてしまいたくなる心を鬼にして、なんとか威厳を保って首肯する。

「急に来て、迷惑だったから？」

「どうしてそうなるんですか。さっきから言っているでしょう。」
夜更けに一人で出歩くな』と

「……はい」

しゅん、とうなだれた美音からは、先ほど見せてくれていた愛らしい笑みが消えてしまっていて。

表情には出さないようにしていたが、内心慌ててしまい、思わず、

「美音さん、俺に会いに来てくれたんですか？」

美音を甘やかすような問い掛けをしてしまう。

そして問題のお嬢さんは、その質問にはこくと小さく頷いてあっさり肯定してくる。

ああ、まったく……

俺は本当に、どうしたって貴女にはかなわない。

「なら、次からは俺の方から貴女に会いに行きますから、美音さんは大人しく待っていて下さい」

溜め息混じりにそう告げると、彼女は不思議そうに「え？」と呟いて。

「来訪してからこちらの都合を気にするぐらいならば、呼び付けて下さい。」

貴女が呼んでくれたなら、俺は喜んで向かいますよ。

……俺の都合がつく限り？」

きよとんと芹沢を見上げて来ていた美音は、最後に彼から付け加えられた台詞にぶつと噴き出した。

「わ、分かりました。」

私があいたくなって、睦さんの都合が悪くなければお願いします」

くすくすと笑み零れる可愛い人。

でも、貴女は分かっているじゃないでしょう。

貴女が一言、俺に会いたいと言えば。俺はきつと何を置いても。地球の裏側からでも海の底へでも、喜んで向かうと思えますよ。

貴女に会いたくてたまらないのは、俺の方なのだから。

「分かって下さったなら、二度と夜間の一人歩きはなさらないで下さい。」

……俺の心臓が保ちません」

ぼむぼむと彼女の頭を撫でてやると、美音は満面の笑みで「はい」と良いお返事。

ああ、貴女の笑顔も、俺の心臓を激しくさせる。

けれど、こればかりは失えない。

きつとこの美音からの微笑みが絶たれたら、俺の心臓の方が止まってしまうに違いない。

甘い台詞お題 君しか見えない

会いたくて、会いたくて。

ただどお互い忙しくて、もう二日もまとまに会っていない。
人からしてみれば高々二日。だけど、睦さんが横浜で過ごす時間は
本当に僅かしか無いのだ。

一日、一分一秒だって貴重。

たまりかねて睦さんが宿泊している、星奏学院の学生寮に向かったら、夜にホイホイと一人で出歩くなと怒られてしまった。

心配をかけてしまったと反省はするが、私は彼に会いたかったのだ。

『呼んでくれたら、俺の方から会いに行きます』

そう言ってくれる、彼の優しさが嬉しくて仕方が無いけれど。

でも、私もそんな冗談を彼の本心からの申し出だと真に受けるほど、
おめでたくはない。

「あの、睦さん……もっと一緒に話してくれませんか？」

今は全く痛みは無いが、まだ掴まれたままの右腕を引っ張って注意
を引き、お願いしてみる。

もしかして、もう帰れと言われてしまうのだろうか。

「今からですか？ 俺は構いませんが……」

美音さんの方が、明日に差し支えるのでは？」

なんと言っても、美音の方は本番は明日なのだ。

「このまま帰ったら、逆に明日に支障が出ます」

首を振って我が儘を述べてみる。

だって、せっかく貴方に会いに来たのに。

叱られてうなだれてお終いだなんて、あんまりだ。

「では美音さん、こちらへどうぞ」

芹沢は掴んでいた腕をそつと離し、今度は手を繋いでくれた。

大きくて温かい手のひらに導かれるまま、花壇を回り込んで寮の庭を横切る。

こちらへと示された先には、ベンチが置かれていて。

大きな木の枝が葉を茂らせ、眠りに沈む花々に囲まれた、ほぼ真ん丸な満月の光の下の小さなその場所。

並んでベンチに腰掛けて、どうして寮の中に入れてくれないのだろう、と疑問を投げ掛けてみると、

「時間が時間ですから。休んでいらっしやる方もおいでかもしれないかもしれませんので」

起こしてしまっただけはいけないでしょうか？ と、穏やかに芹沢から言われて、納得する。

ちらほらと明りが点っている部屋も見受けられるが、殆どの部屋は真っ暗だ。

まさか、芹沢の部屋に入れてくれだなんて、そんなはしたない事は言えないし。

いや、とてつもなく彼の部屋には興味があるし、入ってみたいけれ

ど。

そんな事を彼に向かって言い出そうものなら、またしてもお説教をされてしまつに違いない。

「そういえば、私、睦さんの私服姿を初めて見ました」

改めて芹沢に頭から爪先まで視線をやった美音は、ふと気が付いた事を呟く。

お互い、ほぼ常に会う時は練習の合間、つまり制服を身に纏っているので、美音は彼の私服姿を拝むのは初めてだ。

仮に、菩提樹寮で暮らしていたら、こんな素敵な彼が毎日見れていたのか……

くうつ、こんな事ならハルちゃんの薦めに従つて、星奏に通えば良かった……！

無論、仮に星奏に入学していたとしても、実家からほど近い学院に通うのに、入寮するなどという選択肢はまず浮かばなかっただろうが。

「え？ あ……」

美音からそんな指摘を受けた芹沢は、一瞬戸惑つたように自らの格好に視線をやり、額に手を当てる。

「……美音さんが急に不意打ちをしてくるから……
着替える暇がありませんでした」

失敗した、と口の中で小さく呟く芹沢は、珍しく少し照れているよ
うで。

「凄く素敵ですよ？」

制服のピシツとした姿も決まっているけれど、ラフな七分袖Tシャツにチノパンツ姿も格好良い。

「…………有り難うございます。

次の機会には、美音さんも私服でお願いしますね」

純粹に格好良いと見惚れていただけなのに、芹沢は恥かしいところを見られたと言わんばかりの切り返しをしてくる。

「え」

果たして、こんな素敵な彼の隣りに立つに遜色ない服なんてあっただろうか、と、クローゼットの中身を思い出してみるが、どうもイマイチ、子供供した服しか無い。

何しろ美音が着てもさほど変ではない服と言えば、ピンクだの花柄だの、ふんわかしたロマンティック系なのだから仕方が無い。

無理矢理大人っぽいシックなデザインの服を試着してみても、懸命に背伸びしているのがみえみえで、失笑を買うのが精々。

一番大人っぽい服が制服とか、自分どうなんだそれ。

「約束しましたからね？」

今度は、私服で遊びに行きましょうね美音さん」

「う、はい」

いっそ、昔着てた男装を披露してやろうか。

あれなら一応、年相応に見えるし。

「それで、今夜は急にどうかなさったんですか？」

今度は美音にも私服を着て来いと的確約を取り付け、不用意に私服姿を晒す羽目になった事態に多少溜飲を下げたのか、芹沢がおもむろに今宵の来訪理由を尋ねてくる。

「あのですね、睦さん」

芹沢の手を両手で握って、しかし彼の目を見つめる勇氣は湧かず、胸元辺りに視線を固定したままポソポソと動機を告げる。

「明日と明後日は、セミファイナルじゃないですか。」

それで明日、うちが勝ち進んで、明後日を神南が星奏に勝ったら。そうしたらファイナルは……」

当然、最終決戦は天音対神南となり。

ファイナル準備期間は、今まで通りに芹沢と会う事は難しいだろう。いや、むしろきっぱりと会う事を取りやめるべきだ。

そう考えたら、いてもたってもいられなくなって。

気が付いたら、芹沢の下へと駆け出していたのだ。

「それで、まさか俺に大会の舞台上で手を抜けとでも？」

「まさか！」

やや呆れたような芹沢の言に、弾かれたように彼の顔を見上げてきっぱりと否定する。

「真剣勝負の場で手を抜くだなんて、そんなのは人の道に反します

っ

芹沢の手を握る指に、少しだけ力を込めて力説。

「なら、美音さんは何が言いたいのですか？」

真直ぐに目を見つめ返されて、息を飲む。

こんな風に、芹沢に見つめられただけで、頭の中が真っ白になって何も考えられなくなる。

最低な工作をしに来た、そんな誤解を解いて、ここに来た目的を、言わなくてはいけないのに。

「私……」

「はい」

「睦さんに会いたくて仕方がなかったんです」

「……」

しまった、頭が回らなかったからって、つい本音を吐露し過ぎた！

美音のうっかり告白に、芹沢はどう反応していいのやら、と言いたげに困惑気味に瞬きをして。

「つまり、強いて挙げられるような理由は無い、と？」

「ええつとですからっ」

芹沢から心底疎んじられて『もう帰って下さい』と言われる前にと、美音は慌てて言葉を繋げる。

「ファイナルが天音と神南の対決になったら、当然準備期間にも、会うべきでは無いですよね!？」

「まあ、そうですね」

「で、ですからそれに備えて、前倒しでスキップしに来ました！」

「……はあ？」

美音の必死なまでの自棄っぱち発言に、芹沢は意味が分らないと表情に疑問符を浮かべている。

「ですから、十日分の交流を、今夜に凝縮して先に体感しよう」と

もう、自分の気持ちを上手く解説して芹沢に納得して貰える自信が全く無い。

口で説明するよりはと、がばりと彼の体に抱き着いて腕を回す。

「美音さんっ!?!」

流石に芹沢から仰天したようなひっくり返った声上がるが、やはり基本的に心優しい彼は、友人を無理矢理振り払おうとはしない。

心臓がバクバクとこの上なくうるさく騒ぐ。

だが、今夜を逃せばもう次は無いかもしれないのだ。

猫が気に入った相手に全身を使って擦り寄るように、美音もまたぴつとりと引つ付いて彼の胸元に頬を擦り寄せる。

彼は良い匂いがして、温かくて。うつとりと幸福感に目を閉じた。

「美音さん、これは近過ぎると思います……!」

「十日分ですから、これぐらいで良いんです」

離れてくれ、と訴えられるので、嫌だと思表示をしてしがみつく。

離れたくない。側に居たい。

私のただの我が儘だと、独り善がりだと分かっています。

でも、貴方と離れなくちゃならないなら、せめてほんの僅かでも、私を貴方の心に刻み付けたい。

私が貴方しか見えないように、せめて今だけでも、貴方も私しか見えなくなるように。

甘い台詞お題　ご馳走さま。…まだ足りないか？

セミアイナル、二日目。

一日目に勝利を収めた横浜天音学園。そして本日の対決にて、ファイナルの出場校が決するのだが……
舞台袖にて、東金は湧き上がる観客を視界に収め、静かに口を開いた。

「勝負はついた、か」

まだ判定は発表されていない。だが、この観客席の様子が既に結果として出ている。

手を抜いたつもりは無い。だが、必ず勝てる相手だと、芹沢は心のどこかで星奏を侮っていたのかもしれない。

悔しい。必ず、今日を勝ち取ってファイナルに進みたかったのに。純白の彼女との対決を、待ち望んでいたというのに。

ふと、美音の姿を思い出すと同時に、セミアイナル前夜の逢瀬……多分あれは分類するなら逢瀬だ……の時の様子が蘇ってしまった、芹沢は思わず壁に頭を打ち付けたくなった。

甘い匂いと温かい体温、蕩けるような柔らかい体をぐりぐりと押し付けられて、固まるしか出来ない芹沢の膝の上に平然と座り、嬉しそうに表情を綻ばせていた彼女。

我ながら、あんな事態に遭遇して、よく理性を保ったまま彼女を家

まで無事に送り届けたと褒めたい。

……それはとにかく。部長も副部長も、負けたからといって無様な姿を晒すでもなく、ここまで強い相手と競えていっそ清々しいなどと笑顔で言い放つ始末。

相変わらず、うちの部長副部長は、大物だ。芹沢としては、そこまであっさりと割り切れないというのに。

更に彼らの常人の常識の遙か上を行くと思われる点は、本日の対戦相手である星奏アンサンブル、彼らを勝利に導いた1stヴァイオリンの小日向かなで。

その彼女を、あろう事か会場出入り口前で出くわした星奏の面々の前で堂々と神南に勧誘している。

何が恐ろしいかと言えば、冗談としか思えない台詞の数々、それらが全て彼らの本気である、という点だ。

確かに、小日向さんが部室に居たら俺は毎日が助かるだろうな、とは思っ。

きっと部長副部長の関心は、彼女に向かうに違いないので。いや、逆に小日向さんに纏わる気苦労が増えるのか。

しかし、彼女は2年生なのだから、3年の部長達が部で関われる時間には少ないのでは？

ふぎけるな、ときゃんぎゃんと文句を言っている星奏のハルと響也。そんな友人らを尻目に、かなで本人は勧誘を全く本気に取っていない様子できよとんとしている。

まあ、これが普通の反応だろう。

「あれーっ、ねね、そーちゃん。なんかハルちゃんの声がしない？」

「おいつ、引つ張るなよ美音！」

そんな真つ只中へ何か、周囲を取り巻く花火大会に向かう人込みの中から、聞き覚えのある声が聞こえてきて。

「あつ、ハルちゃん見つけ！」

人込みを無理矢理通って来たらしき、天音の制服の1年生2人組。たまに通行人とぶつかりつつ、仲良く手を繋いだままこちらに向かつて駆けてくる、美音と七海。

「ハルちゃ〜んっ！」

「だからお前は……オレの事も少しは労れ……っ！」

無理矢理引つ張られているらしき七海は、文句を言いながらも手を離そうとはしない。

「……美音？」

駆けて来た友人達に、ハルは毒気を抜かれた様子で脱力している。

「美音ちゃん、七海君！」

奇遇だね」

そんな天音の2人に真つ先に反応したのがかなで。相変わらず、彼女は美音を気に入っているらしい。

……出遅れた。

美音はかなでに笑顔を向け、

「って、え、何か凄い密度!?
これがいわゆる三巴って状態ですね!」

星奏と神南のアンサンブルメンバーが勢揃いしている事に、驚いたように身をのけ反らせた。

「アホかお前は。お前如きが天音を代表するつもりでいんのか、プリン」

それにはすかさず、東金がびしっとでこピンでツッコミを入れている。

額を両手で抑えて、大袈裟に痛がる美音。

手が、離れた。

キリキリとした胸の痛みととてつもない不快感が、もやもやとした不満程度には落ち着きをみせる。

「美音さん」

声を掛けて。

何がしたいのだろう、俺は。

「睦さんっ! 今晚は!」

ぱあっと表情を輝かせて、傍らへ駆け寄られて。

今すぐこのまま、連れて行きたい。

彼らから引き離して、俺以外は誰も彼女に触れようとしないどこかに。

「はい、今晚は。」

せっかくの機会ですので、一緒に花火大会を見に行きましょうか」

挨拶と共に一息に彼女をデートに誘う。

美音は押しに弱いらしく、強引に事を運ぶと流されがちだと学んだので、こんな時はとにかく押せ押せだ。

案の定、彼女は目を瞬かせながらも頷いて。

「あ、はい。」

ええっと、つまり皆で花火見物ですか？」

疑問を投げ掛けてくるので、にっこりと微笑み、

「違います。俺と美音さんの2人で、です。」

では部長、副部长。今日はこれで」

きっぱりと否定して美音の肩を引き寄せて、芹沢は東金と土岐に声を掛けた。

「おう。お疲れ、芹沢」

「楽しんできたってな」

突如他校生をデートに誘って暇を告げる後輩を全く気にした様子も無く、鷹揚に頷く部長と副部长。

彼らはやはり、大物だった。

「え？ え？ ふ、2人でなんですか？」

あ、七海、ごめん何か七海と花火大会に行けなくなっただけみたい？」

「あー、うん。見れば分かる。オレの事は気にするな」

遠慮無く美音の背に腕を回して歩き出すと、彼女は狼狽えたように顔だけ背後を振り返って一緒にやって来た友人に、一言断りを入れた。

その様子に、七海の方は『頼むからこっちに気を遣うな』と言いたげな様子で投げやりに手を振り。

「彼の方は、よく弁えているようで」

「え。何か仰いました、睦さん？」

ボソリと零した独り言、それを聞き取れなかったらしき美音が尋ねてくる。

「いいえ。何でもありませんよ？」

鈍い彼女に言い聞かせても、きっと理解はしてくれないだろうとはぐらかす事にして。

「それで美音さん、何か会場で食べたい物がありますか？」

「良ければ奢りますよ」

「ホントですか!？」

「なら、私かき氷が食べたいです」

食べ物で釣ってみると、あっさりと引っ掛かってしまつ単純過ぎる美音。

どうして貴女は、そんなにも無防備なんですか。

そんなに浅はかで良いんですか。

これはとてつもなく信頼されている、とみるべきか。

それとももつと安直に、自分は男として全く意識されていないとみるべきか。

花火大会の会場であるコスモワールドに着き、まだ花火が上がる前であるが、全く気にせず芹沢が奢ったかき氷をしゃくしゃくと口に運び、満面の笑みを浮かべている美音と並んで座って。まだ花の咲かない夜空は、真っ暗な暗幕を広げている。

「美味しいですか？」

「はいっ。睦さん、ご自分のは食べないんですか？」

ニコニコと尋ねてくる美音の頭を撫でてやりたい。

しかし、かき氷のカップで手が塞がれていて貴女に触れられない。少し考えれば分かった事だが。どうやら俺は、よほど精神的に参っていたらしい。

パクリと一口口に含むと、細く砕かれた氷と蜜が舌の上で溶け合っ
て。少しキツい甘さが広がる。

「こう、氷を一気に食べると、頭がキーンときますね」

「それはそうですが。」

ですが美音さんは、もっとゆっくりと食べるべきでは？」

ぱくぱくと苺シロップのかかったかき氷を口に運んだかと思えば、
おおおと呻き出した彼女に、いったい何をやっているのだろう、
と、肩の力が抜けてしまう。

彼女はどこまでも自然体で、全く構えが無い。

芹沢は頭痛を堪えている美音の手にしたかき氷の入ったカップに、
自分のスプーンを差し込み。掬い取って口に運んだ。

「うーん、こちらも甘いですね」

シロップのかけ過ぎではないだろうか。

それとも自分が知らないだけで、かき氷はこのぐらいの甘さが普通なのか？

「ガーン……横取りされた……！？」

「おや、失敬な。奢るとは言いましたが、俺も全く食べないとは言つてはおりませんか？」

何の為に、違うシロップのかき氷にしたと思っっているんですか、としれつと答える。

「まだ足りないのなら、美音さんもこちらを召し上がりますか？」

そうして自分の分のかき氷を彼女の目の前に差し出してみると、美音はやはり全く躊躇無く「わーい」と喜んでスプーンで掬い取って口に運ぶ。

……やはり、全く意識されていないのか、俺は。

「あ、メロン味も美味しい」

「美音さんは本当に、甘い物が好きですね」

まだまだこれから先も、道のりは遠そうだなと内心嘆息しながら溜め息混じりにそう呟くと、

「睦さん、それはもしかして遠回しな嫌味ですか？」

そんなところだけは、敏感に察知する小動物。

「さて、何の事でしょう？　俺が美音さんに嫌味だなんてそんな、ご冗談でしょう？」

「むきーっ!？」

なんですかその、わざとらしく何かを含んだ言い回しっ!」

足の踵で地面を蹴り蹴り、不満を露にする美音に、

「ふむ。俺はただ、美音さんはもっと甘い物を食べたがるだろうな、と思っただけなのですが。」

そうですね、要らないんですか」

なら、奢って差し上げる必要はありませんね、と結ぶと、美音は空になったかき氷のカップを傍らに置き、ガシツと彼の腕を両手で掴み。

「睦さんとはとっても優しい、素敵な人です!

だからもっと食べたいです!」

そんな宣言をされて、芹沢は思わずズルツと体が滑った。

「美音さん、正直は美德ですが、その台詞は前半と後半の関連が曖昧過ぎて、人から誤解を招きます」

「え?」

甘い物に賭ける情熱は人一倍な美音は、本当に分かっているいらしく、芹沢の返答にきよんとした目を向けてくる。

丁度、花火大会開始時刻が来たのだらう。彼の背後でひゅるるゝと、打ち上げられていく音がして。

「俺が食いたいですか？」

ええもう、食べたくて物足りないのなら、いくらでもどうぞ。」

真夜中に光が輝き、殆ど同時にパンツ！ と、炸裂音が辺りに響き渡る。

その腹の底にまで響く大きな音は、

「えっと、今、睦さんなんて仰ったんでしょう？」

花火に彩られて益々愛くるしさを増した可愛い人の耳に届く筈だった、芹沢の掠れた声でやや早口に心の奥底から放出された叫び、それを見事にかき消していた。

落胆したような、安堵したような、おかしい気分に陥りながらも、辺りの大音量に負けないように美音の耳元に唇を寄せて、囁く。

「次は、何を食べたいですか？」

一緒に食べましょう。」

その言葉に、美音は嬉しそうに微笑んだのだ。

甘い台詞お題 君の近くに居ると呼吸困難になりそう

芹沢から買って貰ったカルメ焼きを2人で半分こしてあむあむと食しつつ、彼と並んで華やかな夜空のフラワーショウを眺める。

「綺麗ですね」

美音はこの上ない幸せを噛み締めつつ、芹沢の耳元に囁きかける。
輝く花が咲くたびに盛大な音も辺りに響くので、大声で会話するか、直接耳元で声を発するか、だ。

芹沢により近付く為の体のいい建て前として、美音は勿論ちよつと腰を浮かせて彼の耳に囁く事を選んだ。
恋愛はルール無用の殺伐とした戦いなのだ。どんな些細な事象も利用して活かさねば。

特に、彼は麗しく、とても丁寧で気配りに長けている。要するにモテる。

オマケに本来遠方に住まう人物なのだから、よほど本気になって貰わなくては美音を選んでなどくれないだろう。

「ええ。横浜で見る花火も、とても綺麗ですね」

美音の想い人は、いつもの優しい微笑みが様々な光に照らされて、益々美しさを増して見える。

花火よりも、貴方の方がよほど綺麗です。

花火大会がセミアイナルと重なり、芹沢とは一緒に過ごせないだろうと半ば諦めていただけに、ホールの出入り口で偶然出会えて、彼の方から誘って貰えるなんて、なんて今日は幸運なのだろう。

それもこれもきつと、きちんと彼の教えを守って夜間に一人歩きをするのではなく、七海を無理矢理引つ張って歩き、彼が人込みに流されかけたりぶつかったりして、時間を取られたお陰だろう。

「こんなに綺麗な光景の中で、こんな事を言うのは相応しくないかもしれません」

並んで寄り添っていた芹沢が、お互いの体の間で重ねられていた手を握ってきて。

美音の肩に、ぽすんと彼の頭が乗った。

お互いに視線は相変わらず、夜空に向かっていているけれど。美音の心臓はバクバクし過ぎて、花火どころではない。

「俺は、本当に勝ちたかったんです……」

「はい……」

耳元で囁かれても、花火の音にかき消されそうなほどに微かな声。

「星奏と競えて、お互いに良い勝負が出来て。」

それに満足してるのも、本当なんです」

美音は繋いでいない方の手で、彼の頭を撫でてやる。指通りの良いさらさらな彼の髪は、するするとすり抜けていく。

「それでも、やはり負けた事が悔しい」

同意を示して美音は小さく頷く。

セミファイナル初日、天音は勝ち進んだ。だがそれは、本当に紙一重の勝利で。

全国大会が進行していけばいくほど、そこには敗れ去っていく人々が存在する。

勝ちたい。その思いは同じでも、全ての参加者に等しく訪れる勝利など、決してありはしない。

「睦さん。私は今日の睦さんの演奏、とても良かったと思います。今まで聴いた中で、一番輝いてました」

ゆっくりと、芹沢の頭を労るように撫でて。

「勝負は、そこから何を見出すが大切なんだと思います。ただ勝ち負けに囚われるんじゃない。負けた事でしか得られない何かもあると信じたい」

生きるか死ぬかの戦いじゃない。私達の真剣勝負は、私達自身が成長する為、磨かれていく為のもの。

勝者にしか成長が許されない勝負など、競う意義を見失う。

「ええ……」

でも俺は、貴女と競いたかった」

あの輝ける舞台の上で。

「私もです。」

睦さんと、もっと……」

お互いの思いを賭けて、互いに奏でるファイナルは、きっと。まるで愛を語らっているような、そんな錯覚をもたらしていたと思える。

「美音さん……」

来年は、必ず同じ舞台に立ちたいですね」

どれほど感情が乱れても。自分の中で気持ちの整理をつける、芹沢はそれが出来る人だ。

彼は強いんだな。また一つ、美音は芹沢に恋をする。

どうして、貴方はそんなにも私の心を揺さぶるんでしょう。こんなにも、好きなのに。まだ、深い想いがあるのだと。

「はい。来年こそ、リベンジですね。

それで、また、私と一緒に花火を見てくださいか？」

来年の今は。私達の関係はどうなっているんだろう。

たとえ、この想いが貴方に届かなくても。睦さんから疎ましがられて、嫌われていなければ良い。

空に咲く花が本当に綺麗で、綺麗過ぎて。何故だか涙が出てきそうになる。

「ええ、勿論。

来年もまた、一緒に花火を見ましょうね」

肩に乗っていた芹沢の頭が動いて、耳元に囁かれる。

来年の約束をしてくれる、それがとても嬉しい。

繋いだままの手に、指を絡めた。

「じゃあ睦さん、来年の花火は浜辺で見ましようよ」

ゴソゴソと更に彼との距離を詰めて、今度は美音の方が芹沢の肩に凭れてやれ！ と画策したのだが。

悲しい事に座高が違うせいで、顔が彼の肩に届かない。いや、芹沢の膝に座ってしまえば届くのは、前回調子に乗って勝手に座ったので知ってはいるのだが。

流石に今回もまた『お膝抱っこ』に及ぶには何か勢いというか、きつかけや大義名分が必要だ。再び芹沢の意向を無視してそんな行為に移行すれば、せつかくの友好関係が崩れてしまう恐れがある。

「浜辺ですか？」

「はいっ。海水に花火が映りこんで、海にも花火咲いたみたいでも綺麗なんですよ」

「それは楽しみです」

ぐりぐりと取り敢えず芹沢の腕に抱き着き、体勢を整えてみる。これはこれで、中々良い。何しろ普段並んで歩いている時は、やっぱり身長差から腕を組むとか抱き着いて歩くとか、まず無理だ。手を繋ぐのが精々な、己の低身長が憎いっ！

「……ところで美音さん。」

もしかして先程から、貴女は俺にこう……甘えてます？」

ぼむぼむと宥めるように頭に手が置かれて。

「はい、ただ今絶賛スキンシップ中です」

「確か先日、十日分を前倒された気がするのですが」

「それはそれ、これはこれです！」

毎日のように会っていられるならば、アタックを欠かせる訳が無い。

「……仕方の無い人ですね」

溜め息混じりに芹沢は嘆息し、美音が抱き着いていた腕が抜き取られた。

ガーン、と内心ショックを受ける美音の肩にその腕が回され、引き寄せられて。芹沢の胸元にぽすつと彼女の頬が当たる。

「ああ、美音さん。早速ありました」

うぎゃーっ!? と、内心嬉しい悲鳴を上げる美音に、芹沢が穏やかに口を開いた。

「な、何がでしょう」

「セミファイナルに負けたから、今こうやって貴女を抱き締められますね」

「そ、それは何か違うのでは……?」

勝負の中から見えてきたもの、とは違うのではと感じるのだが。

「いえ、れっきとした特典です」

ですが、と何かを言いあぐねるように一旦言葉を切り。

「貴女とこうしていると、俺はそのうち呼吸困難になりそうですが」「え、そんなに圧迫してました?」

体重をかなり預けていた自覚のある美音は、慌てて寄せていた顔を

上げた。

「大丈夫ですよ。そういう意味ではないので」

だが、芹沢から後頭部を押されて再び胸元に押し付けられてしまう。じゃあ、何が彼の呼吸困難を引き起こすんだ、と疑問が浮かぶが、芹沢から優しく抱き寄せられたまま頭を撫でられて、心臓がバクバクしてしまい、言葉にならなかつた。

甘い台詞お題 行くなよ。…寂しいだろ

ファイナル準備期間に入ったが、芹沢は変わらず横浜の菩提樹寮で生活していた。

セミファイナルに敗れたのだから、自分が横浜に滞在する理由はあまり無い。

強いて挙げるならば、ソロファイナルを控えている我が儘俺様部長のお世話といったところだが、別にそれは不本意に強制された義務などでは無く。

東金に忠誠を誓って忠義を尽くす関係などでもない。

要するに自分の意思で彼の命令に従っているのだが、それは決して慈善ではなく、自分にも利があると踏んでいるからに他ならない。東金に付き合っていると面白いから、という面も大きいが。

そして現在の『部長に従う事によって得られる利点』は、満面の笑みで芹沢のお手製のお弁当を食べていた。

「わざわざ天音にまで足を運ばせてしまって、すみません」

学園で集中的に練習中の美音に会いたくて、お昼時にお弁当を持って行くと、そう言って恐縮していたが、食べ始めるとやっぱり笑顔になった。

実に単純だ。あまりにもあどけなさ過ぎて、呆れを通り越して可愛いらしい。

「いいえ、お気になさらず。天音学園も綺麗な学校ですね。」

他校の校内に入るなんて、こんな機会でもないとありませんし」

緑が生い茂る中庭や、広くて大きな校舎を見上げ、芹沢は何でもないと答える。

実際、練習の合間のお昼休憩にどこで待ち合わせて食べようが、毎日のスケジュールは変化するのだから移動自体にさほど不便は無い。

「えへへ、中々綺麗でしょう。
って言っても、校内は寒いんですけどねー」

並んでピクニックシートに座っている美音は、美味しそうにお握りを食べつつ。その姿は、エサを抱えてはぐはぐと懸命に頬袋に貯めている小動物にしか見えない。

「真夏なのに寒いんですか？」

「それはもう。空調はばっちり、校舎内だけ南半球のごとき世界を保っています」

「……それは、エアコンの効かせ過ぎでは？」

美音がにっこりと微笑みながら「夏場は冬の気分が同時に味わえる学校！」などと紹介し。

いくらなんでも、逆に体に悪そうなの室温。

何故、天音の生徒達がこんな熱気溢れる真夏でも学ランなんて持っているのかと思ったら、学園内の空調のせいなのか。

「……その気温が、ベストなんだそうですよ」

ふ、と小さく笑って遠い目をしつつ、彼女は呟く。

「薔薇の」

「……はい？」

人間ではなく薔薇の為の室温などと言われて、芹沢は意味が分からず瞬きをしつつ美音を見つめて問い返していた。
ここは植物園ではなく、学校の筈だ。

「この横浜天音学園は、理事長の薔薇の為の学校なんですよ」
にっこりと、自棄っぽく言い切る彼女。

「そんな冷たい空気漂う校内で冷えた私の心を、睦さんが暖めて下さるって」

そしてそんな訳の分らない甘えた事を言い放ち、がばりと飛び付かれた。

「美音さん、ですがここは空調の効いた校舎の中ではなく、真夏の屋外なので途方も無く暑いです」

まだ食事の途中なのだが、どうしたものだろう。
正直に言えば、たとえ好意を抱く少女であろうとも、暑いものは暑い。
苦しい。

しかしこれが適温の屋内で2人つきりならば、少し……いや、かなり危なかったかもしれない。
今は『暑いな』で圧倒されている脳が、どう働いていたやら。

取り敢えず、おかずを箸で口に運ぶ。味付けは少し濃かっただろうか？

「ガーン……！」

またあつさりフラれた……！」

そう言いながらも、やはり抱き着いたままの美音。彼女も中々めげない人だ。

かなり甘えん坊であるらしい美音は、親しくなるにつれてスキンシップを図るようになってきて。

はつきり言ってしまうえば、これはかなり危ない。性別に関係無く、軽く触れ合う事に無頓着過ぎる。

まさか、俺の知らないところで俺以外の男性にもこんな風に抱き着いているんじゃないだろうな、と心配になる。

貴女にとっては友人同士の些細な戯れでも、大抵の男にとっては異性と交わすこんな行為は下心のもと、だ。……つまりとこる俺も例外ではなく。

「……そんなところで何をしている、姫路」

かなり暑いけれども、突き放す気にはなれずにそのまま美音を放置していたら、中庭にて行われているその姿を目撃して仰天したらしい天音の生徒が2人、こちらへ大股で歩み寄って来て、高飛車に声を掛けられた。

その低い声音に、美音はびくうつ、と震えて顔を上げて。

「ぶ、部長……あ、天宮せんぱ……」

「やあ、姫路さん。

そんな事してて君、暑くないの？」

口調こそ穏やかさを装ってはいるが、天宮はあからさまにこちらに向かって不快げな眼差しを向けてくる。

芹沢はそれには涼しい顔をして真つ向から見返した。

しかし今度は怯えたように、美音からは制服の袖を掴まれた。相変わらず、彼女は天宮氏が苦手らしい。

天宮からは視線を逸して、彼女の目は冥加に向かう。

その後輩の態度に、天宮はしばらく淋しげに美音の表情を凝視していたが、小さく息を吐いて瞬きをすると、元通りの表情に戻る。

人事ながら、これはきつそうだな、と同情めいた感情が過ぎる。

好意を抱く相手から怯えられ避けられるというのは。

しかし、どんなに憐憫を覚えようとも、向こうはライバルだ。美音をみすみす渡すつもりは毛頭無い。

芹沢は天宮から視線を転じて、冥加を見上げる。これが天音の魔王か、間近で相対すると確かに迫力がある。

だが東金と親しくして長いからか、意外とこの手の人種には何か耐性がついていたようだ。

自分でも全く自覚していなかったのだが。

「……貴様、東金の腰巾着か」

ギロリと冥加から睨み付けられても、恐怖よりもその台詞内容が不愉快だと思えない。

「こんにちは、冥加さん、天宮さん。

お言葉ですが冥加さん。俺の名前は『東金の腰巾着』ではなく芹沢睦です。お間違えなきよう」

堂々と言い返すのに、気負いや虚勢を張らずとも普通に声が出る。

あの人に日々こき使われている内に、精神的にかなり鍛えられてい

たとは。流石にうちの部長は偉大だ。

まあ、知らず知らずの内に高圧的な物言いに対して神経が鈍るだとか、こんな偉大さは人間として如何なものかとも思うが。

「ふん。あいつの後輩だけあって、高慢なところまで右に倣えか」

むしろ高慢ちきなのは、目の前のこの冥王様な気がしてならない。

「生憎と、『正しい名前で呼んで下さい』というごく一般的な常識に適った訴えに対して、不当だ傲慢だと不条理に押さえ付けてくるような、当たり前の人権を無視した人種には従う義理はありませんし、礼節を尽くす必要性も感じませんので」

まるで自分は部長の猿真似をするしか悩のない、自らの信念も自我も無い追随者だと言われたようで、人を馬鹿にするなど言い返していた。

さて、いったいどんな怒声が返ってくるかと睨み付ける芹沢の目の前で、

「ふっ……ははははは！」

何故か怒り出すのではなく、冥加から爆笑された。

「……美音さん」

「はい」

こんな態度にはどう反応すれば良いのか分からず、取り敢えず胸元に擦り寄ってくる友人を見下ろしてみる。

「俺は自分では、かなり喧嘩腰だった気がするのですが。」

何故か貴女の部長さんはとても楽しげに笑っていらっしやるのですが、あれは彼の普段通りの言動なのですか」

「そうですねー、うちの部長はかなり面白い人なので。

冥加部長はあの通りの迫力満点な方なので、真っ向からケンカを吹っ掛けてくる人は大好きなんですよ」

「……変わった方ですね」

美音からそんな解説をなされて、どう答えれば良いのか分からず芹沢は無難な呟きを漏らした。

「ええもう、天音学園は変わり者の集まりだと名高いですから。

うちの部長はその親玉ですよ？」

貴女は何故、そんな台詞を自慢気に口に出来るのですか。

確かに、天音の一員である美音もまた、かなり変わった人だ。

「聞こえているぞ姫路。誰が変人だ？」

ふん。類は友を呼ぶというのが、真理のようだな。それとも朱に交わった結果か？」

ようやく笑いを引つ込めた冥加は部員に低く釘を刺し、次いで芹沢を見据える。

勝手に俺まで変わり者扱いしないで欲しいものだ。

「姫路が選んだだけあって、中々気骨がありそうな男だな」

「分かって下さいますか、部長っ」

天音の室内楽部部长と1年生部員は、本人の胸の内には全く頓着せ

ず、何やら芹沢について楽しげに会話を交わし、
「昼休憩にうつつを抜かして、練習に遅刻はするなよ」

そんな言葉を残して、冥加はばさりと学ランの裾を翻して悠然と歩み去って行く。

「やれやれ。これじゃ何をしに来ただか」

何だかんだ言って、結局機嫌良く笑って去って行く冥加の背に一旦チラリと視線を送って、天宮は呆れたように肩を竦めた。
そして彼は芹沢に抱き着いたままの美音を見下ろす。

「あ、えと」

天宮からじつと見つめられて、美音は気まずそうにもぞもぞと芹沢から離れようとする。

それには彼女の背にグイツと腕を回して、逆に抱き寄せた。

「えう、む、睦さん？」

「もう少しこのままでも良いでしょう？」

お昼が終わったら、またすぐ離れてしまふんですから。

美音さんが行ってしまったら、俺は少し寂しいです」

天宮の目を気にしている彼女の意識を、こちらに向かわせるべく。少しばかり小狡い台詞を囁いてやる。

案の定、優しい彼女は頬を染めながらコクコク頷いてくれた。

そんなやり取りに、天宮は目を細めて彼を睨み付けてくるが。

美音が全く離れる様子を見せずに目を閉じて微笑みながら芹沢に甘える様に、やがて無言で踵を返した。

入り込む余地は無いのだと、引き下がれば良い。
誰を敵に回そうとも、俺は彼女を誰にも譲る気は無いのだから。

甘い台詞お題 俺はお前しかいらぬ

天音学園にわざわざ足を運んでくれた芹沢に、美音は何とかお礼をしたいと考えていた。

彼のお手製のお弁当まで頂いてしまっているのに、自分は何も返していないなど、失礼にも程があるではないか。

とはいえ、彼はとても器用な人で、大抵の物事を手際良く捌いてしまっし、何か手頃な物品を欲しがっているとも聞かない。

唯一、芹沢から思い通りにならずにいると聞いた台詞は、

『星奏に勝ちたかった』

『美音さんと舞台の上で競いたかった』

だが、そればかりは美音にはどうにもならない。来年のお楽しみだ。

じーっと芹沢の顔を見つめてみると、彼はどうかしましたか、というようにふわりと微笑む。むうう、何と麗しい人だ。

「睦さん、まだお時間ありますか？」

せつかなので、睦さんに天音の薔薇園をお見せしたいです」

「美音さんに寒行を強いている、その元凶である薔薇園ですね？」

悪戯っぽい口調で尋ねられるので、美音はわざとらしいしかめっ面を浮かべて頷く。

「ええ。我々横浜天音学園の人々の体温を奪った上で堂々と咲き誇る、色鮮やかで華やかな香り高い薔薇を、是非ご覧になって行って下さい」

「それはそれは。とても興味深い薔薇園だ」

くすくすと微笑みながら、芹沢は了承を示してくれた。

校舎の屋上に存在するそこは、いつも穏やかな静寂に満ちている。夏休みで学園内に生徒があまり登校していないのもあるが、そもそもこの場所を訪れる人々も少ない。

「どうです？ この、見渡す限りの薔薇の園に足を踏み入れたご感想は？」

硝子張りの温室の薔薇園にまで芹沢を引っ張ってきた美音は、彼の手を離して軽く数歩、弾んだ足取りで咲き誇る薔薇の小道を歩み、くるりと振り返って両手を広げてみせた。

「……これは……流石に圧倒されますね……」

ここまで広く、大量の薔薇が咲き乱れているとは思ってもみなかったのか、噎せ返るような芳香に包まれて、芹沢は言葉少なげに呟く。美音もまた、彼と共に周囲を取り囲む薔薇に目を細めて。

「もう、綺麗としか言葉が出ませんよね。」

それにしても睦さん、薔薇の中に佇む姿が、とても様になっています。傍らで誇らしげに咲く大輪の薔薇達、そのうちの一つの花弁に指を這わせ、顔を近づけて目を細めて薔薇を愛でるその仕草は、とても優雅で。高貴ささえ感じる。

「そうですか？」

美しい薔薇に向けられていた、彼の眼差しが美音に向けられて、綺麗な人と綺麗な花。そして美しくない自分。

何故か、とてつもなく不釣り合いな場所に無遠慮にズカズカと踏み込んでいるようで、美音は息を飲んで一歩後退った。

「……………どうなさったんですか、美音さん？」

その態度に、芹沢は不審そうに疑問を投げ掛けてくる。

「あの、ちょっと薔薇に囲まれた睦さんが美し過ぎて、クラクラと」「それはいけませんね」

正直な本音でもある言い訳を口にする、芹沢は大腿で歩み寄って来て。美音の手首を掴んだと思ったら、グイッと彼の方へ引き寄せられる。

「薔薇は確かに綺麗ですが、うっかり倒れ込もうものなら棘で怪我をさせていただきますよ。」

美音さんが転ばないように、俺が支えて差し上げましょう」

そうしてにっこりと、意味深に微笑まれた。

……………大袈裟で大仰な言い訳で誤魔化そうしていると、見抜かれる。

そうしてそのまま、薔薇園の散策は手を繋いだままを余儀無くされてしまったのである。

「あの一、睦さん？」

「はい。なんですか美音さん」

自然と上目遣いになって芹沢を見上げると、普段通りの余裕な態度で彼は美音を見下ろしてくる。

どうして彼は、いつもこんなに平然としているのだろう。こちらの方がドキドキさせられっぱなしで、何か悔しい。

「私、いつも睦さんにお弁当を作って貰っているので、何かお礼がしたいんですけど……何も思い浮かばないんです。

睦さん、何か欲しい物とか、私にして欲しい事とかありませんか？」

一人悩んでも、どうにも妙案が閃かないので本人からリクエストを聞き出してみる。

睦さんの周囲からそれとなく聞き出そうにも……蓬生さんからはかわれるのは確実だし、チヨコ様に至っては論外だ。

あのチヨコ様が、まともに取り合ってくれるとは思えない。

薔薇の小道のど真ん中で立ち止まり、芹沢は首を傾げる。

「俺が欲しい物、ですか？」

別にお弁当は、俺が作りたいから作っているだけですよ」

「それでも、私の方が貰ってばかりでは気が引けるんです」

その美音の訴えに、芹沢はうん、としばし思案していたようだが、

「そうですね……俺は、美音さんが隣りに居て下されば、それで良いです」

「えと？」

ただ、一緒に居るだけでは、何の礼にもならないではないか。芹沢はよほど物欲が薄い人物であるらしい。

それとも、人任せよりも自分でなんとかした方が早いと考える人なのか。

彼は美音が知る限り、かなり有能な人物なので実に有り得る。

なんてこった。睦さんはここまでプレゼント選びが難題な人だったのか。

「すみません、睦さん。

それ、全くお礼になっていない気がするんですけども」

「いいえ？ そんな事はありませんよ」

眉をしかめて苦言を呈すると、彼は美音の頭を撫でてきた。

「美音さんは俺の癒しですから。

日々の気苦労でささくれ立った俺の心を、貴女が癒して下さい」

だから是非とも、側に居て下さいませんか、などと言われて。

いつの間にか、自分は俺様部長様に日々こき使われる芹沢の、友人兼ストレス解消要員になっていたらしい。

「睦さんがそれで良いなら、良いんですけど……」

何か、納得がいかない。

「ええ、問題無いです。

美音さんは出来得る限り、俺の側に居て下さいね？」

そんな結論に落ち着く芹沢に、一応は頷き。美音は小道の薔薇を一つ、パキッと折り取った。

勝手に折ったのがバレたら、やはり叱られるかな、との不安もちら

りと過ぎつたが、構いやしないと思い直し。
丁寧に刺を取り除き、芹沢の胸元に飾ってみる。

「うーん、やっぱり睦さんには薔薇がよく似合いますねえ」

流石は華の神南アンサンブルメンバーだ。

無茶苦茶アクの強い東金と土岐の背後に控え気味だが、芹沢本人もまた、華やかな人である事に変わりはない。

「お褒め頂き光栄です、と言うべきなんでしょうかね？」

芹沢は、花が似合う男なんて、うちの部長や副部長だけで十分な気がします、などと苦笑する。

「不恰好で不自然なよりは、ずっとお得だと思います」

今はまだ、私が贈れるものはこれだけしか無いけれど。

幾つも存在する、薔薇の花言葉。その中で。

彼の胸元に差した一重の薔薇が表すのは、『清純な愛』。

そしてピンクの薔薇が象徴するのは、『恋の誓い』。

貴方へ捧ぐは我が想い、我が心。

私の全てを、唯一なる貴方へ。

甘い台詞お題 気付けよ。…本当に鈍感

ただ今、かなり、その場の勢いによる告白が、了承して受け入れられるという結果に落ち着いた告白現場より。

今、俺の腕の中には、普段よりも更に愛らしい格好で、益々可愛らしく頬を染めて恥じらう美音さんが。

今日から彼女は俺の恋人です。いや、自分でもこんな風に告白する予定ではなかったのですが。

「美音さん」

名前を呼び掛けると、彼女はぴくりとむき出しの肩を震わせて、いつものように上目遣いで芹沢を見上げてくる。

「あの、睦さん。私、そろそろ着替えたいな、と」

恥かしそうにおずおずと申し出られた。

確かに、ある意味では目の保養であると同時に毒ですが。

「もうですか？ せっかくの美音さんの可愛らしい姿を、俺にもっと堪能させて欲しいです」

「うえうっ!?!?」

正直に惜しむと、正確には聞き取れないおかしな悲鳴を上げられた。俺の恋人は、相変わらず面白い人だ。

「そっ、それは睦さんはこのドレスを気に入ったって事ですよねっ

!？」

「そうですね。貴女が着ているなら気に入っています。
ドレスそのものには、さほど?。」

何やら慌てふためかれるので、芹沢がわざと美音を褒めちぎる言葉を選んで囁くと、真っ赤な顔をした彼女は無言で彼の胸元に顔を伏せた。

「どうかしましたか、美音さん?。」

「む、睦さんが凄い事ばかり言うから、私の許容量をオーバーしたんです?。」

お願いですからしばらくそっとしておいて下さいっ」

相変わらず顔を伏せたまま、噛み付くような勢いで文句を言われた。

……俺の台詞に一々素直に反応する彼女がとてつもなく可愛いのだが、もうどうしてくれようか。

芹沢は「そっとしておいて」と言い出した恋人の顎に手を添えて、優しく上向かせた。

頬を朱に染め、瞳を潤ませた美音と目が合う。

愛の囁きに慣れず、照れて恥じらう可愛い彼女にはそう、キスを。

ずっと試着室で仲良くしている訳にもいかず、手早く会計を済ませてドレスは発送の手続きをし、2人はブティックを出た。

今日はこのまま家に帰る、と言う美音に、芹沢はそれなら送って行きますと当然の事を申し出る。

しかし、美音は送迎をさせては手間ではないか、などと言い放ってくれた。

それには、芹沢はにっこりと微笑んで。

「おやおや。貴女はまだ分かっていないようですね」

「な、何がでしょう？」

その笑顔の前に、美音は何やらびくびくと尋ねてくる。

おや、どうしてそんな反応をするんでしょうね。

「俺と美音さんは恋人同士です」

きっぱりと言い切ると、美音はもじもじと気恥ずかし気に視線をさ迷わせ。しかし否定はせずに「はい」と同意する。

「つまり、貴女には俺から送り迎えをされる義務と、俺には貴女を送迎する権利が生じます」

恋人の特権とは良いものですね、と告げると、彼女は啞然とした様子で口をぽかんと開いている。

「え……ぎ、義務と権利？」

「はい。要するに『他の男には付け入る隙を与えない』
これも社会通念的なものですか」

美音さんとはとつもなく鈍感ですから、徹底して下さいね？ と念を押すと、彼女の顔には馬鹿正直に『よく意味が分りません』と。

「仕方が無い人ですね。それでは貴女が理解出来るように説明して差し上げますから」

では、歩きながらお話ししますから一緒に帰りましょうね、と『お願い』し。
顔の火照りが中々収まらない美音と手を繋いで、横浜の町並みを並んで歩く。

今日は午前中に降った雨で、湿気が益々増しており。アスファルトに所々出来た水溜まりは、さり気なく彼女の靴に被害が及ばぬように避けて。

「それである、睦さん。

私、何か貴方に嫌な思いをさせてしまっていました……？」

申し訳なさそうに眉を下げて、美音はうなだれた。

「嫌と言うか……かなり不愉快な思いなら」

正直に答えたら、彼女はびくりと身を震わせて黙り込んでしまう。

「貴女は男性にも気安いので、彼らが貴女を見る目や、近過ぎる距離が不愉快です」

「……？ えと、つまり睦さんにも近付き過ぎ引っ付き過ぎ……？」

「俺は良いんです」

「??？」

何を勘違いしたのやら、距離を取ろうとするので繋いでいない方の手を回して逆に美音の体をこちらへ引き寄せると、益々分らないというように困惑気味に表情がクルクルと変化していく。

鈍い人だとは思っていたが、まさかここまでとは。

「貴女に触れるのも、貴女が無条件に微笑みかけるのも、恋人である俺だけで良いんです」

今後は、俺以外の男に抱き着いたり手を繋いだりしないで下さい、と言いつつ聞かせると、ようやく彼女は得心がいったように笑顔が浮かべた。

「睦さん、ヤキモチ焼きさんだったんですね」

……とても嬉しそうにそう言われるのが、可愛くて愛しいのに、小憎らしいのは何故だろう。人間の感情とは、本当に摩訶不思議だ。

どうして俺ばかりが、こんなにも必死になるのだ。もっと貴女も俺の事ばかりに懸命にならなくては、不平等だ。

「ええ、その通りですが。」

俺は貴女に夢中なんですから、当然でしょう？」

慌てずかさず、堂々と。

ここで照れたら負けだ。いったい自分の恋人と、何の勝負をしているのかはよく分らないが。

「俺が嫉妬深くて独占欲が強い事に、今頃気が付いたんですか？美音さんは本当に鈍感ですね……そんな悪い子には、お仕置をしなくては」

歩道のご真ん中で、美音の顔を上向かせて、顔を近づけていく。

さあ、俺の可愛い人。どうしますか？

俺はもういっそ、このまま往來の真っ直中で口付けてしまえ、なん

て。

「まっ、待って下さい睦さっ……………」

半分は彼の望み通りに、美音は恥かしさに耐えきれなくなったらしく、芹沢の顔に手を当ててそれ以上の接近を防ぐ。そして、よろめきながら彼から一步後退り。

「こ、こんなところでそんな事しちゃ駄目です！」

人目も憚らずけしからん、という道德観念には、芹沢も今までは特に異議を覚えずにいたのだが。

どうにも、彼女と一緒に居ると、自分の中の箍が外れやすくなってしまっようだ。

これは…………俺は今、浮かれているからか？

「俺のお仕置を拒否するなんて、美音さんは本当にいけない人だ」

取り敢えず、美音を狼狽えさせる目的は果たしたので、今日のところはこのくらいで勘弁してあげよう。

そう結論付けて、美音に冗談ですからそんなに警戒しないで下さい、と手を差し延べようと…………

ブロロロ…………バシャアッ！

したところで芹沢と美音の傍らを、猛スピードの自動車が通過して行き、水溜まりの水を撥ね上げて行った。

「……………」

「……………」

しばし、2人揃って無言で見詰め合う。

「……………ぶっ……………！」

そして、堪えきれずに芹沢は思わず噴き出していた。

「……………睦さん、ここで笑うなんて酷くないですか？」

私、貴方のコメディアンじゃなくて恋人ですよね？ と、髪からポタポタと水滴を零しつつ、美音は不満気に呟く。

「……………おっ、俺のお仕置を拒否するから、天罰が、下ったんですかね、美音さん？」

必死に笑いを引っ込めようとするせいで声を震わせつつ、芹沢は無理矢理真顔を取り繕いつつ言い返す。

ほんの一步、距離が開いていただけで。

美音はまともに側面から水溜まりの水を引っ被り、芹沢にはなんの被害も及んでいない。

彼女の真っ白な天音の制服が、とんでもない事になってしまっている。

「せつ、制服に染みが出来て、落ちなくなる前に、はっ、早く、帰りましょうか……………」

爆笑寸前の芹沢の提案に、美音は不機嫌そうに唇を尖らせつつ頷いた。

美音の自宅前にまで辿り着いても、悲惨な目に遭ったというのに笑い出された事をまだ根に持っている彼女は、膨れっ面のまま繫いでいた芹沢の手を軽く抓った。

「送って下って有り難うございます。

じゃあまた明日っ」

そう言い捨てて手を振り払い、美音が家の中に入ろうとするので、芹沢は彼女の手首を掴んだ。
振り返った彼女の頬に片手を這わせ、

「そんなにつれなくしないで下さい」

美音の唇に、軽く掠めるだけの口付けを落とした。

「貴女に冷たくされたら、俺はとても淋しいんですよ？」

「……っ、だ、だから睦さん、こんなところで……！」

「大好きですよ、美音さん」

不機嫌そうな表情が、一転して愛くるしく照れたように恥じらう。
あてがった手で優しく彼女の頬を撫でたら、伏し目がちに答えを呟いて。

「私も、睦さんが好きです」

貴女から好きだと言われるだけで、俺はこの上なく幸せな気持ちになる。

甘い台詞お題 可愛過ぎて困る

芹沢と交際を始めて、数日。

お付き合いを開始して以来、何かとてつもなく彼は……美音に甘い。いや、元々彼が優しくくて素敵な人だというのは友人として交流していた頃から、よく知ってはいたが。

ごく稀にみせる、少しばかり意地の悪い一面でさえ素敵だ。私は相当彼に惚れ込んでしまっているらしい。

『おや美音さん。そんなに熱心に俺を見つめてどうしました。可愛がつて欲しいんですか？』

ほわ〜んと思いき浮かべていた芹沢の優しい笑みが、実際に彼が言い出したちよっぴりイヂワルな台詞を脳裏に正確に再生し。美音は自室の壁にがんごんと頭をぶつけた。

彼女は両手を壁についたまま、額をそこに押し当ててそっぴいええ、と思いつ出す。

ヴァイオリンソロ部門のファイナル選考日は散々だった。

当然と言えば当然だが、うちの部長はソロを悠々と勝ち進んでいたので、東日本は横浜天音の冥加。

対して西日本からは、流石は侮れない神南のお菓子様だ。部員達から絶大な信頼と人気を誇る、カリスマ部長様方の対決となる選考会。

応援に駆け付けた、天音室内楽部部員と神南管弦楽部部員。

要するに、その日は自分と芹沢は敵味方に分かれ。実際に美音本人

が彼と戦った訳では無いけれども。だからこそ、余計に彼に近寄れなかった。

いや、冥加部長の演奏はやっぱり凄かったし、応援のし甲斐はあったけれども。

何かこう、敵対する立場から引き裂かれたロミオとジュリエットを連想したら、

『お前がジュリエットなんつータマか、小猿娘。

お前なら死んだフリする前に、自分で剣振り回して敵対者をぶっ倒して、ロミオを力づくで拐つてめでたしめでたし、だ』

などと、氷渡に呆れられてしまうし。

変な事を思い出し、むむむむ……と、壁に額をぐりぐりと押し付けて唸っていると、携帯が軽やかな着信メロディを奏でた。

ベッドにごろんと寝転がり、ピッと通話ボタンを押して耳にあてがう。

「はい、もしもし」

「今晚は、美音さん」

相変わらず、優しい声音が耳に甘く響く。芹沢は本当に、どうしてこんなに美音の胸を締め付けるのだろう。

「睦さん」

彼に抱き着く代わりに、手近にあった抱き枕をぎゅっとしてみた。うつつ、やっぱり何か微妙に淋しさが埋まらない。

「そんな声を出して、何かありましたか？」

美音を気遣うように、彼は電話越しに穏やかに問い掛けてくる。

「睦さん、明日デートして下さい」

ちゃんと我慢しなくちゃならない、それを考えたら独り占めしたくなつたのです。

神戸に帰って欲しくないだとか、離れたくないだとか、もっとたくさん抱き締めてちゅーして欲しいだとか。

そんな我が儘、睦さんに正直には、言えないけれども。

「ええ、構いませんよ」

美音の自分勝手な急な要望に、忙しいとも都合がつかないとも言わず。

どこへ行きましようかと、さも当然のように承諾して選定に入る。

うつつ、なんて出来た人物だ。私には本当に勿体ないほどの素敵な彼氏だ。

凄く楽しみなデートの約束を取り付けて、少しは淋しさが紛らわされた。

だって、明日は睦さんとたくさん一緒に居られる。睦さんが側に居てくれるのなら、別にわざわざ何処かに出掛けなくても私は満足なだけで。

「それで、何かあったんですか？」

何だかんだ言いつつ、芹沢は美音に何かあったのではと、食い下がってくる。

「何でもないんですよ。
ただ……睦さんに会いたくてたまらなくなったところで、タイミン
グよく電話が掛かってきたから」
「俺に会いたくなっただけ？」

自分でも情けない理由を上辺の部分だけ白状すると、気のせいだろ
うか、彼は少しばかり弾んだ声音で尋ね返してくる。

「はい」

私はいつだって、貴方に会いたくて仕方がないです。

「それでは、今から向かいますね」

「……へ？」

電話の向こうから、突如会話の流れの掴めない台詞が聞こえてくる。
……私が会いたくなっただけ、睦さんが今から向かう？

「では、一旦切りますね」

「え、あ、はい」

こちらの返事が向こうに聞こえたのかどうか。
えと、どうして急に電話が切れたのかな？

まずはとにかく落ち着け、私。

睦さんはだからえっと、どっかに移動するから一旦切った訳で。
何でそんな事になったかって、私が睦さんに会いたい言ったから、
じゃあ行きますねって事で。彼の移動の目的地は、つまり私の家か。

な〜んだ、ほら、落ち着いて考えたら答えなんて簡単に出るじゃな

……っ！？

そこまで考えたところで、美音は慌ててベッドから跳ね起きた。

ちよつと待て。

睦さんが家に来る？

美音の自室は二階にあり、階下の家族の様子をそーっと窺うと、まだ皆様ばっちり起きていらっしやるご様子。

……ヤバい。睦さんがうちの家族に見つかったら非常にマズい事になる！

緊急極秘ミッション：家族に見つからないうちに、こっそりと玄関を出よ。

美音は携帯と玄関の鍵を手に、そろそろと静かに移動しつつ、目立つ音を立てぬよう、ゆっくりと自室のドアを閉める。普段はさして気にもとめていなかったが、築十数年の扉の蝶番はキィーと微妙な音を立てて開閉した。

びくっつと、体を震わせて階下の様子に耳を澄せるが、特に誰かが二階にやって来る様子は無い。

ゆっくり、ゆっくり、一歩づつ床を擦るような足取りで階段へ向かう。

とにかく、なんとしてでも発見されてしまう訳にはいかないのだ。誰かに……特に母に！ 見咎められようものならば、一巻の終わりで。

最初の難所である階段を、そろそろと腰を屈めて下りる。呼吸一つとっても、油断は出来ない。

誰かの注意を引き付けぬよう、浅く、短く。気配は極力消し。

忍だ。今だけで良い、私は、今日この時だけくの一になるんだ！

何とか一階に辿り着き、階段の影から玄関口付近を見渡す。

ここが最大の難所だ。

この山さえ越えれば、ゴールである玄関はすぐそこだ！

耳を澄せて気配を窺い、誰もこちらには来ない事を確かめ……逸る気持ちを抑えて、そろそろと三和土に放り出してあるサンダルに足を滑り込ませる。

このサンダルが曲者だ。

音を立てぬよう、細心の注意を払う必要がある。しかし、裸足で玄関から飛び出る訳にはいかない。

ゆっくりと玄関の鍵を開き、掛かっているチェーンを静々と……くっそ、音を立てないようにチェーン外すの激ムズいっ！

美音は最後の難所、チェーンとの格闘にわぬ時間を取られて内心毒吐きつつ、何とかミッションを完了したのである。

外から鍵を閉め直し。玄関のドアに背を凭れ、ズルズルと体が沈んでゆく。いかん、ひと安心して気が抜けた。

ほーっと安堵の溜め息をついたところで、街灯が少ないせいで結構暗い道路の向こうから、人影が駆けてくるのが見えた。

通行人かなと、あまり気にせずぼんやり姫路家の門扉の辺りに視線をやっていると、その辺りで人影が立ち止まった。

玄関の光に照らされて、人影が闇からその姿を浮かび上がらせる。

「今晚は、美音さん。

わざわざ玄関先で待っていて下さったんですか？」

走ってきたせいか、少し息が上がっている芹沢は門扉に手を置いて、ふわりと微笑んだ。

とことこと彼の側に歩み寄って、美音は芹沢の手を引っ張って門扉を出て、隣家との塀の間の狭い裏路地に引っ張り込んだ。街灯と部屋からの明りで、照明も十分あるし。

ここなら、多分ふと窓の外を眺めた程度では見つからない。

「だって、睦さんがうちに来るなんて言うから。」

こっそり部屋から抜け出してきたところなんです」

ぽすっと彼の胸元に抱き着いて頬擦りし、小声で囁きかける。

「……俺が美音さんの家に来ては、何か不都合な事でも？」

こんな時間に訪ねては、やはり何かと問題でしょうか」

何か後ろめたい事でもあるのか、それとも美音さんのおうちは男女交際に厳格な家風なのですか？ と不思議そうに尋ねてくるので、美音は深く溜め息をついて首を左右に振る。

「逆です。うちの親は『恋は良いぞ。どんどんするんだぞ？』とか子供に向かつて言うような人なので。」

うちの家族に見つかったら、睦さん確実に周囲を包囲されて質問責めに遇いますよ。」

いつから付き合ってるのか、とか」

自分の母親が、一番上の兄の恋人（当時2人はまだ中学生）に向かって突如『どんな結婚式にしましょうか？』などと尋ねていた、幼少期の衝撃的な記憶は美音の胸に新しい。可哀相な長兄は、その後彼女から『家族が重たい』とか言われてフラれたらしい。

甘酸っぱい交際からいきなり結婚にまで話が飛躍するなんて、それや確かに重たいわ。

私も親がアレなせいで、睦さんからフラれるのは御免被りたい。

兄よ、貴重な教訓を有り難うございます。妹は貴方と同じ轍は決して踏みません。

「質問責め……それは確かに怖い」

あまり本気にしていないのか、芹沢はくすりと笑みを零す。

彼は美音の頭に手を置いて、いつものように優しく撫でてくれた。

「貴女は周囲からたくさん愛されて育った人なんですね。

だからでしょうかね。貴女の側に居るのは自然と居心地が良い」

額に軽く口付けが落ちてきて、美音は目を閉じて芹沢の温もりに包まれた。

「睦さんが私の隣に居るのが苦じゃないのなら、私は嬉しいです」

睦さん、大好き。そう囁くと、彼は「俺もです」と返して口付けてくれる。

ああ、こんな幸せが永遠に続けば良いのに。

「それにしても美音さん。

今夜は随分刺激的なファッションですね。

もしや俺の為に、わざわざそんな魅力的な服を身に付けて下さったのですか？ 大胆な人だ」

芹沢との口付けにぼわ〜んと幸せに浸っていた美音に、彼は唇を離

して僅かに彼女との間に空間を開いて頭から爪先まで見直し、そんな謎の台詞を告げる。

美音は自らの格好を見下ろして……自室で寝仕度を調べて気を抜いてゴロゴロしていた為、思いつき寝間着姿である事に気が付く。芹沢を家族に発見される訳にはいかないと、それしか頭に無かったので着替えていなかった。

「えっと、パジャマのままでした。すみません」

気まずい思いをしながら、見苦しい格好を見せてしまった事を謝罪する。

セミアイナル前に、予想外に芹沢の部屋着姿を目撃して、恥かしい思いをさせてしまった罰だろうか。

確かに、きちんとした服装だけを見せたい相手には、このハプニングは目茶苦茶恥かしい。

「……パジャマ、なんですか」

何か、じーっと興味深そうに見つめられて、益々気恥ずかしい。

「あの、そんなに変ですか？

睦さん、私がこんな格好してるの、お嫌ですか？」

単なるシンプルなチェック柄のキャミソールと短パンの一揃いなのだが、やはり恋人との逢瀬には甚だ相応しくないのだろうか。

「いいえ？ ただ美音さんがとてつもなく可愛過ぎて、非常に困っているだけです」

「え？ 可愛いと、困るんですか？」

可愛いって、褒め言葉だよなあ、と首を傾げる美音の首筋に、芹沢は身を屈めて顔を寄せてくる。

「ええ、とても困りものです。

俺は貴女の恋人ですよ？」

こんなに愛くるしい無防備な姿で、俺を誘っているんですか？」

「さ、さそっ……！？」

単なる蒸し暑い夏用の薄手のパジャマ姿なのに、それは誘惑しているのか、などと悪戯っぽく尋ねられ、美音は呆然と固まってしまった。

彼の熱い吐息がうなじにかかり、くすぐったさにぴくりと震える美音の両肩に手が置かれ、首筋に彼の唇が触れる。

どうしようもなくくすぐったくて逃れたいのだが、芹沢はゆっくりと首筋を唇で辿って下りてゆく。

「睦さん、ホントにくすぐった過ぎてヤバいです」

プルプルと震えつつ、笑い出しそうになるのをなんとか堪えて、やめて欲しいと懸命に訴えると。鎖骨の辺りでようやく芹沢は唇を離してくれた。

「くすぐりたい、ね」

美音の胸元から顔を上向かせて彼女の顔を見上げ、彼は小さく笑みを零す。

なんだか、睦さんが今まで見た事無いよーな類の笑みを浮かべてら

っしやるんですけど。

「美音さん、そんなに怯えた顔をしないで下さい。

いくらなんでも、俺はこんなところで貴女を襲ったりなんてしませんよ?」

「お、襲つ……!?!?」

およそ、芹沢の口から出るとは考えも及ばなかった種類の単語が飛び出て、美音は酸欠状態のように口をぱくぱくとさせるが、衝撃が強過ぎて声にならない。

「おや。大丈夫ですか美音さん?」

元凶でありながら白々しく尋ねつつ、芹沢はそのまま唇を重ねてきて。薄く開かれていた彼女の口の中に滑り込んでくる、熱い何かに舌を絡めとられた。

水分を含んだ小さな音が、やけに耳にはっきり届く。

擦り付けられる柔らかい感覚に、思考まで絡め取られたように、頭の芯から痺れてくる。

どうしたら良いのかも分からぬまま、散々翻弄されて。ようやく解放された時には、最早頭の中は真っ白。

全身に力が入らなくて、ガクガクと頼りなくふらつく美音の体は、芹沢の両腕でしっかりと抱き留められた。

「そんなに可愛い姿を男に見せたらこうなってしまうから、気をつけて下さいね?」

ですから俺以外には絶対に見せてはいけませんよ、美音さん」

優しく微笑む恋人の、私の知らなかった紳士の裏側に潜む性質が、今宵は少しばかり滲み出たような気がします。

甘い台詞お題 "・愛してる"・だけじゃ足りない

硝子の向こう側に燦々と降り注ぐ夏の太陽の日差し。

建物の内部にはクーラーが効いており、非常に過ごしやすい。

本日は可愛い恋人と、ショッピングモールでデート。

普段はお互い制服姿だが、今日は俺の為に、一生懸命にお洒落をしてきてくれた彼女の私服姿は非常に可愛い。

とても楽しい一時……の、筈のだが。

「こんにちは姫路さん。奇遇ですね」

「やあつ、姫路さん！」

「こ、こんにちは」

「……よお」

「あーつ、今日の美音、目茶苦茶可愛い格好してる！
なになに、芹沢さんとデート！？」

何故、至誠館の人々がここに居る。

もしも、この場に居たのが彼らだけだったならば、八木沢が「偶然」
だと言い張る言い分を、限り無く疑わしいグレーに出来たのに。

「よおプリン。」

奇遇じゃねえか」

「あらま。ほんまやわー」

非常に空々しい。

うちの部長と副部長が、何故この場に居るのだ。

これは最早確定的に黒だ。間違いなく、俺と美音さんが今日ここでデートをするのを知った上で、彼らが集まってきたのだ。

目を円くして集った面々を見渡す美音。

芹沢はうつかりと至誠館のメンバーに彼女をかつ拐われぬよう、美音と手を繋いだまま東金に低く問い掛けた。

「……部長、いったい何のおつもりでしょう？」

「シヨッピングモールで、何のつもりも何も無いだろう？
買い物だ」

高級嗜好の東金からこの言い分は、とてつもなく嘘っぽい。

「あー。ひよつとして、東金さんは八木沢さんとの旧交を温めようとして、横浜の観光も兼ねて、至誠館の皆さんとお買い物と一緒に？」

物事を良い方向に捉えようとする傾向のある、芹沢の可愛らしいが微妙にぼやつとした恋人は、とてつもなく呑気な推測を述べた。

「ええ、そうなんですよ。よく分かりましたね」

すかさず八木沢が口を挟んで、その美音のかなり無理がある予想を拾って採用する。

東金は否定も肯定もせず、ただニヤリと笑うのみ。

……これは、もしや。

「副部長」

「何や、芹沢クン？ どうやら今日は、神南と至誠館の交流日っち

ゆー事になつたらしいで？」

「……部長と一緒に、俺で遊んでいますね？」

そう低く確認すると、土岐は実にわざとらしく驚いた表情を浮かべてみせる。

「それで、情報源はどこですか。俺は今日の予定を誰にも言っていないのですが」

ギリギリと歯ぎしりしつつ、どこから漏れたのだろうと原因を突き止めるべく問う。

デートの予定が立ったのは、昨日の夜だ。現在時刻は午前十時、その短い間にどういった経路を流れた。

「菩提樹寮は壁が薄いと、神出鬼没の報道部員が嘆いていたなあ？」

東金は楽しそうに、やれやれ困った困ったなどと手を振る。

……昨夜の美音さんの電話を、誰かさんに盗み聞かれていたようだ。

既にソロファイナルも終えて、多少時間に余裕が生まれた事で、暇つぶしには丁度良いと、東金は土岐を引き連れて後輩の困る姿を見物しに来たのだろう。なんて人だ。

芹沢が自らの部の手強い部長・副部長と対決している間に、美音の方は至誠館の人々から盛んにアピールを受けていた。

「せっかく、夏休みに久々に会えた友人ですからね。

この機会に一緒に皆で遊ぶのも良いかと思ひまして」

「ほへー、部長そんな事を考えてらしたんですかっ。
俺はてつきり、まだ挽回の余地があるからだと……モガッ!？」

八木沢の言に感心したように頷いた新が、何かマズい事を滑らせかけたらしく、大慌てで狩野が口を塞ぎ、背後では伊織がおろおろし、火積が無言で拳骨を振り下ろしている。そんな傍らの部員達の言動に、全く動揺した様子も見せずに変わらぬ笑みを美音に向ける八木沢。

……ほお。挽回の余地、ですか。

ひくり、と頬がひきつるのが自分でも分かる。

「どうでしょう、姫路さん。貴女も、この夏にうちの水嶋とは久々に再会されたのでしょうか？」

彼も、このまま夏が終わる前に、貴女ともっと一緒に過ごしたいと常々言っておりますから。僕らとご一緒しませんか？」

「え？」

八木沢の誘いに、美音は戸惑ったように新に視線を送る。

姐上の当の本人は『え、部長。俺、そんな事言いましたっけ?』と言いたげなぼかんとした眼差しを八木沢に向ける。

彼の発言は一見、まるで部員思いの親切な心優しい部長の、気配りからの台詞のよう。

美音が友人として、新と長らく非常に親しい交友関係を築いてきた事を巧みに利用した上での、何とも断りにくい誘い文句。

ここで下手に断ったら、数年来の友人を簡単に無碍にして恋人の方をあからさまに優先したと、冷たく友達甲斐の無い人間だとレッテ

ルを貼られて友情に亀裂が入り兼ねない。

特に女性の場合、どちらかという友人よりも恋人を優先する人間は数多いが、それも場合によりけりだ。

美音がとても困ったように、芹沢を見上げてくる。

鬼だ。流石はうちの部長と幼少期から親しくしているだけはある。

自らの後輩を名目に利用する事すら躊躇せず、なんて機転の利く人物なのだろう、八木沢氏は。

だが、芹沢が思わず天を仰ぎなくなったその時、妙な救いの手が差し延べられた。

「こんなところに居たか、姫路」

カツカツと靴音を響かせ、真っ白い学ランの裾を翻し、天音の魔王が微妙な集団目指してモールの出入り口である広いロビーを、大股で歩み寄って来る。

その彼の背後には、天宮、氷渡、七海を従えて。

……何故、彼らまでここに居るのだろうか？

「え、ぶ、部長？

こんなところに、って……」

今日はアンサンブルの音合わせの日じゃありませんよね？」

傍らの美音は、自らの部の部長がアンサンブルメンバーを引き連れて登場した事に、心底から仰天して声がひっくり返っている。

「ああん？ 冥加じゃねえか。

ソロソロとまあ群れて、何しに来たんだお前？」

先日彼と競い合ったばかりの東金が、好敵手の姿に目を輝かせて早速話し掛けている。

何だかんだ言っても東金は冥加を認めているので、会えば口喧嘩を吹っ掛けずにはいられないらしい。

その点については冥加の方も同様なのか、

「東金か。ふん、貴様とこんな場所でまみえるとはな。

このモールに、過剰な華美を好む貴様が足を踏み入れるなどと、いつの間にかここは落ち着いた上品さを失ったのか？」

彼は嬉々として東金に喧嘩腰の台詞を投げ付ける。

本人達は実に楽しそうな言い争いだが、相変わらず聞いているこちらの方は何か心臓に悪い。

「美音」

「よー、小娘。

俺らが来る前から足止め食らってるとは、相変わらずお前は見事なトラブルメーカーぶりだな」

「七海……氷渡先輩……」

東金と火花を散らした冥加はさておき、彼らの背後を大回りしつつ、美音の友人である七海と氷渡が傍らにやって来る。

「いったい、何がどうなってるの？」

天音のメンバーまで人のデートを邪魔しに来るとは、今日は厄日か？

「お前、今日枝織さんとデート服選んでただろ？」

枝織さんから話聞いて、冥加部長がエキサイトしたんだよ。

あんだ、うちの部長に何かしたのか？」

前半は後輩に、後半は芹沢に向けて。氷渡が説明してくれるが、そんな事を尋ねられてもこちらとてよく分らない。

先日会った時、冥加に言い返した事が不興を買ったのだろうか。

「ごめん、美音。」

オレ1人じゃ冥加部長と天宮さんは止められなくて」

七海は心底申し訳なさそうに、友人に向かって両手を合わせ。

「って、氷渡先輩は止めて下さらなかったんですか？」

取り敢えず、謝罪する七海よりも矛先を氷渡に向ける辺りに、美音の友人に対するヒエラルキーが見え隠れする。

「ああ？ 部長をお助けするならともかく。」

何で俺が、部長の行動を阻止せにやなんのだ？」

その美音からの訴えに、先輩は心底から不思議そうに彼女を見下ろして尋ね返す。

「ひ、氷渡先輩。私、貴方の友達じゃないんですか？」

ガーンッ！ と、体を傾けてショックを受ける彼女に、

「お前との腐れ縁ごとき、横浜天音学園室内楽部の一員である事実の前には、塵にも等しい関係だ」

氷渡は、よく分らない説を唱えた。部員だからなんだと言うのだから？

「ああ、なるほど」

「それは確かに、仕方が無いかも……」

が、首を捻る芹沢を余所に、横浜天音学園室内楽部部員1年生幼馴染みコンビは、その氷渡の主張のどこかに何やら強い説得力を見出して、心底から納得して言いくるめられている。

……天音学園は、本当に変わった人々が集っているようだ。

俺の恋人は、まだまだ奥が深いなど、感心なのか呆れなのか分からない感慨を抱いた芹沢。

それはともかく、ある程度東金と言い争って人心地ついた(?)のか、冥加の眼差しが改めてこちらに向かった。

「姫路、聞いたぞ貴様。

その芹沢と交際を始めたそうだな」

「は、はあ……」

うちの部長は突然何を言い出すのだろう、と頭上に疑問符を浮かべる美音、冥加はギロリと芹沢を睨み付けて来て、今度は彼に畳み掛ける。

「無論、真剣な交際なのだろうな。

姫路は我が天音室内楽部アンサンブルの一員だ。

ファイナルを控えたこの大事な時期に、遊び半分でうちの部員に手を出したりすれば、ただでは済まさんぞ」

意外と部員思いの部長だったのか、冥加玲士。

まるで娘の身を殊の外案じる過保護な父親のようだ。

「ははは、冥加は素直だなあ」

彼の隣りでは、天宮が何やら微笑ましげに部長と美音を交互に眺めやっている。

わざわざデート場所にまで乗り込んで来て、俺の気持ちが真剣かどうか、だと？

本当に天音の人々は変わった人種だらけだ。

「遊び半分のつもりは全くありませんよ、冥加さん」

どうしてこんな、大勢の人々の前で、公開告白をする羽目になったのか。それもこれも、俺の想い人が様々な人々に愛される少女だからか。美音の頭を撫でてやりつつ。

これで諦めの悪いライバルが追い払えるならば、それでも良いか。

「俺は美音さんが好きですから。

愛してる、以上の好意を伝える言葉が何かあれば良いと思うほど」

隣りの彼女は俺の言葉に頬を真っ赤に染めて、全身を硬直させている。

「その言葉に、嘘偽りは無いな？」

眉間に皺を寄せたまま、冥加は低く問うてくるので頷いて肯定を示す。

ここは人通りも人目もある、ショッピングモールの出入り口なのだが、いつまでこの晒者状態にさせられるのやら。

「ならば芹沢。貴様、我が横浜天音学園に転校して来い」
「……は？」

冥加の唐突な申し出に、流石に芹沢は意味が分からず瞬きを繰り返した。

硬直していた筈の美音は、冥加のその言葉に「おお、流石は部長っ」などと、感心したように。

「……てめ、黙って聞いてりゃ好き勝手抜かしやがって……」

冥加、芹沢はうちの部員だ！ この俺の目の前で堂々と引き抜こうなんざ、100年早え！」

「せやなあ。芹沢が欲しいやなんてお願い、聞けへんわ」

冥加の唐突な勧誘に、ブチツと東金の堪忍袋の緒が切れたらしく、芹沢と冥加の間に割り込んで来る。

土岐もうんうん、と部長に同調して。

ううん。普段からこき使われて散々遊ばれているが、俺はそれなりにうちの部長達から大事にされていたらしい。

まさか、代えを探るのが面倒な便利な道具扱い、ではないよな？

「むしろ、プリンを神南が貰い受ける！ 大人しく寄越せ！」

「へ？」

そして今度は、東金の方が冥加に宣戦布告を叩き付けた。

その言葉に、美音は意表を突かれたのか、口をぽかんと開いて東金を見つめ。

激しく「こちらに寄越せ」合戦を開始した部長達から一步下がって。

「美音さん。だいぶ時間を食ってしまいました。デートに行きましようか」

「え。いい、良いんでしょうか」

美音は困ったように言い争う冥加と東金の方に視線をやり。

「そう簡単に決着が着く議論ではありませんからね。

彼らに付き合っているのは、日が暮れてしまいます」

そんな後輩の言い分に、呆れたように幼馴染みを眺めていた土岐は、笑みを浮かべはするが引き止めようとはしない。唇だけで『行ってらっしゃい』と促す。

まだ挽回の余地がある、と踏んでいたらしい至誠館のメンバー（新以外）は、大多数の人々の前で臆する事無く堂々と惚気た芹沢に、奥ゆかしい傾向のある彼らは奇異なものを見る眼差しを向けてきていて。

そして美音の友人である七海、新はあまり気にした様子も無く、『またね』と手を振っている。

芹沢と目が合った天宮は、東金と言い争う冥加を諫めるでもなく、『さっさとどこかに行ったら？』と言わんばかりに肩を竦めてみせ。

彼はさあさあと彼女を促して、ショッピングモールに足を踏み入れた。

全く。ようやく美音さんとデートが出来る。

そろそろと余計なのがついて来られては、せつかくの楽しい時間が台無しだ。

芹沢は美音の頭を撫で、彼女の耳元に顔を近付けて、今日の服も可愛らしいと褒めた。

「本当は、俺が真つ先に口にする筈だったのに。先を越されて悔しいです」

水嶋新、彼も中々侮れない少年だ。

「む、睦さんの為に選んだんですから……だから、貴方が気に入って下って嬉しいです」

ふわりと微笑む美音、彼女と繋いだ手から伝わり合う互いの温もりで、幸福が溶け合って一つになるようだ。

俺のこの想いを言い表すのに、『愛している』だけではきっと足りない。

甘い台詞お題 もう、遅い。お前が悪いんだからな

芹沢とショッピングモールで、ウィンドーショッピングデートを楽しんだ美音は、手を繋いで帰路についていた。

気に入ったのなら、買って差し上げましょうか？ と、当然のように申し出てくる恋人を説き伏せるのにちよつと苦労したが。

本当に必要なものならばともかく、贅沢品嗜好品を買うのはきちんとした理由が必要であると思う。

「睦さん、良かったらうちに寄って行きませんか？」

美音のお茶の腕前は芹沢には遠く及ばないが、猛特訓しているお菓子作り、昨夜はスイカのジュレを作って冷蔵庫に冷やしておいたのだ。

彼の口に合うかどうか、かなり心配だが……もっと芹沢と一緒に居たい。

「美音さんのおうちに、ですか？ ですが昨夜、貴女のご家族はとも大変な方々だと仰られていますでしたか？」

芹沢は不思議そうに瞬きをして見返してくる。

美音はヒラヒラと手を振り、

「今日はうちの親、泊まりがけだとかで家に帰って来ないんですよ。ですから、気兼ねなく上がって下さい」

「……」

何故か、遠慮は要らないと説明したのに、芹沢は余計に戸惑ったように美音を見下ろして溜め息をつく。

「……念の為に、お尋ねしますが。」

まさか今日は、美音さんがお一人でお留守番されるのでしょうか？」

「そうですね？」

何ですか睦さん。私、いくらなんでも留守番すら出来ないほど、幼くはありませんよ」

1人では危なつかしい、とでも思われたのだろうか。彼は自分をどんな風に捉えているのだろう。何も出来ない赤ん坊か？

「……それなのに、俺を家に上げる気ですか？」

彼から低く問われて。

そんなに、芹沢は美音の家には足を踏み入れたくはないのか。見た目からして彼の感性にはそぐわないのか、もっと一緒に居たいと思っっているのはこちらだけなのか。

「睦さんが嫌なら、別に無理強いはしません。」

それじゃあ今日は有り難うございました」

不貞腐れた気分を表に出さないように努力をしたが、あまり効果が上がっているとは言いがたい。

ぷいっと顔を背けて身を翻し、自宅の玄関に歩み出そうとしたら、芹沢から手を掴まれた。

「待つて下さい、美音さん。」

貴女は何か誤解をしているでしょう。俺は、貴女の家が上がってみたいと思っていますよ」

「じゃあ、どうして……」

不服を滲ませて上目遣いに睨み付けたら、軽くちゅーされてしまう。

「……誤魔化そうとしてますね」

むうっ、と唇を尖らせて美音が文句を言うと、芹沢は額に手を当てて深々と溜め息を吐いて。

「……貴女は、本当にどうしようもなく鈍いですね。

俺は、散々警告しましたからね？」

「はあ？ ああ、それで睦さん、寄って行かないんでしょうか」

何か芹沢から注意されただろうか。意味が分からなくてもう一度尋ねてみると、

「お邪魔します。後からそんなつもりはなかったと言われても、聞きません」

「……？ 睦さんを誘ったのは、私の方ですよ？」

何かを吹っ切ったかのような、淡々とした声で寄って行く事を告げられた。

美音には勝手に押し掛けて来た、なんて文句を言い出すつもりは毛頭無いのに。

玄関のドアを開いて、彼を招き入れると、芹沢はこくりと首肯する。

「ええ。いつだって、美音さんが俺を誘うんですよ」

リビングに彼を通して、冷蔵庫からジュレと、冷たい麦茶を出す。

芹沢は興味深そうに、ソファに腰掛けたまま周囲を見回している。

「そんなに面白い物なんて、何かありますか？」

テーブルの上にお盆を置き、彼の前にお茶とジュレを差し出す。取り合わせが合うかどうかは、この際二の次で！

「ええ、それはもう。美音さんが育ったおうちですからね。とても気になります」

「そんな、珍妙なところなんて何も無いと思いますよ。」

睦さん、これ、私が作ったんです。お口に合うと良いんですけど」

ジュレを勧めると、芹沢は頂きますと両手を合わせて。

スプーンで半液状のジュレを掬い上げ、口に運ぶ。

「……うん。とても美味しいですよ、美音さん」

じつくりと味わっていた彼は、優しく微笑んで美音の頭を撫でてくれた。

「うつつ、やっぱり睦さん好きーっ！」

我慢出来ずに飛び付いて甘えて頬擦りすると、彼は驚いたようだが、

「仕方の無い人だ」

くすくすと笑い声を漏らし、抱き締め返してくれる。

「甘えん坊さんは、猫のように喉をくすぐったら、ゴロゴロと鳴くんですかね？」

頭を撫でてくれていた手が、冗談めかして喉をくすぐってくる。

「えっと？ ゴロゴロ」

明らかに人間が発している単なる擬音の発音だが、戯れついているのには変わりが無い。

目を閉じて甘い鳴き声（？）を上げていたら、不意に芹沢から口付けられた。

彼の首に両腕を回して、優しく啄むように唇が触れ合って。

「ね、睦さん」

ふと瞼を開くと、芹沢のいつもの綺麗な瞳と至近距離から視線が交わった。

「何ですか、美音さん？」

切れ長の目がゆっくりと瞬いて、ポーツと見とれてしまう。

「部長が誘ってましたけど、睦さんいつそ天音に来ちゃいます？」

離れたくない。いつそ、彼が横浜に暮らしてくれたら良いのに。

「俺が天音に編入、なんて考えた事も無かったですね」

「校舎は寒いですけど、カリキュラムは充実してると思いますよ？」

理事である冥加が実力を認めて引き抜いてきた人材となれば、横浜天音学園に入学する事それ自体はすんなりと進むだろう。東金の様子から察するに、神南から出る事の方が、遥かに難しそうだ。

「それなら、美音さんが神南に来てみますか？」

神戸も良いところですし、設備も教師陣も充実してますよ」

「私が神南に、かあ……」

それはそれで素敵だが、何しろ美音は特待生だ。

特待制度とは、要するに優秀な生徒を学校に確保する為の制度であり、深く考えた事は無かったが途中で転校なんてしても良いものなのかどうか？

手塩にかけて育ててきた人材を、横から引き抜いていくなど、人道上どうなんだ？

そんな風に懸念が過ぎる時点で、迷わず飛び込んで行くだなんて、もう出来ない。

「私も睦さんも、結局は今通ってる学校が気に入ってるんですね」

なんか勧誘は無理っぽいや、と呟くと、

「俺では貴女の心を動かす理由にはなりませんか？」

「睦さんにしか、私の心は傾きませんよ？」

つんつん、と頬を軽くつつかれた。

今あるもの全て、その中からただ芹沢だけを選んで彼の下へ行く。

それはきつと、幸せで素敵な事だろうけれど。

でも、人として捨てるべきでは無いものも、きつとある。

それは、きつとお互いによく分かっている。

「美音さんも、中々頑固な人だ」

「私達、損な性格なんですかね？」

芹沢はやれやれと肩を竦めてみせた。
私も貴方も、しがらみや現実を、愛着も無視出来ない。

「そうかもしれませんね」

夏は残り僅か、別れの時間が刻一刻とにじり寄って来るけれど。
今はまだ、貴方を抱き締めていられるから。

「それに、私が出たいって言ったなら、睦さんの方から私に会いに来てくれるんですよね？」

セミアイナル前夜に交わした約束を持ち出すと、彼はふわりと微笑んでくれる。

「ええ、勿論。何処からでも駆け付けますよ。

……俺の都合のつく限り」

やっぱり最後の一言が付け加えられて、美音は声に出して笑った。
自分の恋人は、やっぱり素敵な人だ。

大好きだ〜っ！ と、内心で叫んで抱き付いている美音の両肩が芹沢によって軽く押され。

ん？ と、疑問に思っている間に、視界が回転して天井を映す。そこに覆い被さられて、唇が重ねられ。

睦さんにぎゅってされてちゅーするの、幸せ、と幸福感に満たされている美音を、芹沢は微笑みを浮かべて見下ろして。彼女の頭を彼の手は優しく撫でて、そして彼はゴソゴソと彼女の服のボタンに手を掛け始めた。

「むっ、睦さん!？」

「いったい何をしてるんですか!？」と、仰天して起き上がるうとしたら、両手首を頭上で押さえ付けられて、そのままソファの上に縫い止められた。

「もちろん、離れがたい可愛い恋人との楽しいデートの続きですよ」「え、え?」

「デートの続き? それは確かに、まだ2人でらぶらぶしたいから、睦さんにうちに寄って行かないかって誘ったけど。」

「何で私の服を脱がす必要がっ!？」

片手でボタンを外していく芹沢に、器用だなおかしなところで感心を抱きつつ。

彼は今、何か見覚えのあるにつこりとした笑みで、彼女を見下ろしている気がする。

「あの、む、睦さ……?」

「いけませんね、美音さん。俺は昨夜、きちんと言い聞かせたのに。貴女には、もっとしっかりとした自覚を促す必要がありますね」

やっぱり片手で器用にネクタイを緩める芹沢を、美音は呆然と見上げて。

「あのっ、私、そんなつもりじゃ……?」

「そんなつもりではなかった、という主張は聞き入れないと言っておいた筈です」

ええええっ！？ という美音の悲鳴は、芹沢から唇を塞がれてしま
って声にならず。
彼の舌が歯列をなぞり、奥へと縮こまっていた彼女の舌を引っ張り
出してしまふ。

これはいったい、どうして毎回こうなってしまうのだろう。彼と交
わす、恋人同士のキスは、いつも霞がかかったかのように、美音の
思考を鈍らせてゆく。

思考が停止している美音が固まっている間に、たっぷりと深い口付
けを楽しんだ彼は、唇を離して耳元でそっと囁く。

「貴女のお部屋はどこでしょう？」

それとも、ここでこのまま続けます？ と、芹沢はふふと笑みを零
しつつ、とんでもない二択を突き付けてくる。

「あの、や、止めるって選択肢は……」

「ありません。もう遅いです。」

俺を散々煽った、貴女が悪いんですからね？」

ちゅっちゅっつと口付けが顔面に降って来て。

美音が観念して「二階です」と答えると、彼女の体はソファから抱
き上げられた。彼の肩に腕を回して、目を閉じる。

あれ。私、驚いてはいるけれど、全然怖くはないな。

……ああ、そうか。

丁寧な運び方からも、そつと気遣ってくれてて。睦さんが、私の事
を凄く大事にしてくれてるのが、ちゃんと分かるから。

階段を上がって、美音が指差した部屋のドアを開く。

そうして真正面に置かれていたベッドの上に、彼女は横たえられた。

「睦さん大好き」

緩められたネクタイを軽く引っ張って、キスをせがみつつ彼に囁いたら。

芹沢は熱っぽく彼女を見返してきて。

「俺もです」

交わす口付けは、甘くて熱い、夏の味がした。

恋結び

どういふ顔をすれば良いのか分からない。可愛い恋人にみつともない姿は見せたくない。

こういった緊張感も適度にある方が、物事は良い方向に向かうのだろう。

今の問題は、気恥ずかしさと何を話せば良いのか分からないという切実なもの。

いや、美音さんについて知りたい事はまだまだたくさんあるのだけれど。

どう会話を持っていけば良いのだろうか。

芹沢のそんな躊躇いなんてお構いなしに、美音は実に素直な力の抜けた笑みで、

「むつみさん」

彼の名を囁きながら抱き着いてくる。

甘えて擦り寄ってくる美音を抱き締めると、それだけで満たされていくような幸福感。

そうか、困る事なんて何もない。

ただ、貴女が好きだと伝えていけば良いのだから。

「美音さん、大丈夫ですか？」

だいぶ、無理をさせた自覚がある。

現に、彼女の甘く柔らかい声が嘎れて掠れてしまっていて、かなり喉に負担をかけさせてしまった。

芹沢は彼女の頬に口付け。

「お水を持ってきますね」

優しく彼女の髪を梳いてやってから、名残は惜しいが身を起こした。

「そ、それなら私が……」

「いえ、貴女はまだ横になっていて下さい」

どことなく眠たげな表情でとろんとしていた美音が、芹沢の言葉に慌てたように起き上がるうとするのを制して、ズボンを拾い上げて素早く身に着けた。

初めて訪れた人様のおうちをウロつくのは常識的に考えて如何なものかとも思われるが、可愛い恋人を疲労させてしまった挙句、彼女の家だからと大人しくしているのは申し訳ない。

キッチンに向かい、冷蔵庫を開けてみると、麦茶や牛乳、ミネラルウォーターのペットボトルと並んで冷やされている、カルピスの原液。

甘党な彼女らしいと、思わず笑みを零して。

甘い飲み物の方が良いだろうか？ と少し迷ったが、取り敢えずミネラルウォーターのボトルを2本取り出した。

再び階段を上がって彼女の部屋に戻ってみると、ベッドの上で何やらシーツを頭から被ってミノムシ状態の恋人がもそもぞしている。

「美音さん、お水を持ってきましたよ。」

何をなさってるんですか？」

ベッドに腰を下ろして、頭と思しき辺りを撫でると、彼女はシートから顔を出した。

「うつうつ……なんでそんなに睦さんは平然としてるんですかーっ」

芹沢の恋人は、頬を真っ赤に染めて何やら彼の所行に納得がいかなと訴えている。

彼は首を傾げて、取り敢えず美音のほつぺたにペットボトルを軽く当ててやると、相当喉が渴いていたらしく、迷わずシートから手が伸びてそれを掴んだ。

「まさか美音さん……今更、気恥ずかしくなっただんですか？」

直後は甘えてきて、どうして今なんだ。少しタイミングが遅くないか？

呆然と瞬きする彼の眼差しを気まずそうに受け止めつつ、彼女は身を起こしてペットボトルの蓋を開ける。

焦ったようにゴクゴク、と一息に飲んで噎せた。相変わらず、お約束な展開を裏切らない人だ。

「大丈夫ですか美音さん？」

咳き込む彼女の背中を撫でてやっているうちに、なんとか落ち着いてきたらしい。

「うつうつ……情けない恥ずかし過ぎる……!」

美音は中身を飲み干して空になったペットボトルを手にしたまま、
ばふっとベッドに俯せになって枕に顔を埋めてしまった。
ジタバタと両手がベッドの上を忙しく叩く。

恥かしがる姿まで何かのコントのように笑える人だ。
しかし……

「美音さん、そんな態度を取られたら、俺は貴女から嫌われてしま
ったのかと不安になります」

正直に言うと、単に構って貰えなくてつまらないだけだが。

彼女から懷かれて擦り寄せられる事に、どうやら自覚しない間にな
り慣れてしまっていたようだ。

目の前に居るのに抱き着いてこないのは、何かこう……物足りない。

「き、嫌ってなんていません！」

案の定、単純なところのある芹沢の可愛い恋人は、シーツを吹き飛
ばす勢いでガバツと起き上がると、ベッド脇に腰掛けていた彼に飛
び付いてきた。

捕獲完了。

「私は睦さんが大好きです！」

「俺も好きです、美音さん」

同情や気を引く為に紡ぎ出された俺の台詞に、あっさり引っ掛か
つてくれる純粋な貴女が可愛くてたまりませんよ？

美音を抱き上げて膝の上に座らせて頭を撫でてやると、彼女は体を
伸ばしてきて。すりすり頬擦りされた。

……どうしよう、純朴な少女を騙している犯罪者になってもなった気分

だ。

何かほのかな罪悪感が芽生えてくる。

そんな葛藤を知らない美音は、不思議そうに瞬きをしたかと思えばギョツと芹沢の背中に腕を回して抱き着いてくる。

「私、睦さんに抱き締めてもらえると、すごく幸せです」

恥じらいがちに頬を染めながら、愛くるしい笑みでそんな言葉を。

「それなら、たくさん抱き締めてあげないといけませんね」

「わ〜いつ」

無邪気な可愛い貴女に、俺はこの調子でいつまでも翻弄され続けるのだろうか。

それもまた、悪くはない。

けれど、今日は知ってしまった。

貴女の暖かな温もりと、抱き締めて一つになる喜びと幸福感。知らずにいれば、離れた距離でも堪えが利いただろうか？

離れる前に、俺のものに……そんな浅ましい望みのもたらした結果は、益々可愛い恋人の側から離れがたくなって。

「このまま貴女を神戸に連れて帰りたいですね」

ギョツと抱き締めて囁く、紛れもない本心。

「ええ？ だ、駄目ですよ」

「俺は、貴女よりも少しばかり欲張りです」

美音が目をパチくりさせて戸惑うので、芹沢はちゅっと音を立てて口付け笑う。

「美音さんは遠距離恋愛に納得されていましたが、
どうやら俺は、とても諦めが悪いようです」

残り短い夏の間、貴女の考えを変えさせて、この港町から盗み出す予告を。

すっかりと日が落ちた暗い夜道を歩いて、芹沢は寮へと帰寮した。

あの後、キッチンを借りて夕食を作って美音に食べさせてやり、二人で一緒にお風呂に入って存分に可愛い恋人といちゃいちゃして……
……いっそのまま泊まってしまいたかった。

だが、明日の早朝には家人が帰宅する、などという予定を聞かされては、躊躇もする。恋人の身内と出くわす可能性が高い。

初対面の印象が、家人が留守の際に泊まり込んでいた男、というのは甚だ心証が宜しくない。

……やはり親御さんには、清い交際であると装わなくては。

涙を飲んでお休みなさいのキスをして彼女の家を辞した彼は、現在の寄宿先である菩提樹の玄関を潜る。

「おつかえーりなさい」

「……ただいま帰りました」

玄関ホールにて、芹沢が口を開く前に、待ち構えていたように寮母

さんが両手を広げて声を掛けてきて、何かこう妙に脱力する。取り敢えず玄関先を陣取っている彼女を避けて、その脇をスタスタと歩いて行くと、

「ああつ、またしても今日も全敗！」

などと悶えている。

ここの寮母さんはどうして、こつもおかしな出迎えをしようとするのだろう。

「今帰りが芹沢。

よし、茶を淹れる」

ラウンジのチェアに踏ん反り返っていた東金が、目敏く芹沢の姿を見掛けてそう命じてくる。

外から帰ってきたばかりの人間を、遠慮なくこき使うその横暴さ。流石はうちの部長は常々尊大だ。

「はい」

東金の命令をこなすのは、芹沢が自分の好きでやっている事だが、この人からあれこれと言いつけられ、それを完璧にこなしてみせるのは妙にやり甲斐がある。これも一種の習慣だろうか。

しかし、部屋に荷物を置きに行く余裕ぐらい与えて欲しいものだ。

仕方がなくチェアの脇に置いて、苦笑しながらいつものようにキッチンに向かう。

その背中に、土岐から声が掛けられた。

「芹沢くん、お夕飯は食った？」

部長にこき使われて、お腹を空かせているのに食いつばぐれてはいないかと気を遣ってくれたようだ。

「はい、外で食べて来ました。

今日の茶葉はキーマンでよろしいですか、部長」

「デインブラにしる」

この人は何かの嫌がらせのように、何が飲みたいのかその日の気分は毎日変わる。

芹沢としてはミルクティーが飲みたい気分だったのだが、今夜の部長はアイスティのストレート気分らしい。

視界はティーポットの中で茶葉が対流にのって舞う姿を映しているのだが、どうしても考えてしまうのは美音の事ばかり。

彼の名を呼ぶ愛らしい姿と声が脳裏に過ぎって、溜め息が漏れた。お茶を飲んだら、また彼女に電話をしよう。

十分に蒸らした紅茶を、目一杯氷を入れた人数分のグラスに注いでお盆に乗せる。

ラウンジに持って行くと、待ち構えていた東金が「ご苦労」と労う。グラスを手に取り、中の氷でカランと涼やかな音を響かせつつ、

「それで芹沢、明日の朝は赤飯か？」

「……はあ？」

意味不明な質問を投げ掛けてきた。東金は別に、赤飯が好物ではなかった筈だ。

この人は突然何を言い出すのだろう、と瞬きして見返すと、

「本人に作らせるのは悪いやろ。」

さ、それよりじっくり話して貰おうか、芹沢くん？」

反対側からは土岐が笑顔で口を挟んでくる。

「根掘り葉掘り聞き出す気満々だな、蓬生」

「そないな言い方せんといて、千秋。」

可愛い後輩がなんや困ったたら可哀相やん？

先輩として、しっかりアドバイスしてあげんと」

「部長、副部長。いったいなんのお話でしょう」

二人に左右から詰め寄られるような形で、芹沢は困惑しつつ尋ねた。彼らがこの手の明るい表情を浮かべている時は、何か嫌な予感がひしひしする。

「何ってお前、そんなプリンと同じ甘ったるいシャンプーの匂いをさせながら帰って来ておいて、聞くまでもないだろうが」

……あ。

浮かれた気分できて、そういった事にまで頭が回っていなかった。注意深い人間になら、どういった経緯でなのかを察して当然ではないか。

「千秋、姫路ちゃんのシャンプーの匂いなんて、よく覚えとんね」

「あいつ、近寄ると甘い匂いがすんだよ。」

記憶と匂いってのは結び付けやすいもんだ」

彼らが会話を交わしている隙に、幼馴染みの友人同士である部長副部長から、芹沢はそろそろと距離を取ろうと……

「おい、どこへ行く気だ芹沢？」

「芹沢くん、話はまだ終わっとらへんで？」

両脇からがつちりと掴まれてしまった。

この二人の事だ。

何もかも白状させられて、何かとんでもない情報や技法やらを、面白半分に伝授させられてしまつに違いない。今までの数々の有り難い講釈は、本日とてつもなく役立ったけれど。

が、彼らからのテクニカルなお話を今から聞くのは、何かこう……毒のような。

ただでさえ芹沢は美音の事ばかりが頭の中を占めてしまつのに、これ以上そつち方面のご講義を賜つたら、頭の中が可愛い恋人とのそれで支配されてしまいそうだ。

「そうそう、それで、プリンは勧誘できそうか？ ん？」

部長としては、その点も気になるらしい。
いきなりディーブな話題から入られても困るが。

「目下、交渉中です」

勧誘については、彼女は大変手強い。

「なら、姫路ちゃんをもつとメロメロにさせて、芹沢クンの側から離れられんようにさせたらなあかね」

土岐は笑顔でとんでもない一言。

思わずアイスティを吹き出しそうになった。

「蓬生が言つと、洒落にならねえな」

「なんでやるか、俺はごく普通の手段を提案しただけやん」

……副部長が本気になったら、容赦なく相手を心身共にメロメロにし、離れられなくさせてしまつらしい。

と、その時ラウンジの磨り硝子のドアが開いて、寮母さんが入ってきた。

その手には、編みかけのレース編みと糸と針。

……どう考えても、誰が入ってくるかも分からないここで、この手の話題は相応しくない。

「あ、みんな美味しそうなの飲んでる！

良いな〜」

彼女は先客に気が付くと、テーブルの上のアイスティに目をやって溜め息。

これは、寮母さんの分も淹れてあげた方が良さだろうか？

「寮母はん、味見してみます？」

土岐がにっこりとそんな彼女を手招きし、寮母さんは嬉しそうに近寄ってきた。

はいどうぞ、と差し出された土岐のグラスを受け取って、なんの躊躇いもなくストローを口に含んで一口啜る。

「……美味しい！ うわ、ホントに凄い美味しい！

芹沢君っ、やっぱり君、うちの子にならない！？」

くわつと目を開きつつ輝かせて、テーブルの上にグラスを置いた寮母さんは、芹沢の両手を手に取り、大真面目に叫ぶ。

「遠慮しておきます」

毎回のそれには即座に断りを入れると、彼女は目に見えてがっくりと肩を落とした。

人の手を勝手に握っていた両手が、力無く落ちる。

「またフラれた……芹沢君って、手強いよね。」

それとも単純に、神南高校が素敵な学校なの……？

フラフラと身を揺らしながら、寮母さんは持ち込んだレース編みを手に食堂の方へ向かう。

どうやら、会話の邪魔をしないようにと気を遣ったらしい。

「……ものの見事に、華麗にスルーされたな、蓬生。」

明らかに、お前よりも芹沢の方に関心を寄せられてるぞ？

「千秋、傷心の男心を抉るような真似はせんといて」

……え、副部長の趣味が分からない。それは単なる冗談半分の軽口……だよな？

「芹沢くん、場所を移してじっくりと話し合おうや？」

が、何やら先ほどまでの面白がっていた雰囲気は薄れて、何かこう、目が笑っていないんですが、副部長。

寮母さんの登場で、有耶無耶のうちに話題が流れて逃げられるかとも思ったが、甘かったらしい。

「そうだな、部屋に連行するか」

芹沢は部長副部長から両脇から立ち上がらせられて、問答無用ですりずりと男子寮の方へと引き摺られてしまう。

……俺は電話を、美音さんに電話を掛けたいんですが、部長、副部長。

しかしどうにも、逃げ出す隙が見当たらない。

どうにかチェアの脇に放置していた荷物を拾い上げられたのは救いだろうか。

恐れていた通り、寮の東金の部屋に連れ込まれた途端、根掘り葉掘り聞き出され、あれこれとアドバイスをされてしまい。

そんな最中に、美音の方から芹沢の携帯に着信がきて、「プリンに免じて釈放してやろう」などとニヤニヤされながら解放……有り体に言えば東金の部屋から追い出された。

「もしもし、睦さん？」

「美音さん、電話して下さって、本当に助かりました……」
「へ？」

……助かったけれど、彼女の声を聞いていたら、益々会いたくなくなってしまう。

そして、もっと、彼女の全てが欲しくなる。

明日も明後日も明々後日もその先も、また必ず貴女に会いに行きます。

そして貴女を抱き締めて、幸せを噛み締めよう。

物分かりの良過ぎる貴女が、俺の側から離れられなくなるまで。

恋紡ぎ

高校一年生の夏。

美音に初めての恋人が出来た。

彼の名は芹沢睦。神戸の神南高校に通う、一歳年上の優しい少年である。

基本的にはお互いの学校に通ったまま、神戸と横浜で遠距離恋愛を続けていこうと考えていた美音だったが、芹沢の方はそれはそれは熱心に彼女を彼の故郷に連れ帰ろうとしており……そして先日、それを了承するような返事をしてしまった。

「お前はもう少し、物事を落ち着いて考えてから行動したらどうだ？」

こちらの切実たる悩みに対し、我が親友にして心友たる七海の率直な言はそれだった。

「どうせオレは安直で考え無しのバカだよ！」

と、ヤケ気味に反論したら、

「美音。地が出てる」

「……つく！ あー、どうせ私は七海みたく慎重じゃないですよ、っだ」

七海は軽く表情をしかめて、言葉遣いについて冷静に指摘してきた。

いついかなる時にすっかりと地が出て失敗しないと限らないと、七海は常日頃から細々と注意を促してくれている。乙女修行は成長してから強引に矯正した成果なので、美音は油断するとすぐに地が出てしまうのだ。

すっかりと恋人の芹沢の前で乱暴な言葉遣いをしてしまったら……と思うと、眩暈がする。

あの穏やかな紳士の事だ。面と向かつては動揺を表には出さないに違いないが、内心では強く落胆するに違いない。

そして、さり気なく距離を測り、こちらを気遣いながらも遠回しに別れの意図を伝えようとするのでは……

「別に悩む必要なんかねえだろ？」

お前が行きたいなら行きゃあ良いじゃねえか」

怖い想像にズーンと落ち込んでいた美音は、氷渡からアドバイスにもならない投げやりな台詞を告げられて、溜め息をついた。

美音が関西の神南高校に勧誘を受けた事は学園内でも噂が広まりつつあり、彼女本人としては、出来ればこのまま天音学園に通っていたいのだが……

「氷渡先輩は、私を引き止めたり惜しんだりはしてくれないんですか」

「ああ？ 何で俺がんな事せにやなんのだ？」

冥加部長から命じられたならともかく、姫路の人生に口出しする権利も義務もねえぞ」

「冥加部長からのご命令があれば、他人の生き様に口を挟むんですか……？」

「当たり前だ」

「氷渡先輩はブレないなあ。
オレも頑張ろうっと」

全く迷う様子も見せずに即答する氷渡に、感銘を受けた様子で「よしっ」と、拳を握って決意を新たにする七海。

「と、という事はやっぱり、仮に私が転校するとしたら、冥加部長のお許しが必要、という事ですね……」

「どっちにしろオレ達は特待生だから、理事長……は海外だから無理として、理事会を仕切ってる冥加部長の許可は必要だろ」

「契約違反って、どんなペナルティーがあるんだろうなあ？」

今までの学費を一括で倍額にして返済とか、最悪裁判沙汰になったりしてな」

「氷渡先輩。明らかに楽しんでいません？」

ニヤニヤ笑いを浮かべる先輩様を軽く睨み付けるが、問題の氷渡は全く気にした様子も見せない。

特待生として入学するに際し、何らかの手続きや誓約書だか契約書にサインをした筈なので、やむを得ず反故にする際の文言にも目を通した筈、なのだが……

問題は、美音にそういった書類の記憶が全く無い、という事だ。保護者である親がサインしたのか、自分の記憶力が悪いのか？

「それで？ 美音は何でまた転校する、だなんて約束したんだ？」

「野暮だな七海。神南の設備に惹かれた……つーのが建て前で、理由なんざオトコに決まってるじゃねえか」

「氷渡先輩、バツサリ言い過ぎです……」

「氷渡先輩、どうして先輩はその慧眼を他の事で発揮なされないんでしょうっ？」

「嫌味か小猿娘」

いつも通り、どんどんもとの話題から脱線していく会話。七海は軌道修正を測るべく、「それで！」と、やや声を大きくする。

「確か、この前まで遠距離恋愛頑張るとか言ってたな？」

「それがその……なんか、言わされたというか、嵌められたというか」

「強制か。そりゃ頂けねえな」

美音の煮え切らない回答に、七海は首を傾げて氷渡は目を細めた。

彼女は頬を染めて、もじもじと両手の指を絡めて居心地悪そうに顔を伏せ、その時の状況をポツポツと語った。

美音の口から芹沢がいかなる手段を用いたのか、を聞かされた七海が顔を赤らめてはったりと机の上に伏せ、氷渡は頭痛を堪えるように頭を抱え。

部室内に居合わせていた部員達が、背後で転んだり机にぶつかったり泣きながら部室から駆け出すような、そんな説得方法を芹沢はとった訳だが、美音本人はにわかには騒がしくなつた部室を不思議そうに見渡していた。

「……良いか、姫路」

「はい？」

苦虫を噛み潰したような表情で氷渡から名を呼ばれて、美音は先輩を見上げて首を傾げた。

「お前がそれなりに垣根が低いのはよく分かった。が！ それとこれとは話が別だ。」

今後その手の話題は女同士だけで話せ」

「はあ……枝織ちゃんにはまだ早いと思いますけど……」

困ったようにそう生返事を返す後輩に、氷渡は机の上につ伏したままの七海をビシツと指差し、

「この通り、七海にも早え」

「なるほど」

先輩の正当なる訴えに、美音は納得して頷いた。

「よし、姫路。

卑怯な手段で言質をとられたお前に、この大先輩様が一つアドバイスをしてやるっ」

「はい？」

「以前、冥加部長も仰っていただろう。芹沢に天音に來ないか、と目には目を、埴輪には埴輪を。同じやり口で勧誘し返してこい」

「ええええっ!？」

氷渡の示唆に、美音本人だけではなく、七海までもが仰天してひっくり返りかけた。

けれど大先輩様は、ベタなボケにも咄嗟にツッコミを入れられない程『美音には無理だ!』という驚きを示す、そんな後輩達を平然と見返していたのである。

そして翌日。

学園内でファイナルに向けて午前中にアンサンブル練習を終えた美音は、恋人からお昼ご飯に誘われて、芹沢が暮らしている菩提樹寮へと足を向けた。

冗談とも本気ともつかない氷渡のアドバイスの有益性の真意はともかくとして、流石にあんな事を自分でやり返すのは無理だ。

ぶんぶん頭を振って雑念を振り払った美音は寮の玄関前にてチャームを鳴らし、応答を待った。

「いらつしやいませ美音さん、ようこそお越し下さいました。

本来ならば俺の方からお迎えに上がるべきところを、呼び出して貴女に足を運ばせてしまつて失礼しました」

数秒も待たずに玄関のドアが開かれ美音が口を開く前に、出迎えてくれた芹沢から滔々と歓迎の挨拶を寄越されてしまった。

美音が口を挟もうにも、芹沢の腕が彼女の腰に回って抱き寄せられ、愛おしげに頬を撫でられて間近で微笑まれば、心臓が極限まで騒いで声も出ない。

「さあ、こちらへどうぞ」

あうあう、と口をパクパクとさせている美音を彼は促して、寮の中へと誘う。

そのまま彼女は菩提樹寮のキッチンに案内された。そこには小さめのテーブルとイスが2脚あって、その上には二人分のランチが用意されていた。

芹沢は優雅にイスを引いて、美音を座らせ、

「今日の献立は、美音さんのお好きなオムライスにしてみました」

そして彼は正面の席に落ち着き、微笑みながらそう解説してくれる。どう見ても出来たてにしか見えない、ホカホカと湯気を立てるとるところ卵のデミグラスソースオムライス。

先日、芹沢から好物を尋ねられた美音は、正直にオムライスが好きだと答えた。

寮に呼ぶなんて珍しいと思っていたら、どうやら芹沢は、お弁当箱に詰めるようなものでは美味しさが半減だろうからと、わざわざ作り立てを用意してくれたらしい。

「有り難うございます、睦さん！」

美音は菩提樹寮の玄関を潜る前の悩みをすっかりと忘れて、パツと表情を華やがせて料理上手な恋人が作ってくれた大好物を、大喜びで食べたのである。

「美味しいですか、美音さん？」

「はい！」

「それなら美音さん。これからも俺が毎日ずーっと貴女にご飯を作つて差し上げますから、ちゃんと俺の側に居て下さいね？」

「はい！」

「約束ですよ？」

「は………あっ」

またしても同じ手口で約束を交わしそうになってしまった美音は、ハツと我に返つて慌てて自分の口を手で塞いだが時既に遅し。

今回はこの流れで、「それならば神戸にまで来て下さるんですね。嬉しいです」などと言われてしまったのだ。

「どうしました、美音さん？ オムライスはまだ残っていますよ？」

そんな美音の様子を眺めつつ、実に優しい笑みを浮かべて、芹沢は「食べないんですか？」と、穏やかに尋ねてくる。

恋人からがつちりと胃袋を支配されてしまった美音は、彼にご飯やお菓子を目の前にぶら下げられたら、何にでも頷いてしまう。この調子で、芹沢に色んな弱味を握られてしまうのも、時間の問題だろう。

無理です、氷渡先輩っ！

私に睦さんの胃袋を支配するとか、あまつさえ天音学園に通ってくれるよう頼むなんて、逆立ちしたってできっこありませんっ！

「はい美音さん、あ〜んして下さい」

「あ、あーん」

いつも通りの穏やかな笑みと共に、美音の口元に差し出されるスプーン。大人しく口を開きつつ、彼女は完全陥落状態な自分を自覚していた。

いつそ泣き落としかしたら、睦さん絆されてくれないかしら……
いいや、彼はそんな甘い人ではない。

「睦さん大好き」

「俺もですよ」

彼を恋慕う気持ちを伝えるべく、幾つも紡ぎ出す愛の言葉を駆使しても、どう足掻いたところで芹沢を言いなりになんかさせられる訳がない。

「貴女は本当に可愛らしい人ですね。」

今、俺達は2人つきりだとちゃんと分かっているんですか？」

なぜならば、美音が口にするよりも、彼の方が彼女の心臓を爆発さ

せる破壊力満点の台詞を幾つも告げてくるからだ。

「今日もたくさん抱きしめてあげますよ、美音さん？」

そう言っつて微笑む彼の表情に、普段は隠している艶やかさを垣間見
て、美音は顔が熱くなるのを感じながらそつと視線を逸らした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6964w/>

濃密な真夏の物語

2011年11月16日16時28分発行